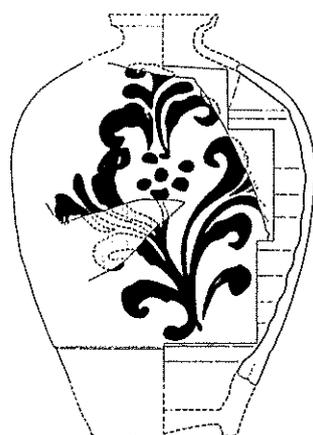


大宰府史跡発掘調査報告書 VI

平成20・21年度



2010

九州歴史資料館

大宰府史跡発掘調査報告書 VI

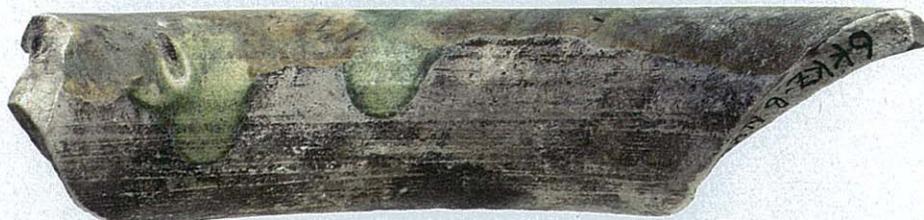
平成20・21年度

2010

九州歴史資料館



(1) 觀世音寺出土高麗鉄絵青磁梅瓶



(2) 觀世音寺出土唐三彩



觀世音寺出土褐釉陶器壺



觀世音寺出土褐釉陶器壺

序

本書は、大宰府史跡第8次5ヶ年計画第2・3年次の計画調査として、平成20年度および21年度に実施した大宰府史跡の発掘調査についての報告書です。

本書には、この間に行われた調査成果のうち、当面の間、正式報告書が刊行されない地区を対象とした調査や、すでに正式報告書が刊行された地区を対象とした調査についてのみ掲載したものであります。さらには、過去の正式報告書に掲載できなかった重要遺物等についても、掲載する場を設け、調査成果の遺漏のなきように努めているところであります。

さて、平成20年度は、昭和43年に大宰府史跡の本格的な発掘調査が開始されて40年目の節目の年でありました。当館では、「大宰府史跡発掘調査40周年記念事業」といたしまして、シンポジウム「古代都市・大宰府の成立を考える」や、(財)古都大宰府保存協会との共同開催による企画展「天平追想—古代都市・大宰府の栄華—」等を開催し、大宰府史跡の調査研究のこれまでを振り返り、平成22年度における当館の小郡市への移転も含め、今後の大宰府史跡調査研究のあり方を見据える良い機会となりました。

また、平成21年度からは、大宰府史跡・蔵司地区の計画調査を新たに開始すると共に、昨年刊行しました『水城跡』に引き続き、大宰府政庁周辺官衙跡の正式報告書作成につきましても、地区ごとに随時刊行を進めて参ります。

最後に、発掘調査にあたりましては、大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ、文化庁・大宰府市教育委員会、さらには地元の関係者各位から多大な御指導と御協力を頂きました。ここに記して深く感謝いたします。

平成22年3月31日

九州歴史資料館長 西谷 正

例 言

- 1 本書は、平成20年度および21年度に福岡県教育委員会が国庫補助を受け、九州歴史資料館が実施した大宰府史跡発掘調査の年次報告書、大宰府史跡発掘調査報告書の第6集にあたる。
- 2 本書には、五反田地区の緊急調査として実施した大宰府史跡第201次調査、九郎田地区の緊急調査として実施した大宰府史跡第202次調査、日吉地区の緊急調査として実施した大宰府史跡第207次調査、観世音寺境内西辺域の現状変更に伴う調査として実施した大宰府史跡第203次調査を掲載している。

また、観世音寺境内出土遺物報告の補遺、ならびに大野城跡災害復旧事業において採取した炭化物の炭素14年代測定の結果と所見についても掲載している。

特別史跡水城跡の計画調査として実施した水城跡第40次補足調査、第45次調査については、平成20・21年度に刊行した『水城跡』に既に報告しており、また、政庁前面広場地区の緊急調査として実施した大宰府史跡第200次調査、第168-2次調査、第204次調査、第206次調査については、本年度刊行予定の『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅰ』に掲載するため、これらの調査については、本書には掲載していない。

なお、蔵司地区の計画調査として実施した大宰府史跡第205次調査については、現在整理中であるため、次回報告に譲る。

- 3 発掘調査は、大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。
- 4 本書掲載の遺構実測図は、Ⅳ2掲載図を除き、学芸調査室調査班岡寺 良が作成した。
- 5 本書掲載の写真のうち、遺構は岡寺が、遺物は福岡県教育庁文化財保護課北岡真一が撮影したものである。
- 6 出土遺物の実測は、土器・陶磁器・瓦埴類については、岡寺が、墨書土器については学芸調査室小田和利が、土製品・石製品・鋳型等については岡寺と学芸調査室調査班小嶋 篤が、金属製品については小嶋が行った。出土遺物の整理・復元作業は、発掘調査事務所において大田千賀子・中田千枝子・市川千香枝が行った。
- 7 本書掲載図面の浄書は、高田いく子が行った。
- 8 本書の執筆分担は以下のとおりである。

I		小田
II	1～3 第201・202・207次調査	岡寺
III	1 第203次調査	岡寺
	2	小田（墨書土器） 岡寺（経緯・土器・陶磁器） 小嶋（土製品・石製品・金属製品・鋳型）
IV	1	杉山真二（ 関 古環境研究所）
	2	小澤佳彦（福岡県教育庁文化財保護課）

- 9 本書の編集は、岡寺が行った。

目 次

	頁
I 緒 言	1
1 調査計画と組織	1
(1) 調査計画	1
(2) 調査組織	2
2 調査の経過と概要	3
(1) 平成20年度	3
(2) 平成21年度	5
3 その他.....	6
II 大宰府跡の調査	
1 第201次調査（五反田地区の緊急調査）.....	9
(1) 調査概要	9
(2) トレンチ設定と基本層序	9
(3) 出土遺物	10
(4) 小 結	10
2 第202次調査（九郎田地区の緊急調査）.....	11
(1) 調査概要	11
(2) 第202次調査	11
(3) 第202-2次調査	13
(4) 出土遺物	14
(5) 小 結	16
3 第207次調査（日吉地区の緊急調査）.....	17
(1) 調査概要	17
(2) トレンチ設定と基本層序	17
(3) 出土遺物	18
(4) 小 結	18
III 観世音寺境内および子院跡の調査	
1 第203次調査（西辺域の現状変更に伴う調査）.....	19
(1) 調査概要	19
(2) トレンチ設定と基本層序	19
(3) 検出遺構	20
(4) 出土遺物	20
(5) 小 結	22
2 観世音寺境内出土資料の追補	23
(1) 報告の経緯	23
(2) 報告資料の概要	23

Fig.24	観世音寺出土墨書・刻書土器・陶磁器実測図(2)(1/3)	33
Fig.25	観世音寺出土土製品・石製品・金属製品等実測図(1/2・1/3)	34
Fig.26	測定結果の較正曲線	40
Fig.27	猫坂礎石群地区周辺地形図(1/600)	42
Fig.28	猫坂礎石群地区A区崩落部土層立面見通し図(1/250)	43
Fig.29	測定結果の較正曲線	45
Fig.30	主城原礎石群地区周辺地形図(1/800)	46
Fig.31	主城原礎石群地区A区崩落部土層立面見通し図(1/60)	47
Fig.32	主城原礎石群地区B区崩落部土層立面見通し図(1/90)	48
Fig.33	主城原礎石群地区C区崩落部土層立面見通し図(1/90)	48
Fig.34	測定結果の較正曲線	49

Tab. 目 次

	頁	
Tab. 1	平成20年度調査計画表	1
Tab. 2	平成21年度調査計画表	2
Tab. 3	大宰府史跡調査研究指導委員会委員	3
Tab. 4	大宰府史跡現状変更申請対応状況表	7
Tab. 5	大宰府史跡発掘調査実施表	8
Tab. 6	観世音寺出土掲載遺物一覧	35
Tab. 7	放射性年代測定結果	39
Tab. 8	年代測定の結果	44

PL. 目 次

巻頭PL. 1	(1) 観世音寺出土高麗鉄絵青磁梅瓶	(2) 観世音寺出土唐三彩
巻頭PL. 2	観世音寺出土褐釉陶器壺	
PL. 1	第201次調査	
	(1) Aトレンチ(北西から)	(2) Bトレンチ(南東から)
PL. 2	第202次調査	
	(1) Aトレンチ(南から)	(2) Bトレンチ(北から) (3) Dトレンチ(西から)
PL. 3	第202-2次調査	
	(1) Eトレンチ(南から)	(2) Eトレンチ土層(南東から)
	(3) Fトレンチ(西から)	
PL. 4	第202-2次調査	
	(1) Gトレンチ(北から)	(2) Hトレンチ(北から)

IV 大野城跡の調査

1 大野城跡出土炭化物年代測定結果	37
(1) はじめに	37
(2) 試料と方法	37
(3) 測定結果	37
(4) 所見	38
2 大野城跡第44次・47次調査出土炭化物の年代測定	41
(1) はじめに	41
(2) 猫坂礎石群地区	41
(3) 主城原礎石群地区	45
(4) まとめ	50

Fig. 目次

	頁
Fig. 1 大宰府史跡発掘調査地域図 (1/5,000)	折込
Fig. 2 第201次調査トレンチ配置図 (1/200)	9
Fig. 3 第201次調査土層模式図	10
Fig. 4 第201次調査出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	10
Fig. 5 第202次調査トレンチ配置図 (1/500)	12
Fig. 6 第202次調査土層模式図	12
Fig. 7 第202-2次調査トレンチ配置図 (1/500)	13
Fig. 8 第202-2次調査土層模式図	13
Fig. 9 第202次調査出土遺物実測図 (1/3・1/4)	15
Fig.10 第207次調査トレンチ配置図 (1/300)	17
Fig.11 第207次調査土層模式図	17
Fig.12 第207次調査出土遺物実測図 (1/3・1/4)	18
Fig.13 第203次調査トレンチ配置図 (1/300)	19
Fig.14 第203次調査区遺構配置図・土層図 (1/40)	20
Fig.15 第203次調査出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	21
Fig.16 第203次調査出土瓦罫類拓影・実測図 (1/4)	21
Fig.17 第203次調査出土石製品・土製品等実測図 (1/2)	22
Fig.18 観世音寺出土陶磁器実測図 (1) (1/3)	24
Fig.19 観世音寺出土陶磁器実測図 (2) (1/3)	26
Fig.20 観世音寺出土陶磁器実測図 (3) (1/3)	27
Fig.21 観世音寺出土土器・陶磁器実測図 (4) (1/3)	28
Fig.22 観世音寺出土瓦罫類拓影・実測図 (1/2・1/4)	30
Fig.23 観世音寺出土墨書・刻書土器・陶磁器実測図 (1) (1/3)	32

Fig.24	観世音寺出土墨書・刻書土器・陶磁器実測図(2)(1/3)	33
Fig.25	観世音寺出土土製品・石製品・金属製品等実測図(1/2・1/3)	34
Fig.26	測定結果の較正曲線	40
Fig.27	猫坂礎石群地区周辺地形図(1/600)	42
Fig.28	猫坂礎石群地区A区崩落部土層立面見通し図(1/250)	43
Fig.29	測定結果の較正曲線	45
Fig.30	主城原礎石群地区周辺地形図(1/800)	46
Fig.31	主城原礎石群地区A区崩落部土層立面見通し図(1/60)	47
Fig.32	主城原礎石群地区B区崩落部土層立面見通し図(1/90)	48
Fig.33	主城原礎石群地区C区崩落部土層立面見通し図(1/90)	48
Fig.34	測定結果の較正曲線	49

Tab. 目 次

	頁	
Tab. 1	平成20年度調査計画表	1
Tab. 2	平成21年度調査計画表	2
Tab. 3	大宰府史跡調査研究指導委員会委員	3
Tab. 4	大宰府史跡現状変更申請対応状況表	7
Tab. 5	大宰府史跡発掘調査実施表	8
Tab. 6	観世音寺出土掲載遺物一覧	35
Tab. 7	放射性年代測定結果	39
Tab. 8	年代測定の結果	44

PL. 目 次

巻頭PL. 1	(1) 観世音寺出土高麗鉄絵青磁梅瓶	(2) 観世音寺出土唐三彩
巻頭PL. 2	観世音寺出土褐釉陶器壺	
PL. 1	第201次調査	
	(1) Aトレンチ(北西から)	(2) Bトレンチ(南東から)
PL. 2	第202次調査	
	(1) Aトレンチ(南から)	(2) Bトレンチ(北から) (3) Dトレンチ(西から)
PL. 3	第202-2次調査	
	(1) Eトレンチ(南から)	(2) Eトレンチ土層(南東から)
	(3) Fトレンチ(西から)	
PL. 4	第202-2次調査	
	(1) Gトレンチ(北から)	(2) Hトレンチ(北から)

- PL. 5 第207次調査
 (1) Aトレンチ (北から) (2) Bトレンチ (北から)
 (3) Bトレンチ土層 (北東から)
- PL. 6 第203次調査Aトレンチ
 (1) 全景 (東から) (2) 南壁土層 (北東から) (3) 石敷遺構 S X 4666 (北から)
- PL. 7 第203次調査Bトレンチ
 (1) 全景・東壁土層 (南西から) (2) 溝 S D 4665 (南から)
- PL. 8 (1) 第201次調査出土遺物 (2) 第202次調査出土土器・陶磁器
- PL. 9 (1) 第202次調査出土瓦 (2) 第207次調査出土遺物 (3) 第203次調査出土遺物
- PL.10 観世音寺出土陶磁器 (1)
- PL.11 観世音寺出土陶磁器 (2)
- PL.12 観世音寺出土瓦罽類
- PL.13 観世音寺出土墨書・刻書土器・陶磁器 (1)
- PL.14 観世音寺出土墨書・刻書陶磁器 (2)
- PL.15 観世音寺出土石製品・土製品

凡 例

- 1 本書に掲載の遺構実測図は、国土調査法第II座標系をもとに基準点を設け作成している。ただし、Fig.27, 30の図中の座標データは世界測地系による。
- 2 遺構番号の頭に付した記号は、以下の遺構を示す。
 S D : 溝, S X : その他の遺構
- 3 掲載図面中、土器の断面を黒塗りにしたものは、須恵器であることを示す。
- 4 陶磁器・瓦等の報告においては、以下の文献の型式分類・名称等に準じている。
 - ・陶磁器：森田勉・横田賢次郎1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
 (文中では、当分類を基本とし、補足的に以下の分類を使用する。)
 - 太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡XV』(文中では太宰府市分類と表記)
 - 上田正敏1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
 日本貿易陶磁研究会 (文中では上田分類と表記)
 - 小野正敏1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』
 No.2 日本貿易陶磁研究会 (文中では小野分類と表記)
 - ・中・近世瓦：九州歴史資料館2007『観世音寺—遺物編1—』
 - ・鋳造・鍛冶関連遺物：九州歴史資料館2007『観世音寺—遺物編2—』

I 緒 言

1 調査計画と組織

(1) 調査計画

平成20年度は、大宰府史跡発掘調査第8次5ヶ年計画の2年次にあたり、昨年に引き続き調査対象史跡を特別史跡水城跡とし、従来の調査成果をふまえて事業に対処した。本年度は、大野城市側の水城跡木樋吐水口推定部（水城跡第40次補足）とその反対側にあたる木樋取水口推定部及び内濠部（水城跡第45次）の調査を実施した。

また、史跡観世音寺境内及び子院跡において建物改築に伴う史跡現状変更許可申請書が提出され、遺構の有無及び土層堆積状況等を把握する目的で確認調査を実施した。

大宰府政庁周辺官衙跡においては、日吉官衙跡で2ヶ所、五反田地区で1ヶ所、九郎田地区で1ヶ所の建築申請が提出された。当該地は史跡指定地ではないものの、大宰府史跡の解明を行う上で重要な地区であるため、緊急調査として調査計画に組み入れ調査を行った。

報告書については、長らく懸案事項であった水城跡の本報告書である『水城跡－上・下巻－』を刊行し、水城跡の計画調査に一つの区切りをつけた。

水城跡本報告書の刊行

大宰府史跡調査研究指導委員会は、10月20・21日に開催した。一日目は、平成19・20年度の大宰府史跡関係調査研究、水城跡関係、大野城跡災害復旧、大宰府関連遺跡調査（牛頸須惠器窯跡）の報告を行い、大宰府展示館において大宰府史跡発掘40周年記念展の見学と水城跡第40次補足調査地の現地視察を行った。二日目は大宰府史跡発掘調査及び報告書刊行計画、大野城跡・水城跡の整備・災害復旧事業、新九州歴史資料館の整備進捗状況についての報告及び協議を行い、水城跡木樋吐水部の調査方法、水城跡本報告書刊行、政庁周辺官衙跡の今後の調査・報告書作成、新規発見の大野城跡城門の名称等について貴重な指導・助言を賜り、調査計画については概ね承認を頂いた。なお、平成20年度の発掘調査計画は、下表のとおりである。

平成20年度指導委員会

Tab. 1 平成20年度調査計画表

(面積：㎡)

区 分	場 所	所 在 地	面積	備考
水城跡	木樋吐水口推定部	大野城市下大利4丁目2・2・3他	350	計画調査
水城跡	木樋取水口推定部・内濠部	太宰府市吉松184-1・2他	309	計画調査
観世音寺	境内西辺部	太宰府市観世音寺5丁目190-3	3	緊急調査
政庁前面官衙	日吉官衙跡	太宰府市観世音寺1丁目403	75	緊急調査
政庁前面官衙	日吉官衙跡	太宰府市観世音寺1丁目382-1	18	緊急調査
五反田地区	日吉官衙東端	太宰府市観世音寺1丁目310	8	緊急調査
九郎田地区	広丸官衙西端	太宰府市観世音寺2丁目303・304	25	緊急調査

平成21年度は、大宰府史跡発掘調査第8次5ヶ年計画の3年次にあたる。本年度からは、調査対象史跡を特別史跡大宰府跡に含まれる蔵司地区官衙跡とし、21～23年度の都合3ヶ年で蔵司地区官衙跡の現状把握及び遺跡形成過程を解明することとした。

蔵司官衙跡の発掘調査

蔵司丘陵上には、昭和8年（1933）に発見された大規模な礎石建物が存在するが、大半が私有地ということもあり、これまで本格的な調査がなされていなかった。しかし、長らく難航して

いた蔵司丘陵の公有化が進捗し、ようやく調査に着手することが可能となった。また、太宰府市側においても蔵司丘陵の活用が検討されており、早急に遺跡内容を把握し、活用方針を打ち出す必要性が生じ、8次5ヶ年計画後半の調査計画として立案した。

大宰府政庁周辺官衙跡においては、政庁前面広場地区で2ヶ所、日吉官衙跡で1ヶ所、九郎田地区で1ヶ所の建築申請が提出された。当該地は史跡指定地ではないが、大宰府史跡の解明を行う上で重要な地区であるため、緊急調査として調査計画に組み入れ調査を行った。

政庁周辺官衙跡本報告書の刊行

報告書については、本年度から大宰府政庁周辺官衙跡の本報告書を順次刊行していくこととし、その手始めとして『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅰ－政庁前面広場地区－』を刊行した。

平成21年度指導委員会

大宰府史跡調査研究指導委員会は、10月20・21日に開催した。一日目は、平成20・21年度の大宰府史跡関係調査研究、水城跡関係、大野城跡災害復旧、大宰府史跡発掘40周年記念事業の報告を行い、蔵司官衙跡調査地と新九州歴史資料館の現地視察を行った。二日目は蔵司地区官衙の調査研究、大宰府史跡発掘調査及び報告書刊行計画、今後の大宰府史跡調査研究のあり方、新九州歴史資料館整備進捗状況についての報告及び協議を行った。

蔵司官衙跡の本格的な発掘調査が開始されるということもあり、委員の諸先生方の関心は非常に高く、蔵司官衙跡の調査方法、大宰府史跡の報告書作成、今後の大宰府史跡の調査研究のあり方等について貴重な指導・助言を賜り、蔵司地区官衙跡の調査計画及び政庁跡周辺官衙の報告書刊行計画についても概ね承認を頂いた。なお、平成21年度の発掘調査計画は、下表のとおりである。

Tab. 2 平成21年度調査計画表

(面積：㎡)

区 分	場 所	所 在 地	面積	備考
大宰府跡	蔵司官衙跡	太宰府市観世音寺3丁目454-2他	200	計画調査
政庁前面官衙	政庁前面広場	太宰府市観世音寺1丁目409-2	5	緊急調査
政庁前面官衙	政庁前面広場	太宰府市観世音寺2丁目45・46	12.2	緊急調査
政庁前面官衙	日吉官衙跡	太宰府市観世音寺1丁目352	20	緊急調査
九郎田地区	広丸官衙西端	太宰府市観世音寺2丁目303・304	154	緊急調査

(2) 調査組織

調査の主体は九州歴史資料館であり、平成19年度までは調査課が発掘調査及び報告書作成を行ってきたが、平成20年度の組織改編により学芸第一課・学芸第二課・調査課が学芸調査室として統合され、室の下に学芸班・調査班が設けられ、調査班が実務を担当することとなった。本報告書作成に係る関係者は、以下のとおりである。

		平成20年度	平成21年度
総 括	館 長	西谷 正	西谷 正
	副 館 長	平山 浩一	平山 浩一
	参 事	児玉 真一 (兼任)	馬田 弘稔
		馬田 弘稔	
		中間 研志	
庶 務	総務室長	岡本 京士	岡本 京士
	企画主査	梅野 研次	塩塚 孝憲

	事務主査		志水 良行	
	主任主事	志水 良行		
報 告	学芸調査室長	児玉 真一	小田 和利	
	調査班長	杉原 敏之		
	主任技師	岡寺 良	岡寺 良	
	主任技師	一瀬 智	一瀬 智	
	技 師		小嶋 篤 (7/1着任)	
整 理	整理補助員	高田いく子		
	整理作業員	大田千賀子	市川千香枝	中田千枝子

大宰府史跡は、国指定特別史跡である「大宰府跡」及び政庁周辺の官衙跡、「水城跡」、「大野城跡」及び国指定史跡の「大宰府学校院跡」、「観世音寺境内及び子院跡」、「筑前国分寺跡」、「国分瓦窯跡」等の古代の官衙・山城・寺院・生産遺跡を包括する我が国有数の大規模史跡である。これら史跡の調査研究、報告書刊行及び整備活用を進めるあたっては、種々な視点から対処する必要があり、歴史学・考古学・建築史学・造園学・都市工学・土木工学の専門家で構成される諮問機関である「大宰府史跡調査研究指導委員会」に諮り、委員による適切な指導・助言のもとに計画調査を実施している。なお、委員は下表のとおりである。

Tab. 3 大宰府史跡調査研究指導委員会委員

役 職	氏 名	職 名	専 門
委 員 長	笹山 晴生	東京大学名誉教授	歴史学
副 委 員 長	小田富士雄	福岡大学名誉教授	考古学
委 員	八木 充	山口大学名誉教授	歴史学
	狩野 久	元岡山大学教授	歴史学
	佐藤 信	東京大学大学院教授	歴史学
	坂上 康俊	九州大学大学院教授	歴史学
	田辺 征夫	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所長	考古学
	山中 章	三重大学教授	考古学
	石松 好雄	元九州歴史資料館副館長	考古学
	鈴木 嘉吉	元奈良国立文化財研究所長	建築史学
	澤村 仁	九州芸術工科大学名誉教授	建築史学
	杉本 正美	九州芸術工科大学名誉教授	造園学
	尼崎 博正	京都造形芸術大学教授	造園学
	渡辺 定男	東京大学名誉教授	都市工学
林 重徳	佐賀大学低平地研究センター教授	土木工学	

2 調査の経過と概要

(1) 平成20年度

平成20年度の計画調査は、水城跡第40次補足調査として木樋吐水口推定部の調査を行ったが、これは前年度からの継続調査である。また、その反対側にあたる木樋取水口推定部及び内濠部の調査を水城跡第45次調査とした。緊急調査としては、史跡観世音寺境内および子院跡で大宰府史

跡第203次調査を実施し、大宰府政庁周辺官衙跡においては日吉地区官衙跡で第168-2・200次調査、日吉地区官衙跡東端の五反田地区で第201次調査、広丸地区官衙西端の九郎田地区で第202次調査の計5件の緊急調査に対処した。

水城跡第45次調査

水城跡第45次調査は、木樋取水口及び内濠の確認、内濠からの取水方法を解明することを主眼とし、5月27日から開始した。調査地は、水城西門跡東側の太宰府側基底部縁辺下部で、木樋取水口と内濠の推定地にあたり、平成12・13年度に調査を実施した水城跡第33次調査で検出した木樋掘方S X 150の南延長線上に位置する。A区は木樋取水口が推定される場所であるが、木樋取水口は検出できず、土坑3基、溝2条、ピット等を検出したに留まる。なかでも、S X 265は土塁に直交し、基底部に潜り込む溝であるが、木樋掘方S X 150の南延長線上に位置し、木樋に関連する遺構と推測された。B・C区は内濠推定地で、B区ではA区で検出した溝S X 260に連続するとみられる溝を検出した。C区では地表面から2.3m下の地山まで掘り下げたが、内濠の立上りは確認できなかったものの流水と滞水を繰り返した土層を確認した。調査は、夏盛りの7月25日に終了した。

水城跡第40次補足調査

水城跡第40次補足調査は、9月4日から開始した。前年度の調査においては、上面幅約7.4mの木樋掘方S X 250を検出していたが、時間的な制約により木樋そのものの確認には至らず、次年度に持ち越すこととなった。今回の補足調査では、埋設された木樋本体を確認し、吐水口の状況を観察すること及び木樋から排出された水をどの様にして御笠川に向かって傾斜している外濠に貯水するのか、貯水のための土塁と直交する堰は存在するのか等の課題解決を主眼に行った。

木樋掘方S X 250に木樋は未埋設

調査の結果、土塁基底部に土塁に直交する上部幅7.4m、下部幅2.6m、深さ2.3mの掘方を確認した。規模からして木樋を埋設した掘方とみられたが、木樋は埋設していなかった。また、外濠部の調査では、土塁と平行する溝2条を確認しており、水城跡第39次調査の結果と併せると御笠川以西での外濠の状況は、土塁に平行する複数の溝からなるものと考えられた。また、11月8日(土)に現地説明会を開催し、地域住民を中心に60名の参加があった。

第200次調査

大宰府史跡第200次調査は住宅建設に伴う確認調査で、4月14日～5月9日にかけて行った。調査地は、政庁前面の日吉地区官衙跡西端にあたる。調査の結果、現地表面から約1.3m下で、奈良～鎌倉時代の遺物を含む大溝S D 4660を確認した。この大溝は、推定幅30m、深さ約1.6mの規模を有する南北溝で、埋没年代に関しては11世紀後半～13世紀の間とみられる。位置的に政庁前面広場と日吉地区官衙とを画する区画溝である可能性が高く、貴重な発見となった。

日吉官衙と広場を画する大溝

大宰府史跡第201次調査も住宅建設に伴う確認調査で、4月14日に行った。当該地は政庁前面の日吉地区官衙跡の東端付近にあたる。周辺では顕著な遺構は確認されていないが、日吉地区官衙の東限を示す遺構の検出を目指した。調査の結果、現地表面から約2.3m下で平安時代の遺物を含む灰白色砂層を確認したが、洪水等による自然堆積層と考えられ、近辺には遺構が存在していないことが明らかとなった。

第201次調査

第168-2次調査

大宰府史跡第168-2次調査も住宅建設に伴う確認調査で、8月21日に行った。調査地は日吉地区官衙跡西端で、第200次調査地の南側にあたる。今次調査においても、第200次調査同様、現地表面から約1.5m下で、奈良～平安時代の遺物を含む堆積層を確認した。状況的には第200次調査検出の大溝S D 4660と同様であり、立ち上がりは確認できていないが、一連の大溝と考えられる。東肩部は第153次調査で検出した谷地形が該当するものと思われ、第200次調査に引き

続き政庁前面広場と日吉地区官衙とを画する区画溝が発見された意義は大きい。

大宰府史跡第202次調査は大宰府消防署改築に伴う確認調査で、11月27日に行った。調査地は、政庁前面の広丸地区官衙西端の九郎田地区にあたる。調査区の4ヶ所にトレンチを設定し重機で掘り下げたところ、地表下約4mで平安時代の瓦を含む灰褐色土層を確認した。この層は古代に形成されたとみられ、その下層には古代の遺構が存在する可能性が高いものの地山の確認には至っておらず、次年度の建物解体の折りに改めて確認調査を行うこととなった。

第202次調査

大宰府史跡第203次調査は、史跡観世音寺境内及び子院跡の現状変更（住宅改築）に伴うもので、調査地は観世音寺境内の西辺にあたる。調査の結果、Aトレンチで暗渠の可能性のある近世の石敷遺構、Bトレンチで12世紀頃の遺物を含む溝を確認した。この溝に関しては、平安～鎌倉期における観世音寺寺域内の区画溝と考えられる。

第203次調査

以上が、平成20年度に実施した計画調査及び緊急調査の概要であるが、水城跡第40次補足・45次調査の詳細に関しては、平成20・21年度に刊行した『水城跡―上・下巻―』に、大宰府史跡第168-2・200次調査の詳細に関しては、本年度刊行の『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅰ―政庁前面広場地区―』に掲載しており、そちらを参照されたい。

(2) 平成21年度

平成21年度の計画調査は、大宰府史跡第205次調査として蔵司地区官衙跡の調査を行った。緊急調査としては、政庁前面広場地区で第204・206次調査、日吉地区官衙跡で第207次調査、広丸地区官衙西端の九郎田地区で第202-2次調査の計4件の緊急調査に対処した。

蔵司官衙跡の計画調査

蔵司地区官衙跡の調査は、本年度から3ヶ年余りをかけて行うこととしたが、蔵司地区全体として約3万㎡の調査対象面積を有するため区域をA～Gの7地区に分け、平成21年度はA・B2地区を対象地区とした。年度当初から伐採作業に入り、事前調査として礎石建物周辺の地形測量及び礎石の実測を行った。実際、発掘調査に着手したのは、11月4日からであった。A地区には礎石かと思われる上面が平坦な石が数個点在しており、その石にかかる形でトレンチを設定した。調査の結果、石は後世動かされていることが判明した。

また、10月24日に現地説明会を開催したところ、太宰府市民を中心に246名という多数の見学者があり、蔵司跡の関心の高さが窺えた。

大宰府史跡第204次調査は住宅建設に伴う確認調査で、8月5日に実施した。調査地は政庁前面広場の東側にあたる。2ヶ所のトレンチを設定し、重機により現地表面から3.3m掘削したが、区画整理事業時の客土が厚く堆積し、地山の確認には至っていない。周辺の遺構面よりも深く、地形的に見ても御笠川の氾濫等により、遺構は存在しないものと考えられる。

第204次調査

大宰府史跡第206次調査は、10月13日～26日の期間で行った。調査地は政庁前面広場の西側で、昭和57年度に調査を実施した第81次調査区の西隣で、同じく平成3年度に調査を実施した第134次調査区の南側にあたる。調査の結果、東側のAトレンチでは、黒灰色粘質土が堆積した南東側に深くなる落ち込みを検出した。西側のBトレンチでは瓦・礫が詰まった瓦溜りを検出した。9世紀代の瓦を主体として12世紀後半の青磁碗も出土している。

第206次調査

大宰府史跡第207次調査は住宅建設に伴う確認調査で、11月4日に実施した。調査地は日吉地区官衙跡の南側で、第32・80次調査地の南側にあたる。調査の結果、現地表面から1.0m下で古

第207次調査

代の遺物を含む黒色土を確認したが、現代の遺物を含んでいた。その下層は黒灰色シルト層と青灰色砂層の互層となっていたが遺物の発見はなく、当該地においては御笠川の氾濫等により遺構は存在しないものと考えられる。

第202-2次
調 査

大宰府史跡第202-2次調査は、昨年度実施した太宰府消防署改築に伴うもので、6月15～16日、1月7日に行った。いずれのトレンチも地表下約4～5mで古代～中世の遺物を含む砂層を確認した。遺物はかなりローリングを受けており、御笠川の氾濫により堆積したもので、当該地は御笠川の氾濫原であったことが判明した。

以上が平成21年度に実施した計画調査及び緊急調査の概要であるが、大宰府史跡第205次調査に関しては、次回の年次報告書に掲載すると共に、平成28年度に本報告書を刊行する予定である。大宰府史跡第204・206次調査の詳細に関しては、本年度刊行の『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅰ－政庁前面広場地区－』に掲載しており、そちらを参照されたい。

3 その他

平成20年度に学芸調査室調査班が行った事業には、大宰府史跡の発掘調査の他に、久山町首羅山遺跡の共同調査、大宰府史跡発掘調査40周年事業、放送大学面接授業を行った。普及事業としては、学芸班と共に九歴講座、新九歴紹介講座、学習支援活動、出前講座を行った。実習・研修事業としては、博物館実習、教員研修、高校生インターンシップを総務室と共に行っている。

調査40周年
事 業

大宰府史跡発掘調査40周年事業は、昭和43年度から始まった大宰府史跡の発掘調査が40年目の節目を迎えたことを記念しての事業である。内容は、古都大宰府保存協会との共催で10月18日に記念講演会（「大宰府史跡の歩み」講師：西谷館長、「大宰府成立の問題」講師：重松敏彦同協会事務局長）、企画展（「天平追想－古代都市・大宰府の栄華－」期間：10月18日～12月7日）を実施した。11月23日には、福岡県教育委員会の主催でシンポジウム「古代都市・大宰府の成立を考える」を開催した。また、関連事業として、「天平追想－古都大宰府に寝す－」（11月1日）、「大宰府発掘今昔物語」（11月29日）、国際シンポジウム「百済、倭そして大宰府」（12月6・7日）を実施した。

平成21年度に学芸調査室調査班が行った事業には、大宰府史跡の発掘調査の他に、昨年に引き続き久山町首羅山遺跡の共同調査、放送大学面接授業を行った。展示事業としては、水城跡の本報告書刊行に関連して、調査成果展「水城の歩み－水城跡の調査研究成果－」（期間：9月4日～3月31日）、普及事業としては学芸班と共に九歴講座、新九歴紹介講座、学習支援活動、出前講座を行った。実習・研修事業としては、博物館実習、教員研修、高校生インターンシップを総務室と共に行った。

なお、平成20年12月6日には、学芸調査室の総括であり、水城跡の発掘調査及び報告書作成の陣頭指揮を執っていた児玉真一学芸調査室長が不慮の病により急逝した。本書を御霊前に捧げるとともに故人の冥福を祈る次第である。

Tab. 4 大宰府史跡現状変更申請対応状況表(1)

平成19年度

申請日	申請者	申請理由	申請地	面積㎡	指定区分	指示	対応内容	許可日
12月3日	福岡農林事務所長	遊具設置	宇美町大字四王寺字猫坂196		特史大野城跡	文許可	宇教委立会	4月3日
1月8日	県教育長	災害復旧	宇美町大字四王寺字大石垣305		特史大野城跡	文許可	県教委実施	
1月10日	個人	建物解体除去	太宰府市坂本3丁目280-4	154	史跡観世音寺境内及びび子院跡	文許可	太教委立会	2月15日
1月10日	個人	建物除却	太宰府市観世音寺5丁目172-1・2	525	史跡観世音寺境内及びび子院跡	文許可	太教委立会	2月15日
2月6日	太宰府市長	林道法面補修工事	太宰府市大字太宰府字岩谷1790-1・19・20		特史大野城跡	文許可	太教委立会	3月21日
2月27日	福岡農林事務所長	治山工事	太宰府市大字太宰府字普賢太宰府市三条2丁目1456-1他		特史大野城跡	文許可	太教委確認調査後施工	5月16日

平成20年度

申請日	申請者	申請理由	申請地	面積㎡	指定区分	指示	対応内容	許可日
4月11日	九歴館長	発掘調査	大野城市下大利4-2-2・3他	150	特史水城跡	文許可	九歴発掘	6月12日
5月2日	福岡農林事務所長	仮設道設置	太宰府市大字太宰府字普賢1451他		特史大野城跡	文許可	太教委立会	7月3日
5月28日	九歴館長	仮設物設置	太宰府市吉松		特史水城跡	太許可	太教委立会	6月5日
7月11日	県教育長	発掘調査	宇美町大字四王寺字鮎返り18-1他		特史大野城跡	文許可	県教委発掘	8月8日
8月7日	個人	住宅改築	太宰府市坂本3-281-1		史跡観世音寺境内及びび子院跡	文許可	太教委立会	9月26日
8月12日	県教育長	災害復旧	宇美町大字四王寺字鮎返り宇美町大字炭焼字原田谷山太宰府市大字太宰府字松川他		特史大野城跡	文許可	県教委実施	9月5日
8月12日	大野城市教育長	発掘調査	大野城市下大利4-1-1他	25	特史水城跡	文許可	大教委発掘	10月17日
9月12日	九歴館長	発掘調査	太宰府市観世音寺5-190-3	494.2	史跡観世音寺境内及びび子院跡	文許可	九歴発掘	10月30日
9月30日	太宰府市長	下水道管増設工事	太宰府市連歌屋1-1491-23他	97.7	特史大野城跡	文許可	太教委立会	11月21日
11月13日	観世音寺区長	公民館増築	太宰府市観世音寺4-772-3	19.5	史跡大宰府学校院跡	文許可	太教委立会	1月16日
11月25日	県教育長	災害復旧	太宰府市大字坂本字口上谷大野城市瓦田宇美町大字四王寺字鮎返り他		特史大野城跡	文許可	県教委実施	
11月27日	太宰府市長	林道法面補修	太宰府市大字太宰府1790-6他		特史大野城跡	文許可	太教委立会	1月16日
12月1日	大野城市教育長	一般整備	大野城市下大利3-5-1,4-1-1	220	特史水城跡	文許可	大教委整備	1月16日
12月24日	県教育長	整備工事	太宰府市坂本字口上谷1087他宇美町大字四王寺字猫坂191-1		特史大野城跡	文許可	県教委整備	
1月26日	個人	家屋撤去	太宰府市吉松1-114-2	404.3	特史水城跡	文許可	太教委立会	3月19日
1月26日	個人	倉庫建設	太宰府市観世音寺4-221-1	43.3	史跡大宰府学校院跡	文許可	太教委立会	4月10日
1月30日	個人	住宅建替	太宰府市観世音寺5-190-3	494.2	史跡観世音寺境内及びび子院跡	文許可	太教委立会	4月10日
2月3日	個人	駐車場拡幅	太宰府市観世音寺4-642-3	20	特史大宰府跡	文許可	太教委立会	4月10日
3月5日	大野城市教育長	発掘調査	大野城市下大利1-1他	50	特史水城跡	文許可	大教委発掘	4月17日
3月16日	九歴館長	プレハブ改築	太宰府市坂本3-2-1, 3-3	196.6	史跡観世音寺境内及びび子院跡	文許可	太教委立会	5月29日

(凡例：特史－特別史跡、文許可－文化庁許可、太許可－太宰府市教委許可)

Tab. 4 大宰府史跡現状変更申請対応状況表(2)

平成21年度

申請日	申請者	申請理由	申請地	面積㎡	指定区分	指示	対応内容	許可日
5月26日	太宰府市教育長	発掘調査	太宰府市国分1-247-2	130	特史水城跡	文許可	太教委発掘	11月2日
5月27日	個人	住宅建設	太宰府市観世音寺6-896-65	279.5	史跡観世音寺境内及びひ子院跡	文許可	太教委立会	6月8日
7月2日	福岡農林事務所長	四阿改築	大野城市乙金618-2		特史大野城跡	文許可	太教委立会	9月25日
7月7日	太宰府市教育長	樹木伐採	太宰府市吉松3-472他		特史水城跡	文許可	太教委立会	9月2日
7月15日	太宰府市教育長	便所改築	太宰府市観世音寺4-511-1他		特史大宰府跡	文許可	太教委立会	9月2日
8月17日	九歴館長	発掘調査	太宰府市観世音寺3-454-2他		特史大宰府跡	文許可	九歴発掘	10月16日
8月19日	福岡県知事	災害復旧	大野城市大字乙金618-4 宇美町大字四王寺字猫坂他		特史大野城跡	文許可	太教委立会	9月25日
9月7日	大野城市教育長	土塁修復	大野城市下大利4-1-1他	4,000	特史水城跡	文許可	太教委実施	9月25日
9月10日	大野城市長	林道復旧	大野城市大字瓦田1-1他		特史大野城跡	文許可	太教委立会	11月2日
9月14日	宗教法人大願寺	崖面保全	太宰府市連歌屋1-1491-63他	4,827	特史大野城跡	文許可	太教委立会	10月16日
11月30日	太宰府市教育長	土塁修復	太宰府市国分1-247-2	130	特史水城跡	文許可	太教委立会	1月15日
12月18日	県教育長	災害復旧	太宰府市大字坂本 宇美町大字四王寺字大石垣他		特史大野城跡	文許可	県教委実施	
12月24日	県教育長	整備工事	太宰府市坂本字口上谷1087他 宇美町大字四王寺字猫坂191-1		特史大野城跡	文許可	県教委整備	

(凡例：特史＝特別史跡，文許可＝文化庁許可，太許可＝太宰府市教委許可)

Tab. 5 大宰府史跡発掘調査実施表

平成20年度

No.	調査次数	調査地区	面積㎡	調査期間	調査内容
1	水城跡第40次補足調査	6AMK-R	350	080904～090224	木樋吐水部
2	水城跡第45次調査	6AMK-I	309	080527～080725	内濠部・木樋取水部
3	大宰府史跡第200次調査	6AYI-D	75	080414～080509	政庁周辺官衙跡日吉地区
4	大宰府史跡第201次調査	6AYI-B	8	080414	政庁周辺官衙跡五反田地区
5	大宰府史跡第168-2次調査	6AYI-D	18	080821	政庁周辺官衙跡日吉地区
6	大宰府史跡第202次調査	6AYQ-B	25	081127	政庁周辺官衙跡九郎田地区
7	大宰府史跡第203次調査	6KKZ-A	3	081217～081219	観世音寺西辺域

平成21年度

No.	調査次数	調査地区	面積㎡	調査期間	調査内容
1	大宰府史跡第204次調査	6AYI-D	5	090805	政庁前面広場地区
2	大宰府史跡第205次調査	6AYT-A	200	091104～100331	政庁周辺官衙跡蔵司地区
3	大宰府史跡第206次調査	6AYM-A	12	091013～091026	政庁前面広場地区
4	大宰府史跡第207次調査	6AYI-C	20	091104	政庁周辺官衙跡日吉地区
5	大宰府史跡第202-2次調査	6AYQ-B	152	090615～090616 100107	政庁周辺官衙跡九郎田地区



Fig. 1 大宰府史跡発掘調査地域図 (1/5,000)

II 大宰府跡の調査

II 大宰府跡の調査

1 第201次調査（五反田地区の緊急調査）	9
(1) 調査概要	9
(2) トレンチ設定と基本層序	9
(3) 出土遺物	10
(4) 小 結	10
2 第202次調査（九郎田地区の緊急調査）	11
(1) 調査概要	11
(2) 第202次調査	11
(3) 第202-2次調査	13
(4) 出土遺物	14
(5) 小 結	16
3 第207次調査（日吉地区の緊急調査）	17
(1) 調査概要	17
(2) トレンチ設定と基本層序	17
(3) 出土遺物	18
(4) 小 結	18

1 第201次調査（五反田地区の緊急調査）

（1）調査概要

経 過 大宰府政庁跡の南側を東西に走る県道筑紫野太宰府線と、その南にある御笠川に挟まれた一帯は、1980年代に太宰府市が都市区画整理事業を実施し、現在宅地化されている。また、この一帯は区画整理事業の際の九州歴史資料館の発掘調査によって、政庁前面広場を挟んで東西に日吉・不丁の官衙域、不丁地区の西側に大楠・広丸の官人居住域が広がっていることが判明している。現在、九州歴史資料館はこの一帯について、地下遺構の構造を解明すると共に、現状での保全を図ることを目的に、宅地の新築もしくは建て替えに伴い、太宰府市教育委員会との協議の下、地下遺構の確認調査を進めてきている。

今回の調査地は、日吉地区のさらに東側にあたる五反田地区の宅地等の建設を行うに際して地下遺構の有無を確認するため、調査を行った。平成20年4月14日に調査を開始し、掘削を行ったが、後述するように遺構は認められなかったため、測量、写真撮影を行い、即日終了した。調査面積は8㎡である。

位 置 日吉地区官衙の南東側にあたり、小字名から五反田地区の範囲である。地番は太宰府市観世音寺1丁目310番である。周辺では、西側で第145次調査、北東側で第198次調査を行っている。今回の調査地を含め、周辺には空閑地は若干あるものの、基本的には宅地街である。

（2）トレンチ設定と基本層序

本調査地の東側には、月山地区から南流してくる用水路があるため、そちらに向かって地形が

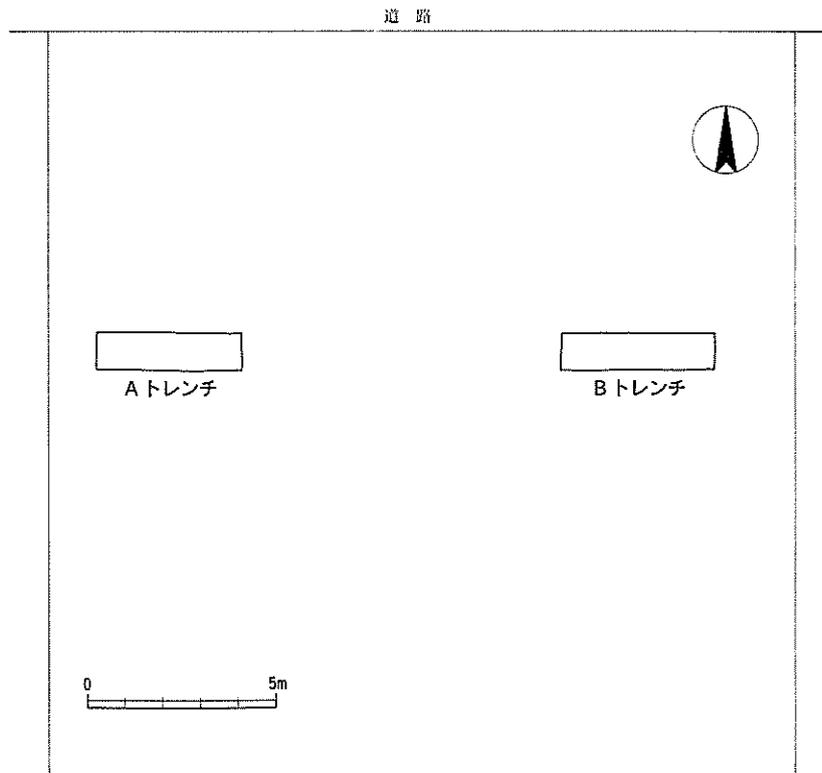
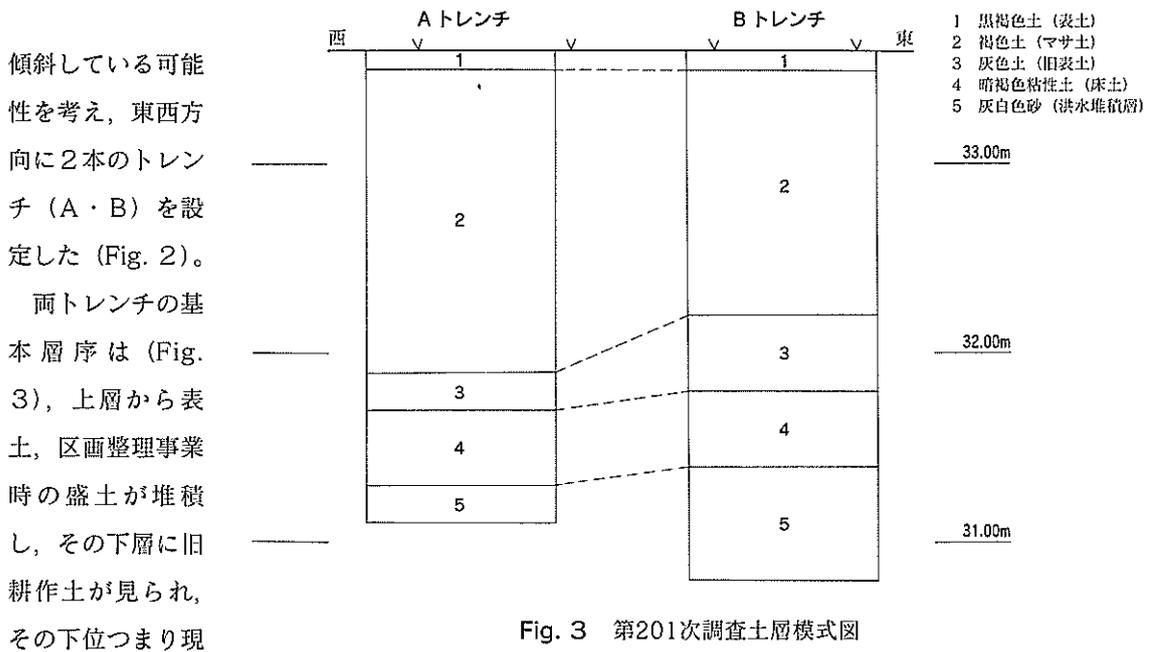


Fig. 2 第201次調査トレンチ配置図 (1/200)



地表から約220～230mの深さで、平安時代の陶磁器・瓦類が含まれる灰白色砂層が見られた(PL. 1)。この砂層の堆積状況はAトレンチで約20cm、Bトレンチでは約60cm堆積していた。

(3) 出土遺物

灰白色砂層出土土器・陶磁器 (Fig. 4, PL. 8)

須恵器

甕 (1) 器壁が1.7cmもあり非常に厚い胴部片。灰色を呈し、焼成は良好、外面には格子目タタキ、内面には、同心円状の当て具痕が見られる。Bトレンチ出土。

白磁

碗 (2) 断面が逆台形状を呈する低い高台を持つIV-1・a類。



Fig. 4 第201次調査出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

内面には、1条の沈線を持ち、外面は露胎。復元高台径7.2cm。Bトレンチ出土。

(4) 小 結

洪水による自然堆積

本調査地において確認された灰白色砂層は、平安時代の遺物を含むものの、洪水による自然堆積層と考えられる。この状況は、本調査区の北東側を調査した第198次調査区でも同様であるし、本調査区の西側を調査した第145次調査区においても遺構が確認されていないため、同様であるといえよう。

区画整理前の旧地形では、本調査区は、御笠川の氾濫原となっておりと共に、月山地区から南流する水路の影響を受ける場所でもある。よって、本調査区および周辺地区には、現状においては遺構は存在しない、もしくは残存していないと判断される。

2 第202次調査（九郎田地区の緊急調査）

（1）調査概要

経過 大宰府政庁跡の前面を東西に走る県道筑紫野太宰府線を西へ進むと、関屋交差点付近で御笠川に近接する。関屋交差点の東に接した場所には、太宰府消防署の庁舎がある。この庁舎は昭和45年に建設されたもので、老朽化が著しく、また耐震化補強対策もあって、新築されることとなった。この庁舎建設にあたり、当該地が政庁前面官衙跡の調査範囲としているため、遺構の確認調査を九州歴史資料館が行うこととなった。

まず、平成20年11月27日に、敷地内にトレンチを4箇所設け、確認調査を行った。この場所は、昭和45年の消防署建設の際に約3m以上も盛土整地を行っていることや、この段階においては建て替え前の庁舎が存在し、消防救急等の日常業務を行っていたこともあり、大規模に調査することができないため、遺構面の深度まで掘削することができず、遺構の有無について判断することはできなかった。

その後、建設される庁舎の設計が確実となった平成21年6月の段階で、市教育委員会、消防本部、設計業者と協議を行った。既に深度3～4mまでは、遺構が存在しないことは前回の調査で確認されていたが、設計の結果、それよりも深い深度まで鋼管杭を打設することとなったので、さらなる確認調査を行うこととなった。そこで、まずは現存する旧庁舎とは重ならない敷地南東部について、再度確認調査を行うこととなった。そこで、平成21年6月15・16日に、敷地南東部にトレンチを2箇所（E・Fトレンチ）設定し、大型重機を入れ、調査を行ったところ、両方のトレンチで旧表土直下に御笠川の洪水堆積砂層が確認され、遺構が残存していないことを確認した。

さらに、12月には旧庁舎の解体が完了し、翌22年1月7日に旧庁舎部分にトレンチ2箇所（G・Hトレンチ）を設定し、確認調査を行った。6月の調査所見と同様、洪水堆積層が確認され、遺構は存在しなかった。以上の結果をもって新庁舎は設計どおりに着工されることとなった。

なお、平成20年11月に行った調査を第202次調査、平成21年6月および22年1月に行った調査を第202-2次調査とし、調査届・発見届・終了届等の手続きを行っている。調査面積は第202次調査が25㎡、第202-2次調査が152㎡である。

位置 政庁前面官衙跡の西端にあたり、大字通古賀字九郎田で、地番は太宰府市観世音寺2丁目303・304番である。旧地形から判断して御笠川の旧河道部分にあたり、周辺の調査では、河川の氾濫等により、現在のところ遺構は確認されていない。

（2）第202次調査

1) トレンチ設定と基本層序

調査対象地には、前述のとおり建て替え前の庁舎があったため、それをよけながら、敷地全体にA～Dのトレンチを設定し（Fig. 5）、重機により掘削を行った。トレンチごとの基本層序（Fig. 6）を以下に記す。

Aトレンチ 地表面よりアスファルト、バラス（GL-5cm）、区画整理時の盛土（GL-40cm）、区画整理以前の路面（GL-240cm）、区画整理以前の盛土（GL-245cm）が堆積する。区画整理以前

の路面の下にはコンクリートの壁面に当たったため、地表下300cmより下層の掘削はできなかった (PL. 2)。

Bトレンチ 地表面よりアスファルト、バラス (GL-10cm)、区画整理時の盛土 (GL-130cm) が堆積し、地表下340cmでAトレンチと同じコンクリートの壁面に当たり、地表下460cm以下の掘削はできなかった (PL. 2)。

Cトレンチ 地表面よりアスファルト、バラス (GL-5cm)、区画整理時の盛土 (GL-25cm) が堆

積し、地表下75cmまで掘り進めたところで、水道管に行き当たり、それ以上の掘削は断念した。

Dトレンチ 地表面よりアスファルト、バラス (GL-10cm)、区画整理時の盛土 (GL-20cm) が堆積し、地表下340cmで、旧表土と見られる灰褐色土・暗褐色土・暗灰褐色土が堆積し、その下層には、灰褐色砂・灰色細砂が堆積し、灰褐色砂層からは斜格子文の入った平安時代の瓦片が出土した。地表下420cmまで掘り進めたところで、重機の

掘削能力を超えたため、それ以上の掘削は断念した (PL. 2)。

2) 調査所見

以上のように、遺構面までの深さがあまりに深いため、いずれのトレンチも遺構面まで到達することはできず、遺構の有無について判断することはできなかった。

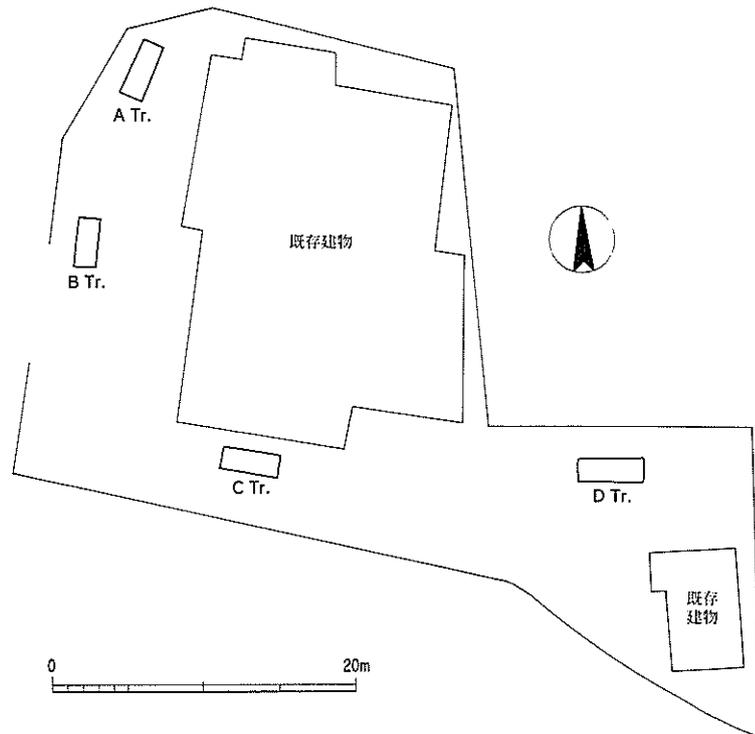


Fig. 5 第202次調査トレンチ配置図 (1/500)

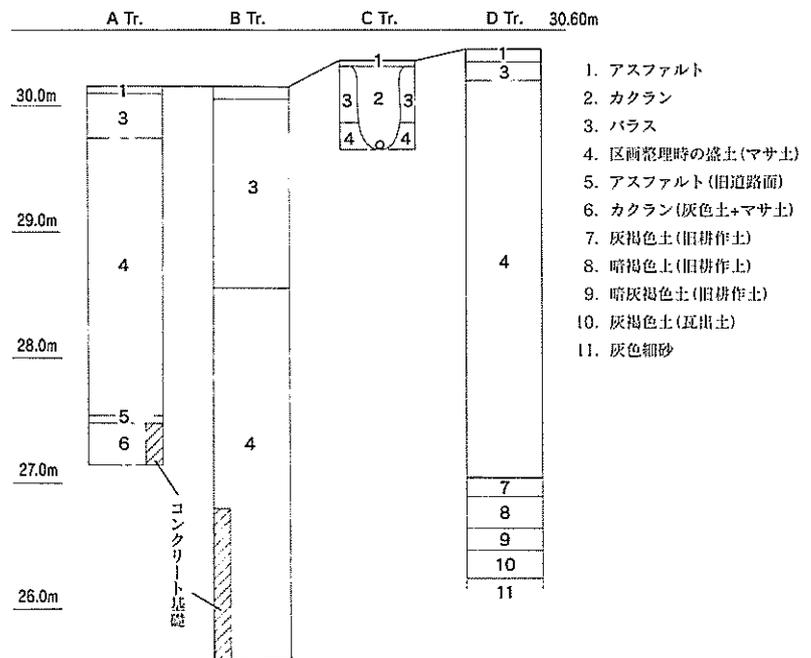


Fig. 6 第202次調査土層模式図

しかしながら、Dトレンチでは、旧表土・耕作土層を検出し、さらにその下層からは平安時代の包含層とも考えられる土層を検出した。よって、この段階ではさらに下層に遺構が存在する可能性は残された。

なお、後述するように、第202-2次調査の結果から、この包含層も旧耕作土の一部であることが判明している。

(3) 第202-2次調査

1) トレンチ設定と基本層序

先の第202次調査では、遺構面まで掘削深度が到達することができなかったため、本調査では、大型重機を用いて、やや大規模な範囲で建設予定地内に4箇所トレンチを設定して (Fig. 7)、調査を行った。トレンチごとの基本層序 (Fig. 8) を以下に記す。

Eトレンチ 地表面よりアスファルト、バラス (GL-10cm)、区画整理時の盛土 (GL-20cm)、暗灰色土 (旧表土・GL-340cm) が堆積し、その下層に褐色砂、白色砂等の御笠川の洪水堆積層が地表下600cmまで検出された (PL. 3)。

Fトレンチ 地表面よりアスファルト、バラス (GL-10cm)、区画整理時の盛土 (GL-20cm)、暗灰色土 (旧表土・GL-390cm)

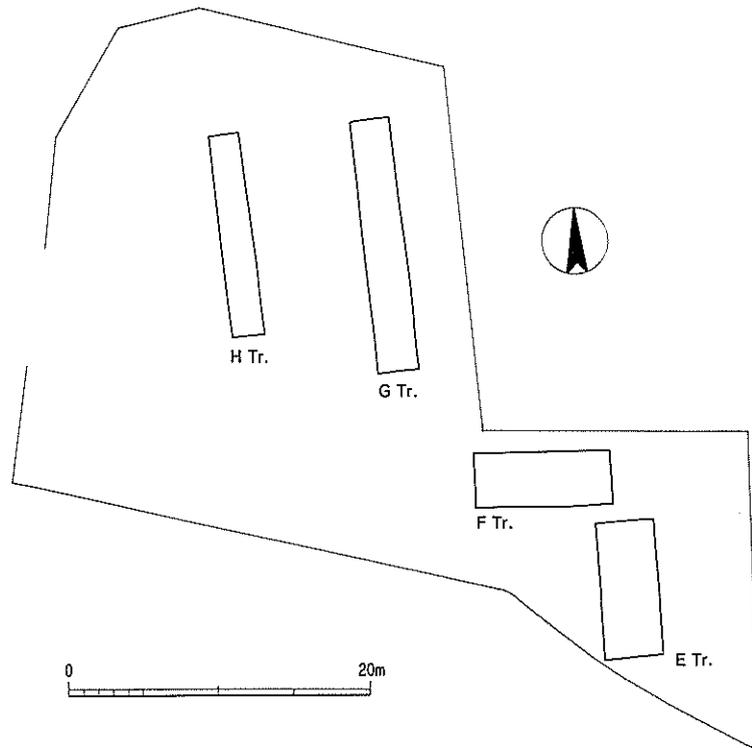


Fig. 7 第202-2次調査トレンチ配置図 (1/500)

- 1. アスファルト
- 2. バラス
- 3. 区画整理時の盛土 (褐色マサ土)
- 4. 区画整理時の盛土 (灰～灰褐色マサ土)
- 5. 暗灰色土 (旧耕作土)
- 6. 褐～灰褐色土 (旧耕作土)
- 7. 褐色砂 (洪水堆積層)
- 8. 白色砂 (洪水堆積層)
- 9. 7+8
- 10. 明黄褐色土 (花崗岩・バイラン土、地山)

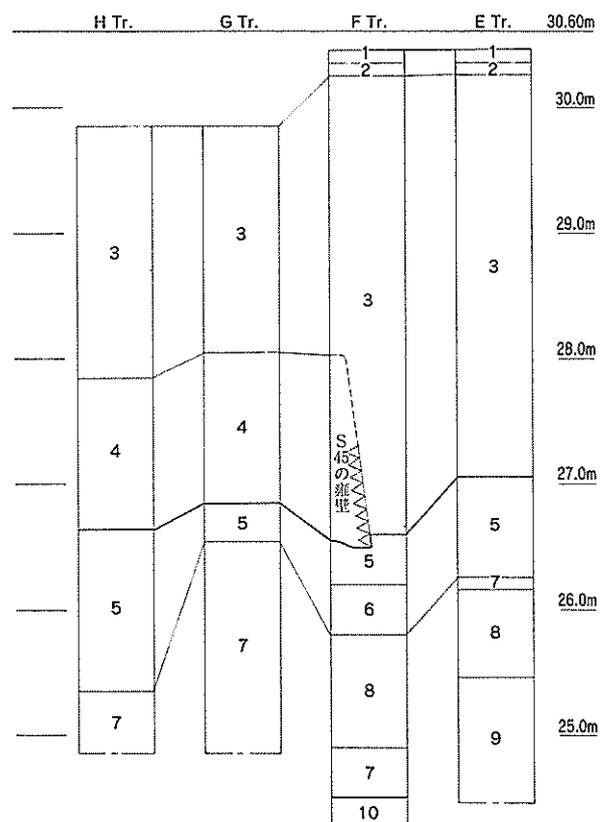


Fig. 8 第202-2次調査土層模式図

が堆積し、その下層に褐色砂、白色砂等の御笠川の洪水堆積層が地表下600cmまで検出され、その下層には、花崗岩パイラン土の地山層を検出した (PL. 3)。

なお、旧表土層の上には、昭和45年に消防署が建設された際の擁壁の基礎が認められた。
Gトレンチ 地表面より区画整理時の盛土、区画整理以前の盛土 (GL-180cm)、暗灰色粘性土 (旧表土・GL-300cm) が堆積し、その下層 (GL-330cm) に褐色砂の洪水堆積層が地表下500cmまで検出された (PL. 4)。

Hトレンチ 地表面より区画整理時の盛土、区画整理以前の盛土 (GL-200cm)、暗灰色粘性土 (旧表土・GL-320cm) が堆積し、その下層 (GL-450cm) に褐色砂の洪水堆積層が地表下500cmまで検出された (PL. 4)。

G・Hトレンチは旧庁舎解体後の調査のため、アスファルト・バラスは撤去され、その下層から掘り下げている。

2) 調査所見

洪水堆積により遺構はなし

以上のように、いずれのトレンチも旧表土・耕作土の下層に洪水堆積砂層が堆積しており、中からは、古代～中世の遺物を包含していた。このことから当該地全体にわたって、遺構が存在しないと推測される。

(4) 出土遺物

いずれも旧表土下層の洪水堆積砂層から出土したものである。2・3・8・24はEトレンチ、4・7・16・23はFトレンチ、1・9・14・19・21・22はGトレンチ、5・6・10～13・15・17・18・20はHトレンチから出土した。

砂層出土遺物 (Fig. 9, PL. 8・9)

須恵器

坏 (1) やや外反する形態の高台を持つもので、大型のもの。高台径10.8cm。見込みは非常に平坦な形状を呈する。

壺 (2) 高台をもつ形態のもので、器壁が厚く壺の底部と考えられる。器壁は全体的に摩滅により平滑。

土師器

坏 (3) 底径9.6cmで、底部は糸切り。胎土は明褐色を呈し、焼成は良好。

鉢 (4) 胴部の破片で、胎土は明褐色を呈するが、内面は吸炭により黒灰色を呈する。

甕 (5) 口縁部がラップ状に開くもので、外面には斜め方向のハケメ、内面には縦方向のケズリが施される。やや磨滅している。

瓦器

椀 (6) 底径6.8cmで、外面は黒灰色、内面は黒色を呈し、細かいミガキが見られる。

土師質土器

摺鉢 (7) 体部の小片で、内面に縦方向の摺り溝が見られ、外面にはユビオサエが施される。また、内面は黒褐色であるのに対し、外面は赤褐色を呈する。

白磁

皿（8・9） 8は非常に薄い器壁のもので、内面中程に段を設ける形態でⅧ類と思われる。白色の胎に緑灰色の釉がかかる。9は口縁部分を欠くが、いわゆる口禿のⅧ類。底部にまで釉が及んでいる。釉調はやや緑がかった白色。

碗（10～12） 10・11は低く削りだした高台を持つⅣ類。いずれも底部片で、玉縁の口縁部は残存しない。11は残存する外面全体が露胎で、磨滅が激しい。12は内面に蛇の目状の釉のカキトリが巡るⅧ類。高台部分以下は露胎。釉調はやや青みがかった白色。

青白磁

蓋（13） 外面は青白色の釉がかかり、草花状の浮文が施されるが、小片のため文様の詳細までは不明。内面も施釉。おそらく合子の蓋と推測される。

青磁

碗（14～19） 14・15は越州窯系で、14は輪状高台で高台部以下は露胎のⅡ-1類。内面見込みと高台畳付部に白色の胎土目を残す。15は胴部の小片。16～19は龍泉窯系で、16・17は外面に鎔蓮弁が施されるⅠ-5・b類。18は見込みに方形の区画と「河範遺漬」の文字をスタンプしている。19は釉が厚くかかり、外面に雷文が施される上田分類のC類。14～15世紀代。

壺（20） 越州窯系と思われるもので、残存部分は露胎。外面体部下半に目跡らしき痕跡が見られる。外面は明赤褐色を呈するのに対し、内面は灰色を呈する。底径15.0cm。

黒釉陶器

壺（21） 残存する外面全体には濃い黒褐色の釉がかかり、内面には一部釉が垂れている。胎

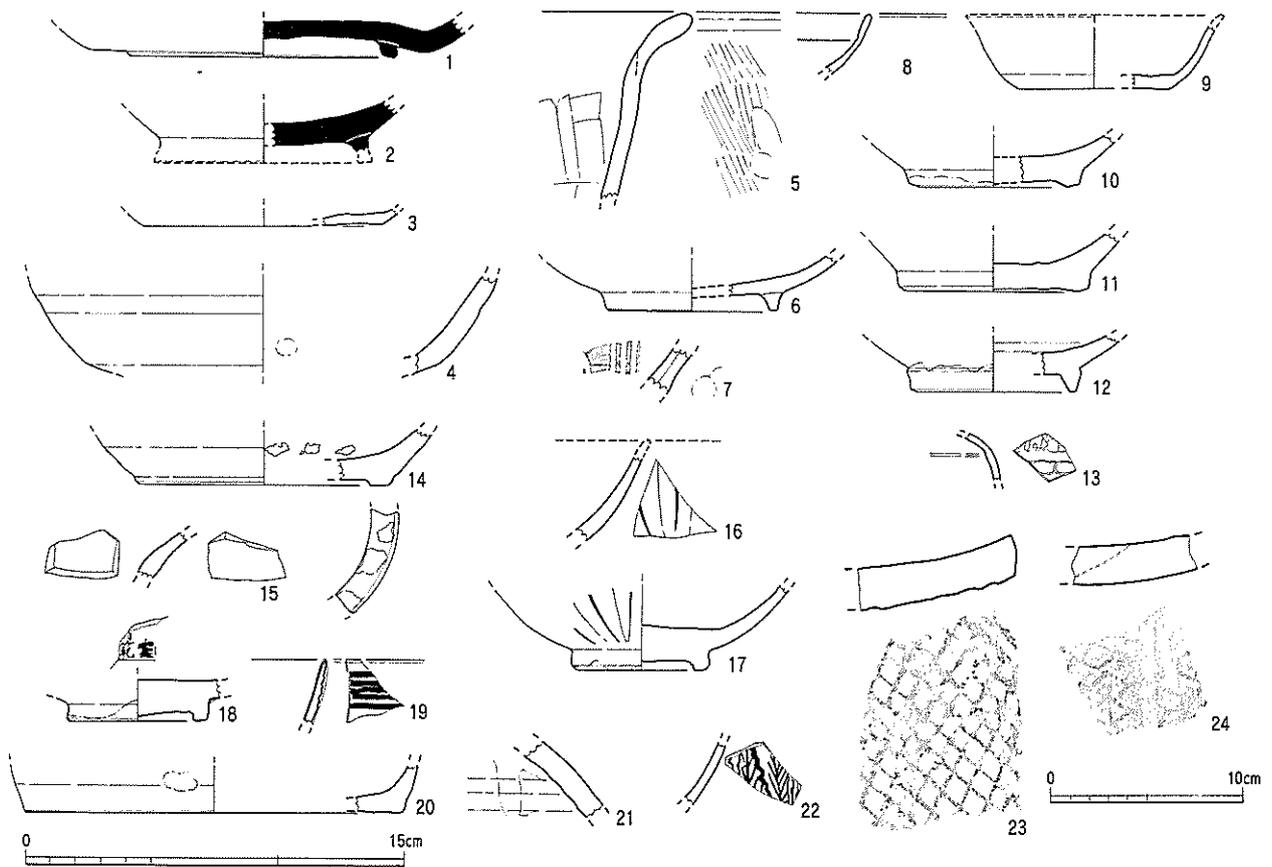


Fig. 9 第202次調査出土遺物実測図（1/3・1/4）

は明灰色を呈する。壺の肩部あたりと思われるが小片のため詳細は不明。

染付

明代の染付 碗(22) 小片だが、外面に芭蕉葉文を描く。小野分類の染付碗C群で、15世紀後半～16世紀前半の明代の染付。呉須はかすれる。

瓦類

平瓦(23・24) 23は凸面に縦方向に長い斜格子の叩打痕を残し、凹面には糸切り痕跡と一部擦り消しが見られる。側面はケズリにより2面を面取りしている。24は凸面に斜格子の叩打痕を残すものだが、斜格子の幾つかに縦線が見られる。凹面には布目痕跡が残ると共に、粘土板の接合痕跡(Z形)が見られる。

(5) 小 結

旧河道上に位置する 以上、2次に渡る当該地での調査の結果、御笠川の洪水堆積により当該地には遺構は存在しない、もしくは残存していないことが判明した。区画整理以前の旧地形図から類推してもわかるとおり、当該地は御笠川の旧河道と推測される箇所の中であり、その類推と一致する結果となった。

当該地は、調査前からある程度、遺構が存在しないであろうとの予測も立っていると同時に、区画整理により、旧表土面までの深度が非常に深くなるとの予想もあったが、あえて都合3回にも渡る調査を行ったのは、当該地が政庁前面官衙の対象範囲内であることによる。すなわち、史跡地外でありながらも、その重要性を考慮した結果によるものである。

遺跡の重要性を鑑みて、もし万一、重要遺構が存在した時の対処として、今回、市教育委員会、消防本部、設計業者との打ち合わせを何度となく繰り返したが、今回の調査では、幸いにも遺構が存在しなかったために、そのまま新庁舎は建設されることとなった。

しかしながら、今後も同様な地下遺構に影響を与えるような開発行為がこの地域で行われる可能性は十分考えられるため、当該地域の取り扱いについては、今後も協議を重ねていく必要があるであろう。

3 第207次調査（日吉地区の緊急調査）

(1) 調査概要

経過 今回の調査地は、日吉地区官衙の南側にあたり、宅地等の建設を行うに際して地下遺構の有無を確認するため、調査を行った。平成21年11月4日に調査を開始し、掘削を行ったが、後述するように遺構は認められなかったため、測量、写真撮影を行い、即日終了した。調査面積は20㎡である。

位置 日吉地区官衙の南側に当たる。地番は太宰府市観世音寺1丁目310番である。周辺では、北側隣接地で第32・80次調査が行われており、政庁周辺官衙跡の内、日吉地区官衙の主要な施設（掘立柱建物等）が多数検出されている。その

一方で、西側の第143次調査地や、東側の五反田地区に当たる第145次調査では、河川の氾濫等により遺構は確認されていない。

(2) トレンチ設定と基本層序

本調査地の北側には、前述したように日吉地区官衙跡の重要遺構の存在が判明していることと、南側へ行くほど御笠川の氾濫の影響を受けている可能性が高いことを考慮し、日吉地区官衙跡の遺構の残存状況を確認するため、南北方向に2本トレンチを設定した。(Fig.10)。

両トレンチの基本層序は (Fig.11)、上層から表土、区画整理事業時の盛土が堆積し、その下層に旧耕作土が見られ、この下位つまり現地表から約100cmの深さで、奈良～平安時代の土器・瓦類が含まれる青灰色砂と黒色土が混じる土層が見られた。また、さらに下層では、黒灰色シルト層と青灰色砂層が互層

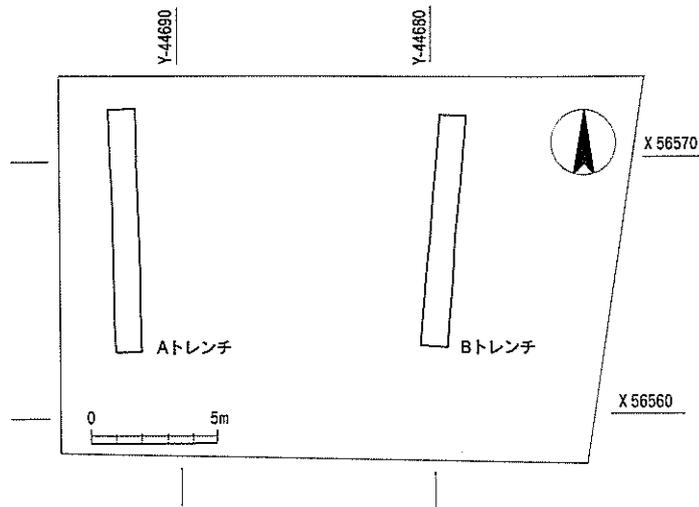


Fig.10 第207次調査トレンチ配置図 (1/300)

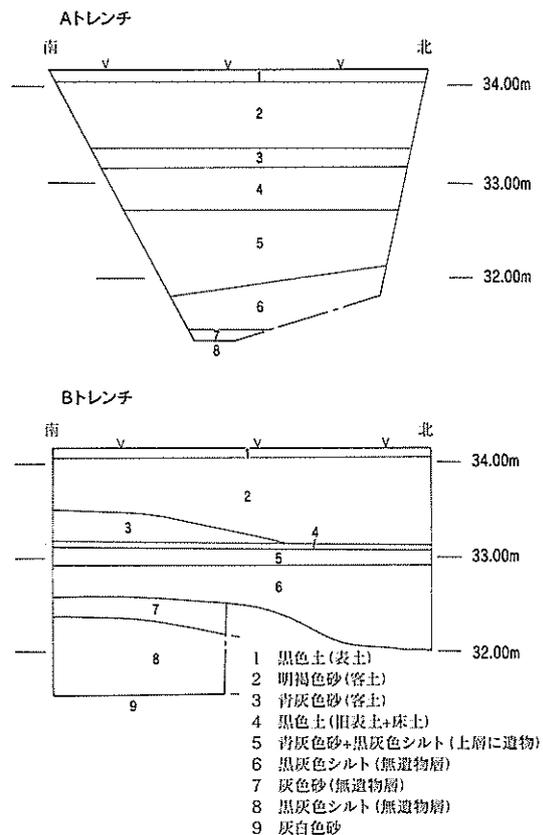


Fig.11 第207次調査土層模式図

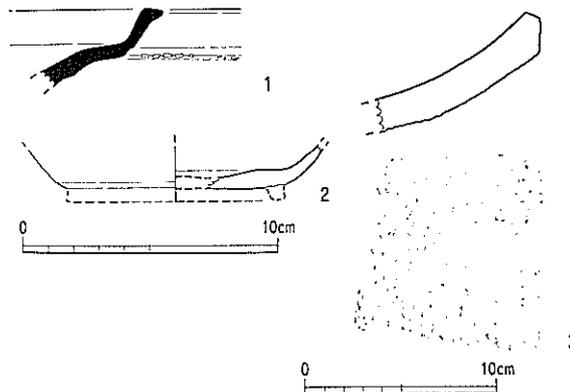
となって堆積していたが、遺物は確認されなかった (PL. 5)。

(3) 出土遺物

青灰色砂層出土遺物 (Fig.12, PL. 9)

須恵器

甕 (1) 口縁部片で、いわゆる二重口縁を呈する形態をとり、口縁端部は水平に外側に折り曲げる。屈曲部外面には、格子目タタキの痕跡が残っており、ナデ消していることが分かる。Aトレンチ出土。



土師器

坏 (2) 高台部が欠損していた底部片。全体が磨滅しており、調整は不明瞭だが、底部はヘラ切りのようなものである。胎土は明褐色で、褐色粒を含んでいる。Aトレンチ出土。

Fig.12 第207次調査出土遺物実測図 (1/3・1/4)

瓦類

平瓦 (3) 凸面に縄目の叩打痕、凹面には、糸切り痕と布目痕が残る。端面はケズリにより2面の面取りとなっている。現状では凹面には模骨痕は見られない。Aトレンチ出土。

(4) 小 結

当調査地において確認された青灰色砂と黒色土が混じる土層 (地表下約100cm) は、奈良～平安時代の遺物を含むものの、ビニールなどの新しい物も含んでおり、近年 (区画整理事業前) の耕作に関わる土層と考えられる。また、その下層については、遺物も検出されないことから、古代以前の堆積層 (阿蘇火砕流) と考えられ、古代官衙に関わる土層・遺構については、御笠川の氾濫等により消失したものと考えられる。区画整理前の旧地形を見てもわかるように、本調査地と北側隣接地の間には約1mの高低差があり、当調査地が御笠川の旧河道であったことが推測でき、今回の調査結果と一致していることがわかる。

御笠川の氾濫の影響を受ける

今回の調査では、顕著な遺構を確認することはなかったが、日吉地区官衙の現状における南限を押さえることができ、政庁周辺官衙跡の残存遺構の範囲の一端を特定できたといえよう。

Ⅲ 観世音寺境内および子院跡の調査

Ⅲ 観世音寺境内および子院跡の調査	
1 第203次調査（西辺域の現状変更に伴う調査）	19
(1) 調査概要	19
(2) トレンチ設定と基本層序	19
(3) 検出遺構	20
(4) 出土遺物	20
(5) 小 結	22
2 観世音寺境内出土資料の追補	23
(1) 報告の経緯	23
(2) 報告資料の概要	23

1 第203次調査（西辺域の現状変更に伴う調査）

（1）調査概要

経過 国史跡観世音寺境内および子院跡については、旧境内部分の調査については、平成18年度に正式報告書の刊行を全て終えたため、当面は計画調査等の本格的な調査は行われないものとなっている。ただし、旧境内の範囲内であっても、宅地の建替え等の現状変更に伴う調査については、引き続き九州歴史資料館が対応を続けている。

今回の調査地は、宅地等の建設を行うに際して地下遺構の有無および深度を確認するため、調査を行った。平成20年12月17日に調査を開始し、人力により掘削を行い、翌18日には検出を完了した。その後写真撮影、図面作成を行い、埋め戻しも含め19日には終了した。調査面積は3㎡である。

位置 境内西辺域の西側隅にあたる。地番は太宰府市観世音寺5丁目190番3号である。周辺では、南側隣接地で第48次調査、北側隣接地で第118次調査が行われており、第48次調査では、観世音寺境内と学校院跡との敷地を区画する南北溝S D205の東端と思われる溝S D1366が確認されている。

西辺域西側の調査

（2）トレンチ設定と基本層序

今回の調査は、現状の宅地が建ったままでの調査であったので、敷地内で掘削が可能であり、なおかつ敷地全体の遺構状況が推測できるような位置でのトレンチ設定が求められたため、宅地の南西側に東西方向に1箇所（Aトレンチ）、宅地の北東側に南北方向に1箇所（Bトレンチ）、計2箇所のトレンチを設定し

(Fig.13)、調査を行った。

本調査区の基本層序 (Fig.14土層図) は、上層から表土、住宅建設時の客土、住宅建設前の旧耕作土、床土が堆積する。さらにその下層については、Aトレンチでは、近世の包含層である褐色土層が堆積し、地表下約70cmで近世の石敷遺構S X4666が検出された。また、Bトレンチは、床土の下層すなわち地表下約55cmで黄灰～灰色を基調とする地山層を検出し、北側に落ちる溝S D4665の上面を検出した。遺構の詳細については、次項で述べる。

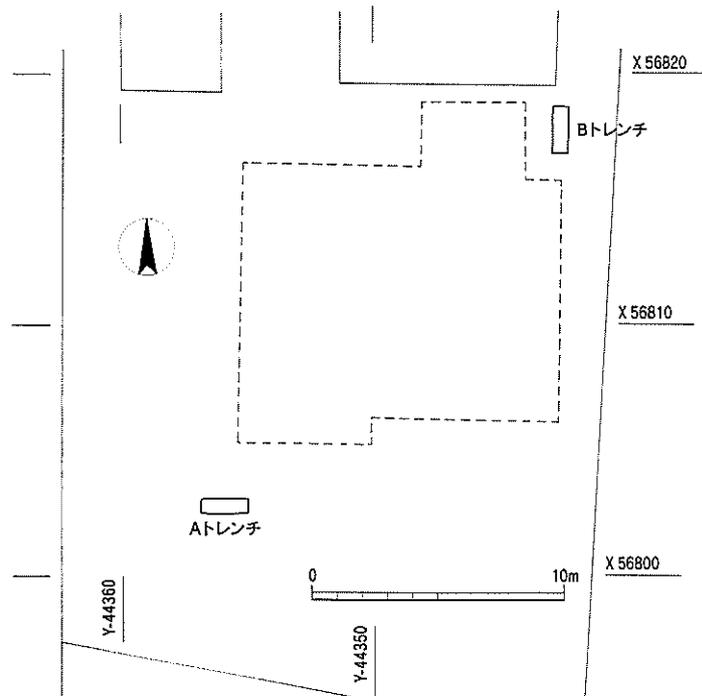


Fig.13 第203次調査トレンチ配置図 (1/300)

(3) 検出遺構

Aトレンチでは石敷遺構SX4666を、Bトレンチでは、溝SD4665を検出した。

溝

SD4665 (Fig.14, PL. 7)

12世紀代に埋没か

Bトレンチで検出した。地山層を切り込み、北側に落ちる。深さは約0.5mで、上面からの深さ0.2mあたりで急激に深くなっており、底面は平坦である。幅・長さについてはトレンチが狭小であるため不明だが、おそらく東西方向の溝(区画溝か)と考えられる。埋土は上層から暗褐色土、暗オリーブ灰色土、暗褐色土が堆積する。出土遺物から12世紀代に埋没したと考えられる。

石敷遺構

SX4666 (Fig.14, PL. 6)

近世の石敷遺構

Aトレンチで検出した。旧表土直下の近世包含層である褐色土を除去すると、石や瓦が面的に広がる状況が確認された。トレンチが狭小であるために遺構の広がりについては不明であるが、人頭大の礫から、小石、瓦片などが混じりながら広がっていた。石敷層の下層に空隙が見られ、非常に水の通りが良いことから、暗渠排水施設の可能性も考えられる。施設には古瓦片なども見られたが、直上に近世陶磁が完形に近い状況で出土したため、近世のものと考えられる。また、礫の中には赤く被熱したものも含まれていた。この石敷層の下層は灰褐色土が堆積しており、遺物等も含むことから地山層ではない。

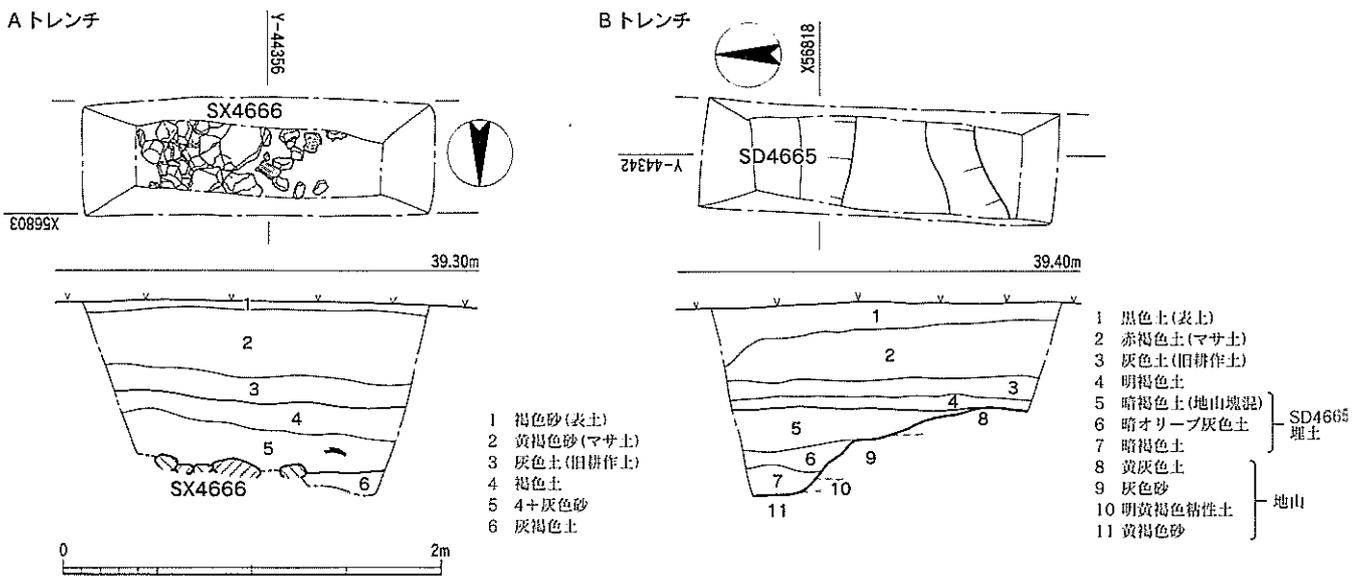


Fig.14 第203次調査区遺構配置図・土層図 (1/40)

(4) 出土遺物

SD4665出土土器・陶磁器 (Fig.15, PL. 9)

土師器

小皿(1) 口径8.8cm, 底径6.6cm, 高さ1.0cm。底部は糸切り。黄褐～褐色を呈する。

白磁

碗(2) 口縁端部を外側に水平に折り曲げるV-4類の小片。灰白色の気泡・貫入のある釉がかかる。

SX4666出土陶磁器 (Fig.15, PL. 9)

染付

碗(3) 内面には1条の界線, 外面には雲のような絵柄を描く。染め付けの色は、やや暗い藍色を呈する。近世の肥前陶磁。

陶器

碗(4) 体部下半から屈曲して直立する形態で、外面には、鉄釉や波状の黄褐色釉がかかり、内面の大半と底部は露胎。胎土は赤褐色を呈する。近世の国産陶器。

甕(5) 大甕の口縁部片で、口縁端部を外側に折り返して、口縁部を作り出している。全面に黄白色の釉がかかり、胎土は暗赤褐色を呈する。近世の国産陶器か。

Aトレンチ褐色土出土陶磁器 (Fig.15, PL. 9)

白磁

碗(6) 細く高い高台を持つV類。内面には沈線状に釉だまりが見られる。体部下半以下は露胎。高台径6.2cm。

瓦塼類 (Fig.16, PL. 9)

平瓦(1~5) 1は凸面に叩打痕。2~4は格子文様の叩打痕を持つもので、2は老司式に伴う平瓦で、正方形の格子が連続する。3は細かい斜格子、4・5はやや大きい斜格子で、5の斜格子の中の幾つかには十字やXの文様が入っている。1・3・4がSX4666, 2・5がAト

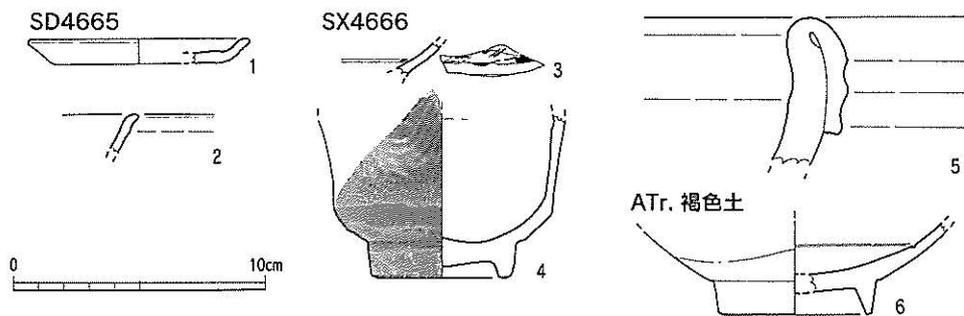


Fig.15 第203次調査出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

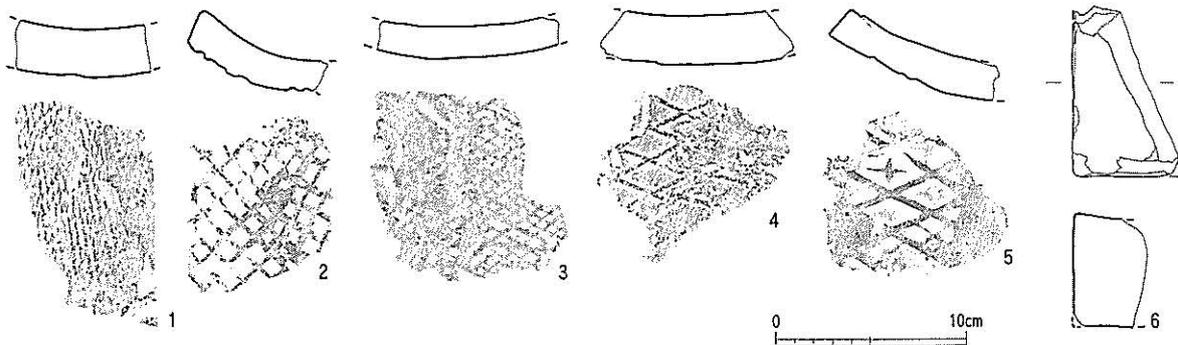


Fig.16 第203次調査出土瓦塼類拓影・実測図 (1/4)

レンチ褐色土から出土した。

無紋埴(6) 約6cmの厚みを持つもので、四隅の内の1つが見られる。全体をケズリにより調整。S X4666出土。

石製品・土製品等 (Fig.17, PL. 9)

石鍋(1) 体部の破片。外面にはやや細かい縦方向のケズリが見られる。Aトレンチ褐色土出土。

瓦玉(2) 径2.1cmの不整円形を呈する。瓦を転用して玉状製品にしている。Aトレンチ褐色土出土。

鞆羽口(3) 鍛冶もしくは鋳造に用いられた鞆羽口の先端部。表面は被熱により暗緑色～黒色の溶解物が付着する。胎土は明褐色。Bトレンチ褐色土出土。

土塀焼土塊(4・5) 4は暗黄褐色を呈し、約4～5cm残存。5は4よりも小さく、胎土は明褐～赤褐色を呈し、石英粒の他、スサ痕跡が見られる。築地等の土塀の破片であろうか。共にS D4665出土。

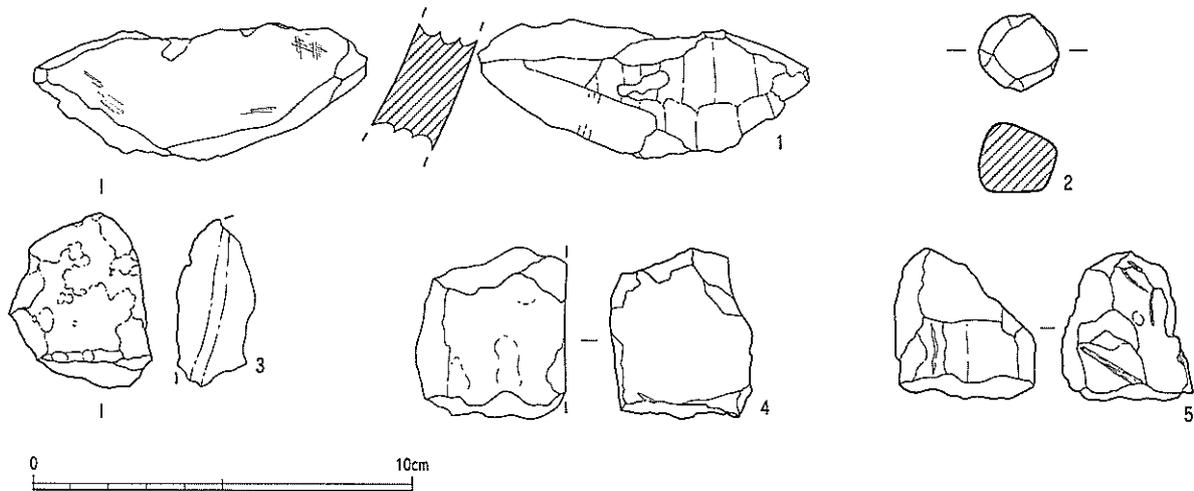


Fig.17 第203次調査出土石製品・土製品等実測図 (1/2)

(5) 小 結

暗渠排水施

今回の調査では、12世紀代に埋没したと考えられる溝1条と、近世の暗渠排水施設とも考えられる石敷遺構1箇所を確認するに留まり、古代観世音寺に直接関わる遺構については検出されることはなかった。境内西辺域については、計画調査段階でも本格的な調査が行われることがなかった地区であり、その状況についてはほとんどわかっていないのが現状である。しかし、前述したように、境内の計画調査については、一段落ついた状況でもあり、近い内に大規模な調査が行われる公算はないであろう。

今後は、今回のような現状変更に伴う調査において、最小限の掘削で最大限の調査成果を上げられるような努力を行いながら、わずかずつではあるが、調査成果を積み上げていきたい。

2 観世音寺出土資料の追補

(1) 報告の経緯

国指定史跡・観世音寺境内および子院跡の内、観世音寺境内部分については、平成16～18年度における正式報告書の刊行をもって、現段階における報告作業を全て終了した。その後、報告から漏れていた重要資料について、『観世音寺—考察編—』、『大宰府史跡発掘調査報告書V』において速報的に追補しており、今回もその追補の報告を行う。今回は、陶磁器類・瓦磚類・墨書土器が中心となっており、また、観世音寺境内出土遺物の最終的な整理・収納が終了したため、今回の報告をもって、観世音寺出土資料の追補の報告はいちおう終えることとしたい。正式報告に掲載することなく、このような場での掲載となったことを御容赦いただきたい。

正式報告書の補遺

(2) 報告資料の概要

a. 土器・陶磁器

中国産陶磁器 (Fig.18, PL.10・11, 巻頭PL. 1・2)

唐三彩

壺 (1) 観世音寺境内の調査の中で、東辺域45次・119次で、唐三彩の壺の破片が出土したが、これはそれらと同一個体と考えられる口縁部の破片。約1/3残存しており、復元口径は14.4cm、全体的に白釉を掛け、褐釉と緑釉をかけている。口縁内部にまで釉は到達している。胎土は精良な白色土を用いており、唐三彩としての特徴を具備している。これまでの既報告分と併せ、詳細な検討については、別稿 (岡寺2010) で行うため、そちらを参照願いたい。119次茶灰色土出土。

唐三彩の口縁部

越州窯系青磁

碗 (2) 体部中程で屈曲し、口縁端部は外反する形態のもので、体部外面にはへら描きによる粗雑な斜線が何本も入る。全面にかかった釉は光沢のある暗緑色を呈しており、胎は灰色。類例を知らないが、釉調や胎から越州窯系と思われる。119次SE3495出土。

耳皿 (3) 端部が内側に折り曲げられた口縁部片。釉は緑灰褐色。70次濁茶色土出土。

壺 (4) 経巻等を取めるのに用いられるような細頸・短頸の胴長壺。濁緑灰色の釉がかかり、底部には、目跡が確認できる。23次調査出土。

龍泉窯系青磁

碗 (5・6) 5は内面に片切り彫りによる剗花文、外面に鎬蓮弁をもち、I-2類とI-5・b類の要素が見られる珍しい類例で、未分類のもの。6は内面に細かい片切り彫りの文様を施すもので、いわゆる初期龍泉窯系にあたるものかもしれないが、小片のため断定はできない。

未分類の青磁碗

白磁

皿 (7) 口縁部は玉縁状になると共に、底部が平底。太宰府市分類のII-2類。外面は口縁部以下は露胎。乳白～青白色の釉がかかる。

青白磁

香炉 (8) 牛が浮き彫りされた脚の部分と思われる。『観世音寺—遺物編2—』のFig.287-2に類例が掲載されており、出土地点も近く同一個体の可能性が高いが、内面の色調がやや異なっている。111次S-374出土。

立像(9) 花瓶かもしくは筆立てのような容器の最下部。木の枝もしくは着物の襞のような浮き彫りが施されている。透明の青白色の釉がかかる。底部には布目痕が確認できる。43次SK 1098出土。

澗青釉陶器

小鉢(10) 口縁部の破片で、黄褐色の釉を掛けた上から、口縁端部を中心に水色の釉がかかっている。鈎窯系の可能性も考えられるが、詳細は不明。43次灰褐色土出土。

器種不明(11) 把手の一部のように見えるが、全体的な形状は不明。やや厚く不透明な水色の釉がかかる。釉には気泡が目立ち、いわゆる傍鈎窯系とも考えられる。45次茶褐色土出土。

黄釉鉄絵陶器

盤(12・13) 共に内底面に漢字を鉄絵している。12は「元」、13は「福?」で、内面全体に黄緑灰色の釉がかかり、外面は露胎で暗褐色を呈する。磁窰系黄釉陶器。

褐釉陶器

完形の褐釉壺(14) 完形品。全体的に不透明な暗褐色の釉がかかり、胴の肩が張る形態のもので、口縁

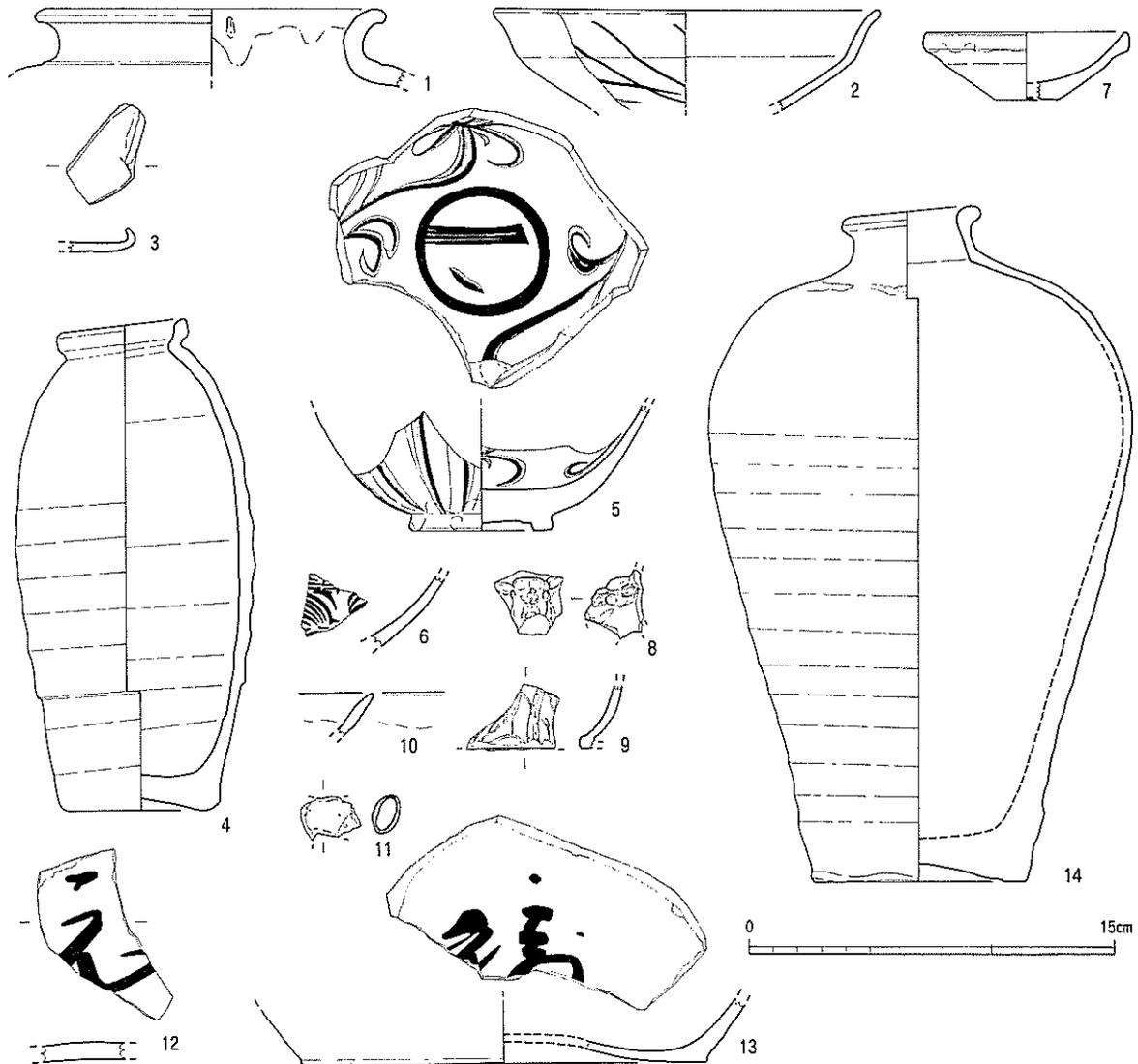


Fig.18 観世音寺出土陶磁器実測図(1)(1/3)

端部は丸く取めている。胴部の上部には帯状に胎土目が付着しており、底部にも砂目が確認できる。あまり見られないものだが、形状から考えて13～14世紀頃の中国産と考えられる。119次S-1出土。復元口径5.8cm、底径8.8cm、復元最大径17.3cm、高さ27.8cm。

朝鮮半島産陶磁器 (Fig.19・20, PL.10・11, 巻頭PL. 1)

青磁

皿 (15) 灰白色の胎に、浅青緑色の釉がかかる。高台は削り出しており、高台径4.8cm。

碗 (16) 灰白色の胎に、透明な緑灰色の釉がかかる。内面見込みには目跡が4箇所確認できる。高台と体部との間には沈線を施している。28次出土。

鉄絵青磁

梅瓶 (17) 43次茶灰色土・黒灰色土から出土したもので、濁緑灰色の釉が全体的にかかり、胴部中央に牡丹の鉄絵が施される。鉄絵は釉の上から描かれたと言うよりも、型紙のようなものを器壁に貼り付けて、その上から釉を掛けています、つまり、鉄絵が釉をはじいているような印象を受ける。復元最大径17.8cm。詳細については、別稿に報告したため、そちらも参照したい (岡寺2009)。

高麗産鉄絵
青磁梅瓶

象嵌青磁

碗 (18～28) 18は比較的小型の碗で、内面に上下2条の界線の間には円文をたくさん象嵌する。119次黒褐色土出土。19は外面に2条の界線、内面には円の中に花文を象嵌し、その下に2条の界線を象嵌で巡らす。70次S D 1805出土。20は内面に菊花文とその下に2条の界線を象嵌で巡らす。119次S-265出土。21は大型に復元できるもので、内外面に3条ずつの界線を巡らし、内面の界線の下には、梅花状の文様を巡らしている。28次出土。22は内外面に花卉状の文様を、一部黒象嵌を用いながら巡らしている。16次出土。23は外面に1条の界線、内面には上下界線の間には円文を巡らす。130次暗灰色土出土。24は21と文様構成は類似。45次茶褐色土出土。25は外面に2条の界線とその下に不明瞭な文様、内面には、幾何学文様帯の下に×型の文様が象嵌される。28次出土。26は外面に界線と梅花状文、内面には梅花状文と鳥文を黒象嵌を用いつつ描いている。45次床土出土。27・28は恐らく同一個体で、外面に2条の界線の下に魚鱗状の文様、内面には界線の間には列点文帯や草花文を象嵌している。共に70次調査出土で、27は茶灰色土、28は茶色土出土。

杯 (29～31) 29は完形の底部が残る破片で、内面見込みに二重の界線が確認できるのみで、それ以外の文様は不明。底部は目を打ち欠いた痕跡が3箇所確認できる。111次S-154出土。30・31は見込みに如意頭文を象嵌するもので、30は111次黒色砂質土、31は28次出土。

皿 (32) 体部片で、内面全体に列点文と崩れた如意頭文が施され、外面には、わずかに蓮弁が象嵌されているのが確認できる。109次床土出土。

梅瓶 (33・34) 33は肩部の破片で、蓮弁状の文様と2条の界線が見られる。内面は露胎。119次黒褐色土出土。34は体部下半の破片で、外面上部に花文、2条の界線を挟んで下部には蓮弁が見られる。割れ口には黒漆が点々と付着しており、破損後も漆により接合されたことがわかる。内面は露胎。117次暗褐色土出土。

陶枕 (35) 略三角形の透かしが入る破片で、外面の透かしに沿って、白象嵌の線が入っている。111次黒色砂質土出土。

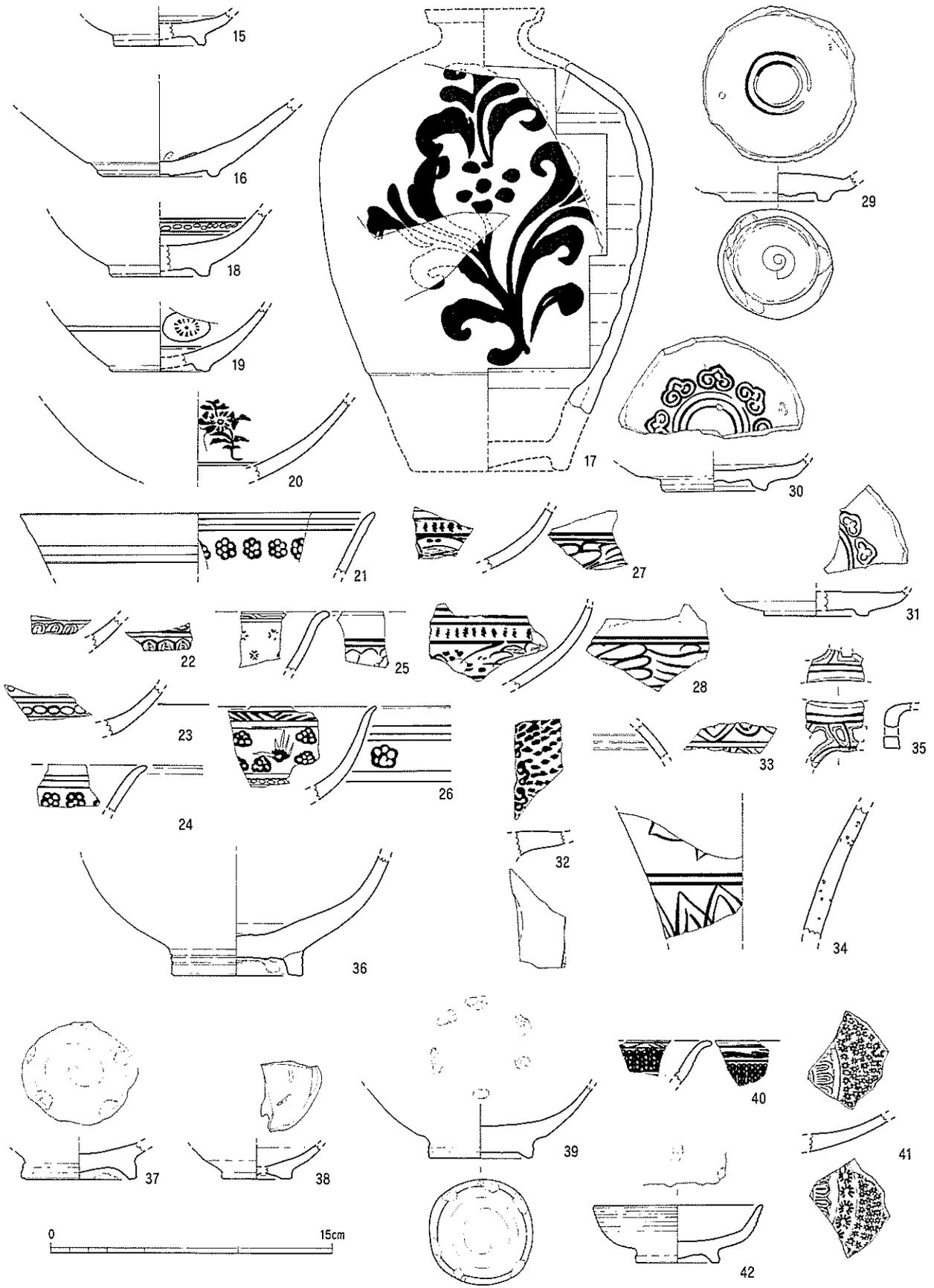


Fig.19 観世音寺出土陶磁器実測図 (2) (1/3)

灰青沙器

壺 (36) 全体的に白濁した褐色もしくは青灰色の釉がかかり、非常に質の悪さを感じる。高台が非常にしっかりしており、碗ではなく壺と考えられる。117次出土。

雑釉陶器

碗 (37～39) 37は明赤褐色の胎土にクリーム色の釉がかかる。見込みには5箇所の砂目が見られる。白磁とすべき物かもしれない。38・39は灰色の釉がかかるもので、見込みに目跡を残す。38の胎土は灰色、39は白灰色を呈する。

粉青沙器

杯 (40) 内外面に細かい円文を連ねるいわゆる「厝手」。口縁端部付近には界線と斜線の象嵌が入る。115次床土出土。

皿 (41・42) 41は非常に細かい花文をちりばめるもの。この他、外面には菊花文と花卉状の文様、内面にも花卉状の文様を象嵌する。42は暗赤色の胎土に白色土が全体的にかけられる。底部付近は、いわゆるカイラギ状となっている。

無釉陶器

壺 (43～49) 基本的に表面は灰～暗灰色を呈し、胎土は暗褐色を呈する。43は丸く収める口縁部片。次数不明。44は肩部片。120次茶褐色土出土。45～47は胴部下半の小片。45の外表面の色は褐色で、他の資料とはやや異なる。45は45次茶褐色土、46は次数不明、47は23次出土。48・49は底部の破片で、共に内面のロクロ挽きの痕跡が顕著。49の復元底径は16.2cmだが、胴部は扁壺状になっている。48は119次茶褐色土、49は117次SD3440・暗褐色土出土。

高麗産無釉陶器

国産土器・陶磁器 (Fig.21, PL.11)

土師器

坏 (50) 50は口縁端部がやや内傾気味になる7世紀代のもので、内外面に手持ちのヘラミガキ調整が見られる。61次SK1521出土。

緑釉陶器

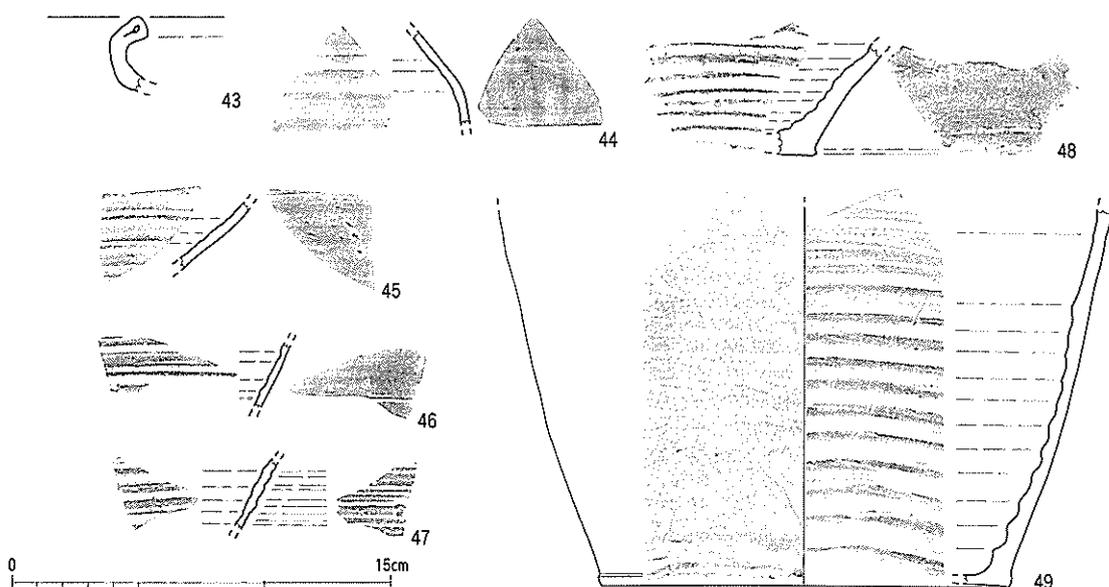


Fig.20 観世音寺出土陶磁器実測図 (3) (1/3)

椀 (51) 体部下半から底部にかけての破片で、胎土は須恵質で濃緑色の釉がかかる。底部は露胎で、糸切りの痕跡が明瞭。39-1次暗褐色土出土。

水注 (52) 水注の把手の部分で、胎土は須恵質で淡緑色の釉がかかる。39-1次旧耕作土出土。

鉄釉陶器

花瓶 (53) 瀬戸産の鉄釉で、印花手法により蓮花が施される。小瓶の胴部の破片である。111次SK3257出土。

灰釉陶器

小皿 (54) 口径7.8cm、底径4.4cm、高さ2.3cm。底部は糸切り。底部を除き、気泡のある黄白色の釉がかかる。灰釉陶器ではないかもしれない。23次出土。

その他陶器

甕 (55～59) 全て常滑産のもので、55は口縁端部の内側に1条の沈線を巡らす。56・57は胴部片で、外面に四角に×印のタタキ痕跡が見られる。58・59はN字口縁の形態のもので、表面は赤褐～暗褐色を呈する。55は111次S-641、56は119次S D 1300、57は117次S-52、58は45次S-7、59は111次S-99から出土した。

近世陶器

鉢 (60) 底面端部に巴文と何かの漢字をスタンプする。外面は露胎で、内面は暗黄褐色の釉がかかる。どのような性格のものかは全く不明。

碗 (61・62) 61は唐津焼と思われ、外面は暗赤褐色の胎に濃黄緑色の釉がかかる。内面は黄褐色の化粧土がなされているようであり、表面には金箔のような金色の付着物が見られる。120

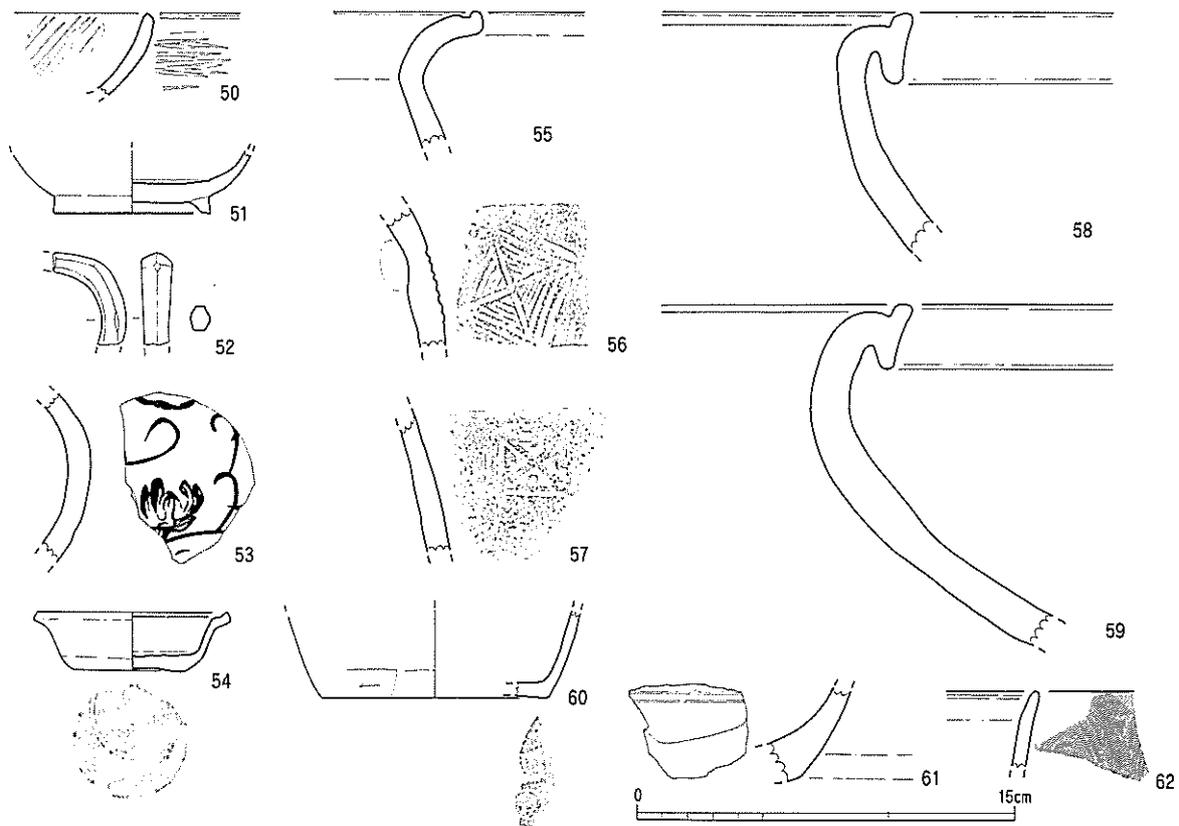


Fig.21 観世音寺出土土器・陶磁器実測図(4) (1/3)

次淡茶色土出土であり、唐津とするならば層位の年代より新しい遺物であり、混入と考えられるが、そうでないとするれば、10世紀頃の製品を想定すべきであろう。

b.瓦塼類 (Fig.22, PL.12)

軒瓦

軒丸瓦 (1~4) 1はいわゆる中世の草花紋軒丸瓦とよばれるもので、本報告ではS0006型式とされたものである。瓦当中央に流線状を呈した宝相華紋状の表現をあしらっている。120次調査北辺域や38次調査学校院跡で同範の資料が見つかった他、博多遺跡群でも類似した紋様の資料も見つかっており、常松幹雄の分類ではF類とされるものである(常松1992)。23次調査で出土した。2は、瓦当の約1/5が残存する資料で、内区に花卉状の紋様を陰刻し、外区に面違いの三角紋を巡らしている。109次暗褐色土出土。3は内区は無紋、外区には7つの円弧紋を巡らし、その周囲にさらに界線を陰刻する。瓦当面の直径は10.9cm。28次出土。2・3は他に類例を知らず、一見軒丸瓦であるか否かを躊躇するが、3の裏面に丸瓦を貼り付けたような圧痕が見られることや、1~3の胎土が褐色系の同様な焼成具合を呈することから、軒丸瓦と判断した。4は戒壇院所蔵瓦で真っ黒に燻される。直径15.2cmの瓦当面に3つの花と5つの葉の桐紋を大きく表現している。丸瓦凸面には3箇所の目釘孔と、小判型の円に囲まれた「今宿三右エ門」のスタンプが刻印される。瓦当紋様、スタンプ刻印とも本報告には掲載されていないため、取り上げた。全長41.2cm。

草花紋軒丸瓦

軒平瓦 (5~8) 5は子葉が反転しながら派生する均整唐草紋をあしらった表現で、中心飾りは欠損のため不明だが、灰褐色を呈する古風な色調を呈することや他の類例から考えて宝珠紋と思われる。43次黒灰色土出土。6は無紋の瓦当面のもの。平瓦凸面には斜格子と中に三葉形の紋様がスタンプされる叩打痕が見られる。126次補足調査5トレンチ褐色土出土。7は戒壇院所蔵瓦で、銀光りするほどに燻されている。11弁の花弁を持つ中心飾りを持ち、太い均整唐草紋が1転している。8は戒壇院本堂に葺かれていた瓦で、7弁の花弁をもつ半円形の花紋の中心飾りから、蔓草状の均整唐草文が左右に延びている。上端幅26.5cm、全長29.4cm。また、瓦当の右側には、「宰府忠□(七)」のスタンプ刻印が施されている。この「宰府忠七」のスタンプは、「西戒壇」と記される軒丸瓦M0003型式の瓦当裏面にも見られ、このM0003型式の瓦に「文政五年(1822)二月」のへら描きがなされるものがあることから、この資料も文政5年段階に製作されたものであると考えられる。

スタンプ刻印瓦・道具瓦

スタンプ刻印瓦 (9) 上端幅30.5cm、全長35.5cmの平瓦で、凹面左下よりに「元禄十四年仲秋□□【改行】戒壇和上惠灯□(照)代」とスタンプされる。本報告のFig.58-66掲載の「元禄…【改行】戒壇…」のスタンプ刻印と同一のものと思われる。他のスタンプの類例の中には、元禄14年(1701)の夏に楼門を建造する際に使用されたことがわかるものがあるが、今回の類例が元禄十四年仲「秋」と読めるとすると、楼門の完成が仲秋までずれ込んだのか、それとも本堂の改修等が楼門の完成後に行われたかという可能性が考えられる。いずれにせよ興味深い資料である。

新種のスタンプ瓦

文様塼 (10・11) いずれも既出資料だが、類例に乏しいために掲載した。10は本報告

Fig.32-7と同範のもの。黄褐色を呈し、鳥の尾翼部分が残る。111次S D3300出土で、11世紀後半代に位置づけられる。11は本報告Fig.32-8と同範のもの。内区に偏行唐草紋と下外区に線鋸齒紋が見られる。121次S D3630出土で、12世紀後半代に位置づけられる。

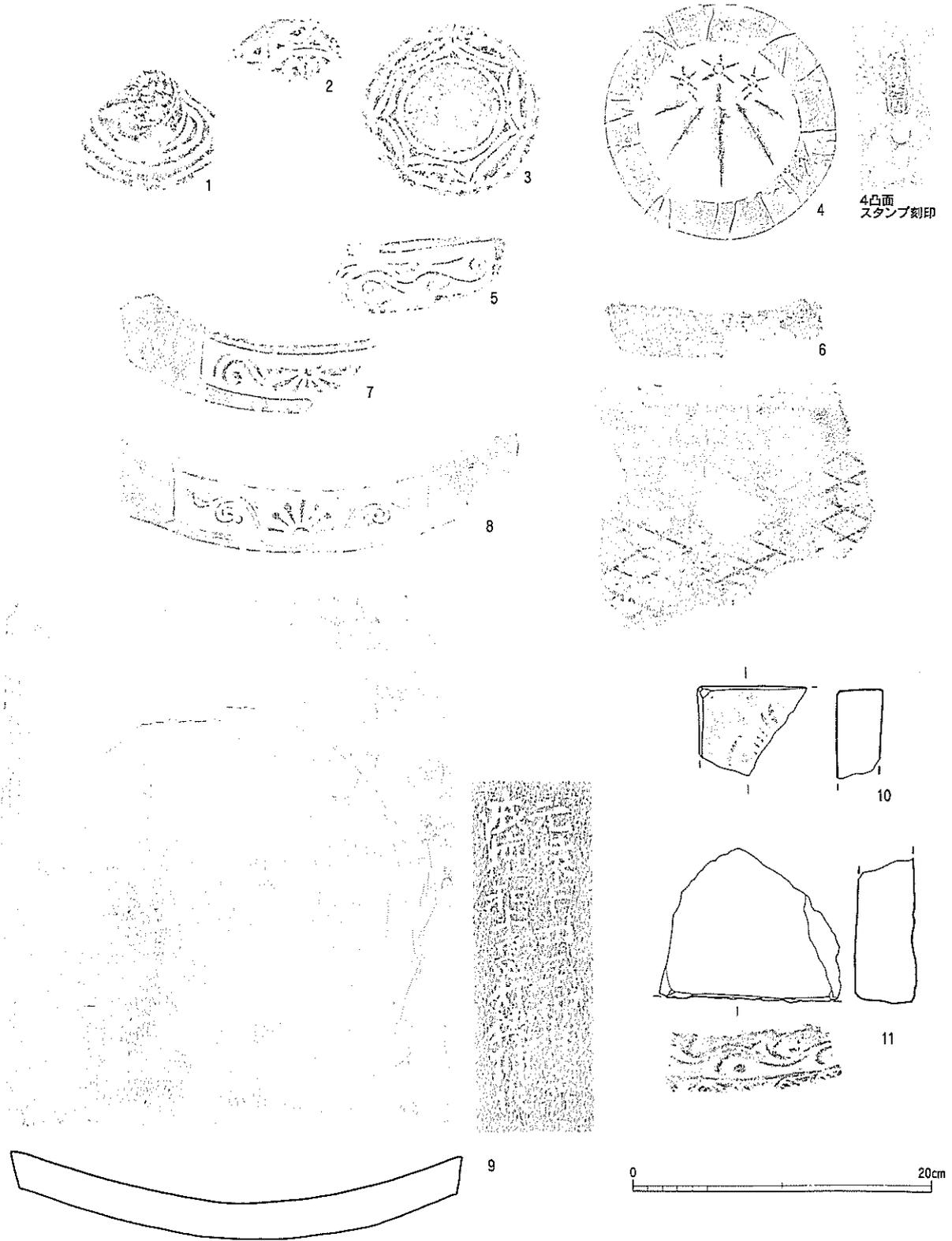


Fig.22 観世音寺出土瓦埴類拓影・実測図 (1/2・1/4)

c. 特殊遺物

墨書・刻書土器・陶磁器 (Fig.23・24, PL.13・14)

1・2・4・9が刻書土器で、3・5・6～8・10～14が墨書土器である。

須恵器坏蓋(1) 口縁部内面に身受けのかえりを有する。低平な器形で、撮みを欠損する。口径は13.0cmに復原した。口縁部ヨコナデ、外天井部手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。内面のかえり寄りに「H」字形の記号を刻んでいるが、製作時の窯記号とみられる。東辺域第119次調査SK3467の出土。

土師器短頸壺(2) 口縁～肩部破片で、口径は16.6cmに復原した。口縁部は短く直立する。磨滅が著しいが、器面調整は内面ナデ、外面ヘラケズリであろう。外面の口縁部直下に刻書があり、「七」と「木」の文字が横方向に続けて刻まれており、三水偏はないものの七の異字体の「朮」と解釈した。北辺域第70次調査床土の出土である。

土師器台付皿(3) 高台部破片で、高台径は7.2cmを測る。見込みに3列3文字づつ墨書があり、右側から「□雨雨」、「六月願」、「夙夙夙」とあり、1列目の最初の文字は判読不明であるが、雨に関係する文字であろうか。3列目の最初の文字は風の崩し字か、或いは夙(つとに)と判読した。右側に雨、左側に風、中央に六月願とあることから雨乞いに関する呪符かと思われる。また、高台内にはひらがなで3文字「おくや」の墨書があるものの意味不明。当遺物は1957年(昭和32)に観世音寺収蔵庫建設に関連して行われた講堂・回廊・中門の調査の際に出土したもので、注記には42T中辺とある。

雨乞いの呪符

白磁碗(4～6) 4は口縁部破片で、底部は欠損するもののIV-2類になろうか。口径は17.2cmに復原した。外面に「金」の針書文字がみられるが、その隣にもう1文字ありそうである。南面域の第39-3次調査暗褐色土中の出土。5・6は白磁碗の底部破片で、5がIV-1類、6はV-2類になろう。5は底径の1/2程の破片で、高台内に墨書があり、時計回りに「○」の記号を書いている。南辺域第111次調査ピットの出土。6の高台は高めで、底部周辺を丸く打ち欠いている。見込みには三つ葉様の模様を片彫りしている。高台内に「上」の墨書とその横に判読不明の墨痕がみられる。東辺域第45次調査溝SD1230下層から出土した。

青磁碗(7・8) 青磁碗の底部破片で、7が同安窯系I類で、8が龍泉窯系I-4類に分類される。7は内面に櫛歯で流水状の文様を入れている。高台内に記号風の墨書が3文字分あるが、文字なのか記号なのか判読不明。8は見込みに圏線を描き、その中にキノコ状の文様を片彫りしている。高台はケズリ出しにより、3段の段を有する。墨書は高台内にあり、「賀」の文字を崩したものであるが、見方によっては人の脚風にも見え、墨書そのものは呪符とみられる。大房跡第43次調査茶灰土の出土で、類例として南辺域第109・111次調査SX3310からも同様な呪符を墨書した土師器皿が出土している。

呪符

青磁皿(9・10) 9は同安窯系青磁皿で、I-1-a類に分類されるものである。全体の1/3程の残存状態で、器高1.9cm、口径10.0cm、底径4.6cmを測る。見込みには針書きによる刻書が2文字あり、「体應」と読める。應は応の旧字体であるが、体應の意味そのものは不明。東辺域第45次調査茶褐色土の出土。10は青磁小皿の底部小片で、底径は3.5cmを測る。底部外面はケズリのままで露胎。底部外面中央に「干」の文字を墨書している。南辺域第111次調査茶褐色土の出土。

陶器鉢 (11) 底部破片で、底径7.4cmを測る。底部外面の3ヶ所に粘土を貼付し、脚として
いるが、接地面は底部端で、脚としてはすでに形骸化している。内面は飴釉で、外面には灰白色
のスリップを施している。墨書は上底の底部外面に2文字あり、「了了」であろうか。東辺域第
66次調査攪乱土中の出土。

陶器壺 (12) 体部破片で、底径13.6cmを測る。平底の底部から一旦直立し、良く締まった頸
部に移行する。口縁部を欠くものの二重になるか。内底面から外面にかけて緑味を帯びた釉を施
す。墨書は底部外面にあり、中央に「一」の文字、側縁にも3文字程みられるが判読不明。第
188次調査金堂Aトレンチ段落ち攪乱土の出土。

陶器捏鉢 (13) 体部破片で、外面ヘラケズリ、内面横方向のカキ目による。高台径は10.5cm

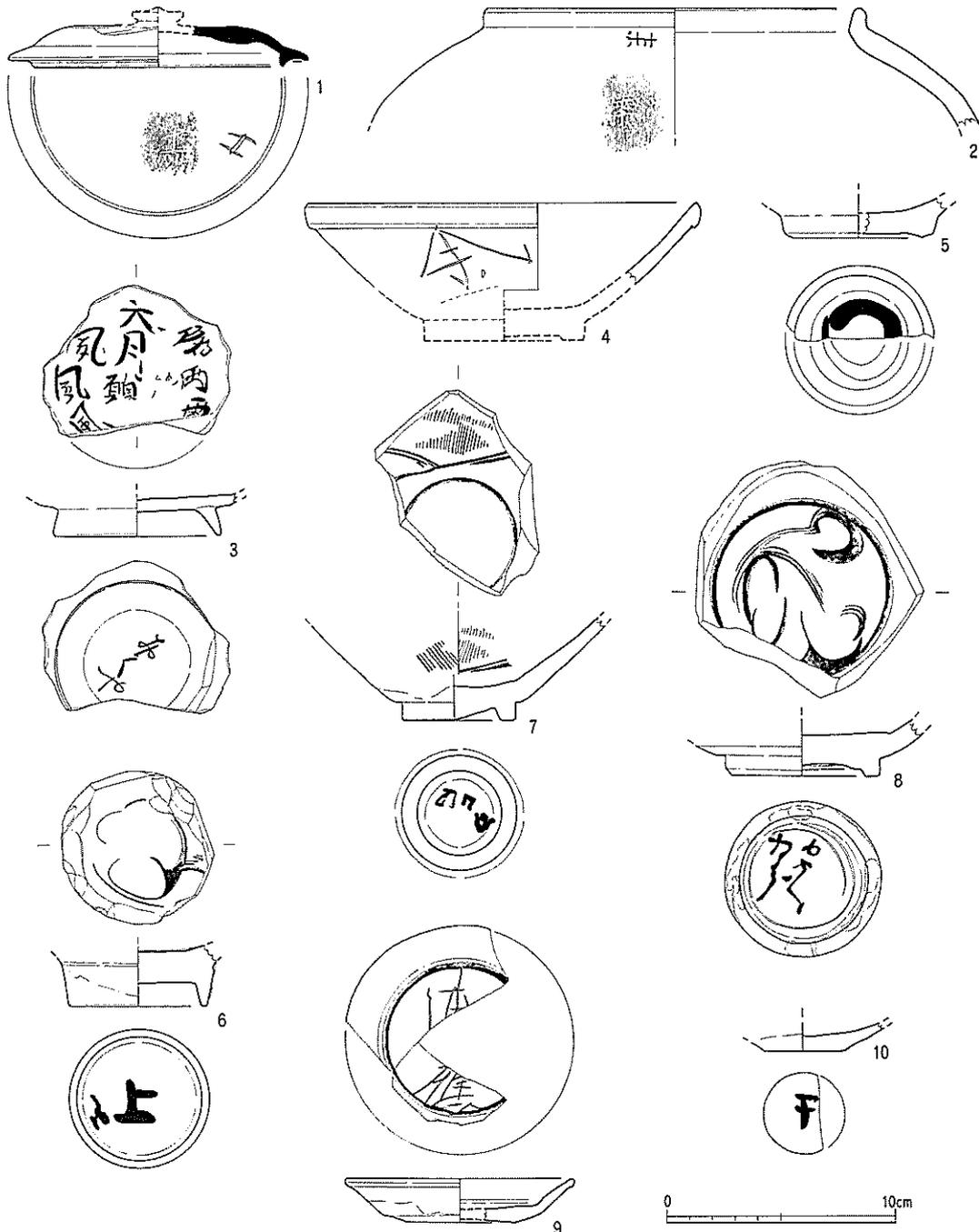


Fig.23 観世音寺出土墨書・刻書土器・陶磁器実測図 (1) (1/3)

に復原した。高台内に「文」の文字を墨書している。南辺城第130次調査表土の出土。

陶器乗燭 (14) 芯立て部分を欠く。油皿径10.25cmを測る。油皿部内面から口縁部にかけて緑色釉の上に飴釉を二度掛けしている。底部外面に「三十」の文字を墨書している。南辺城第130次調査S D 3865の出土である。

土製品 (Fig.25, PL.15)

土錘 (1~4) 1~3は管状土錘で、4は棒状土錘。1は完存し、全長4.9cm、径0.9cm、孔径0.1cmで重量4.0gである。2は両端の一部を欠損し、残存長4.1cm、径1.5cm、孔径0.35cmで重量7.9gである。3は大型品で、上端の一部以外は欠損する。残存長6.0cm、径3.3cm、孔径1.0cm、重量63.8gで、板状粘土を管状に巻いて成形する。4は端部の一部を欠くが、ほぼ完形である。全長6.5cm、径1.6cm、孔径0.4cmで、重量21.0gである。

模造鏡 (5) 最大長4.7cm、厚さ約1cmの円盤状を呈する。鈕の部分は、指圧で成形し、一部に爪状の圧痕が残る。また、鏡面の一部に銅錆が付着する。

鏡面の一部
に銅錆が
付着

人形 (6~9) 6, 7は断片のため全形が不明だが、色調と胎土から同一個体の可能性が高い。8は全長9.95cmの動物形土製品で、左手と左足の一部を欠損する。目と鼻は線刻で、耳は円盤状

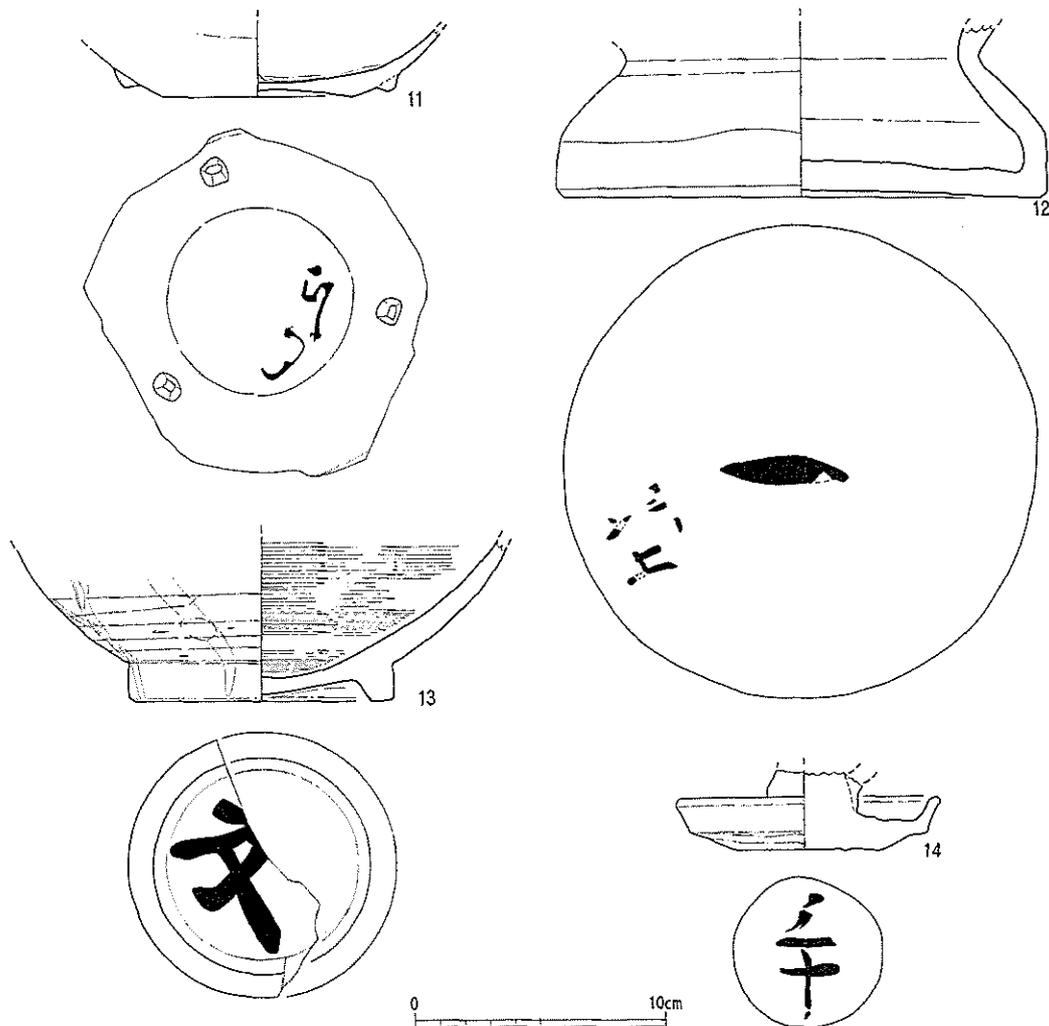


Fig.24 観世音寺出土墨書・刻畫土器・陶磁器実測図 (2) (1/3)

の粘土を貼り付けて表現する。成形時の指頭痕が残り、やや粗雑な調整である。9は人形の足先で、砂粒をほぼ含まない良質な胎土を用いる。調整は緻密で、指先の質感を丁寧に表現する。

獣脚（10）陶磁器の脚部で、胴部との接合面で剥離する。脚端には爪、膝頭には獣面を線刻で表現する。また、獣面の中央には径約1cmの剥離面があり、鼻先に粘土を貼り付ける。外面のみに薄く釉薬がかかるが、緑黄色を呈し、発色はやや不良である。

石製品 (Fig.25, PL.15)

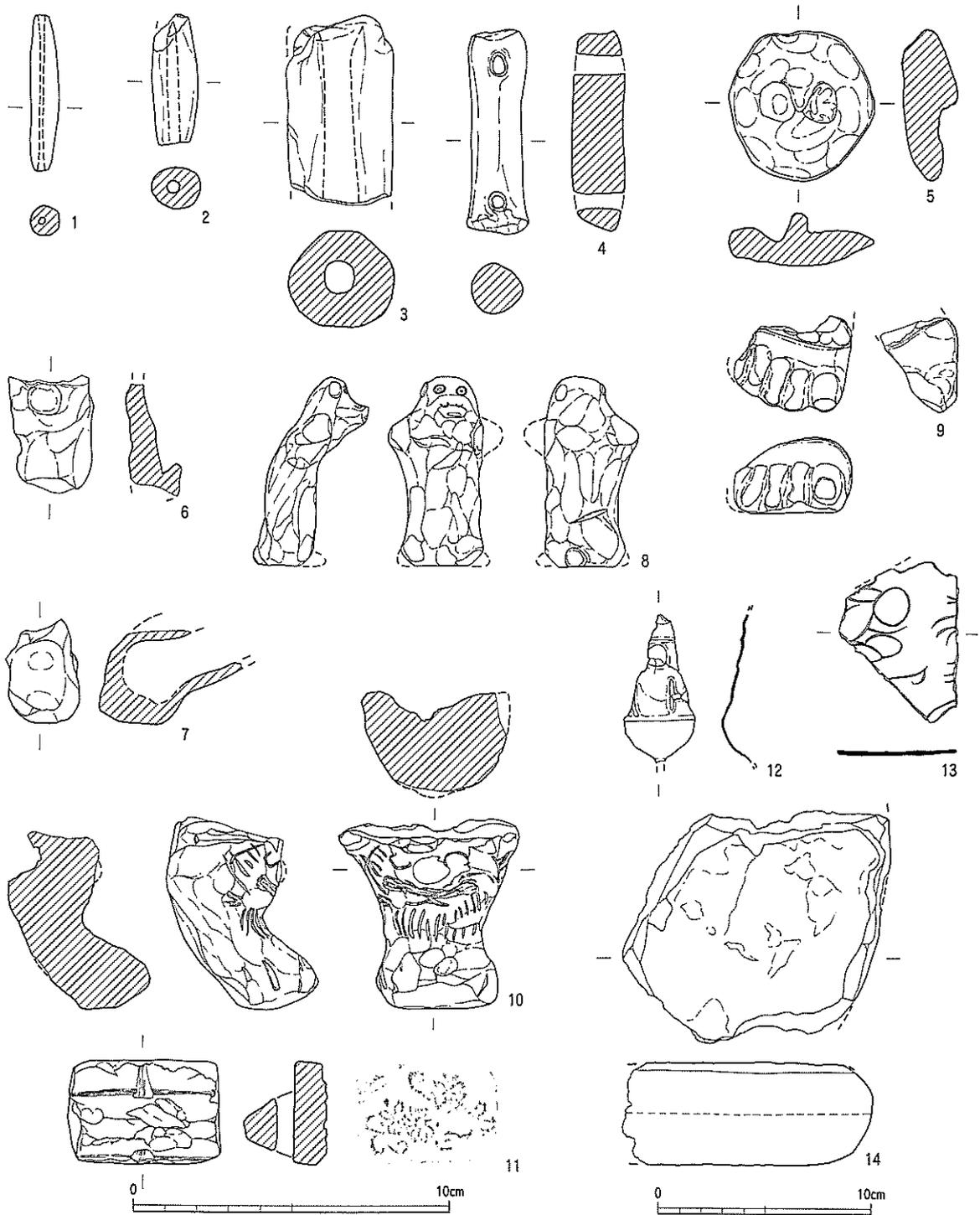


Fig.25 観世音寺出土土製品・石製品・金属製品等実測図 (1/2・1/3)

印章 (11) 滑石製石鍋の鐳部分を鈕に取り込み、印章に転用する。縦幅3.3cm、横幅4.7cm、高さ2.6cmで、鈕の上端を一部欠損するが、ほぼ完形である。鈕に直交する径0.5cmの穿孔があり、印面には草花を刻む。

金属製品 (Fig.25, PL.15)

懸仏 (12・13) 12は仏像で、頭部から右肩にかけて欠損する。残存長3.3cm、厚さ0.7mmの鑄銅製品である。13は光背で、厚さ1mmの鑄銅製品である。各側面には過去に切断した痕跡があり、端部は新しい時期の欠損がある。また、表面には浅い線刻で、草花を描く。

鑄造関連遺物 (Fig.25, PL.15)

鑄型 (14) 土製鑄型の外端の一部で、外形はゆるやかにカーブする。残存長約11.0cm、厚さ4.8cmを測る。使用された胎土は2種類あり、外面は1~2mmの長石や石英を多量に含む粗い胎土を用いる。内面は、砂粒を含まない精製土を厚さ4mmで被覆する。2次焼成の痕跡があり、実際に鑄造に使用されたものである。

【参考文献】

- 岡寺 良 2009「大宰府・観世音寺出土の高麗鉄絵青磁梅瓶」『貿易陶磁研究』No.29
日本貿易陶磁研究会
- 岡寺 良 2010「大宰府・観世音寺出土の唐三彩」『九州歴史資料館研究論集』35 九州歴史資料館
- 常松幹雄 1992「博多出土古瓦に関する一考察」『法哈囉』第1号 博多研究会

Tab. 6 観世音寺出土掲載遺物一覧 (1)

Fig.	図番号	調査回数	注記 (S番号・土層名)	遺構番号・層位名	種類	器種	登録番号
18	1	119次	整地層	茶灰色土	唐三彩	壺	
18	2	119次	S-25・800	SE3495	青磁	碗	
18	3	70次	濁茶色土	濁茶色土	青磁	耳皿	20
18	4	23次	第1整地	—	青磁	壺	346
18	5	117次	暗褐色土	暗褐色土	青磁	碗	
18	6	117次	暗褐色土	暗褐色土	青磁	碗	
18	7	119次	S-44	—	白磁	皿	
18	8	111次	S-374	—	青白磁	香炉	27
18	9	43次	S-5	SK1098	白磁	不明品	
18	10	43次	灰褐色土	灰褐色土	濃青釉陶器	小鉢	11
18	11	45次	茶褐色土	茶褐色土	濃青釉陶器	不明品	15
18	12	119次	S-200砂	SD3520	黄釉鉄絵	盤	36
18	13	119次	茶褐色土	茶褐色土	黄釉鉄絵	盤	33
18	14	119次	S-1	—	褐釉陶器	壺	
19	15	119次	S-362	—	高麗青磁	皿	
19	16	28次	黒灰色土下層	黒灰色土下層	高麗青磁	碗	5
19	17	43次	茶灰土・黒灰土	茶灰色土・黒灰色土	高麗鉄絵青磁	梅瓶	
19	18	119次	黒褐色土	黒褐色土	朝鮮半島産象嵌青磁	碗	
19	19	70次	黒色粘	SD1805	朝鮮半島産象嵌青磁	碗	
19	20	119次	S-265	SE3540	朝鮮半島産象嵌青磁	碗	
19	21	28次	黒灰色土下層	黒灰色土下層	朝鮮半島産象嵌青磁	碗	
19	22	16次	第1層	—	朝鮮半島産象嵌青磁	碗	
19	23	130次	暗灰色土	暗灰色土	朝鮮半島産象嵌青磁	碗	
19	24	45次	茶褐色土	茶褐色土	朝鮮半島産象嵌青磁	碗	
19	25	28次	床土	—	朝鮮半島産象嵌青磁	碗	
19	26	45次	床土	—	朝鮮半島産象嵌青磁	碗	12
19	27	70次	茶灰色土	茶灰色土	朝鮮半島産象嵌青磁	碗	19
19	28	70次	茶色土	茶色土	朝鮮半島産象嵌青磁	碗	18
19	29	111次	S-154	SB3367	朝鮮半島産象嵌青磁	杯	
19	30	111次	黒色砂質土	黒色砂質土	朝鮮半島産象嵌青磁	杯	
19	31	28次	床土	—	朝鮮半島産象嵌青磁	杯	
19	32	109次	床土	—	朝鮮半島産象嵌青磁	皿	
19	33	119次	黒褐色土	黒褐色土	朝鮮半島産象嵌青磁	壺	
19	34	117次	暗褐色土	暗褐色土	朝鮮半島産象嵌青磁	梅瓶	30
19	35	111次	黒色砂質土	黒色砂質土	朝鮮半島産象嵌青磁	陶枕	26

Tab. 6 観世音寺出土掲載遺物一覧(2)

Fig.	図番号	調査回数	注記(S番号・土層名)	遺構番号・層位名	種類	器種	登録番号
19	36	117次	-	-	朝鮮半島産灰青沙器	壺	
19	37	43次	灰褐色土	灰褐色土	朝鮮半島産粉青沙器	碗	8
19	38	115次	黒色砂質土(床土)	-	朝鮮半島産粉青沙器	碗	
19	39	1次	-	-	朝鮮半島産粉青沙器	碗	1
19	40	115次	黒色砂質土(床土)	-	朝鮮半島産粉青沙器	碗	29
19	41	115次	S-1	SD3333	朝鮮半島産粉青沙器	碗	28
19	42	20次	茶灰砂質土	茶灰砂質土	朝鮮半島産粉青沙器	皿	20-39
20	43	観世音寺	-	-	高麗産無釉陶器	壺	
20	44	120次	茶褐色土	茶褐色土	高麗産無釉陶器	壺	
20	45	45次	茶褐色土	茶褐色土	高麗産無釉陶器	壺	
20	46	観世音寺	-	-	高麗産無釉陶器	壺	
20	47	23次	礫混土	-	高麗産無釉陶器	壺	
20	48	119次	茶褐色土	茶褐色土	高麗産無釉陶器	壺	
20	49	117次	S-60B・暗褐色土	SD3440・暗褐色土	高麗産無釉陶器	壺	
21	50	61次	S-1	SK1521	土師器	坏	17
21	51	39-1次	暗褐色土	暗褐色土	緑釉陶器	椀	6
21	52	39-1次	旧耕作土	-	緑釉陶器	水注	7
21	53	111次	S-500	SK3257	鉄釉陶器	瓶	
21	54	23次	第1整地	-	灰釉陶器	小皿	320
21	55	111次	S-641	-	国産陶器	甗	
21	56	119次	S-100	SD1230B	国産陶器	甗	35
21	57	117次	S-52	-	国産陶器	甗	32
21	58	45次	S-7	-	国産陶器	甗	
21	59	111次	S-99	-	国産陶器	甗	
21	60	120次	床土	-	国産陶器	小鉢	38
21	61	120次	淡茶土	淡茶色土	国産陶器	碗	37
21	62	45次	床土	-	国産陶器	碗	
22	1	23次	黒灰色土	黒灰色土	瓦埴類	軒丸瓦	
22	2	109次	暗褐色土	暗褐色土	瓦埴類	軒丸瓦	
22	3	28次	黒灰土	黒灰色土	瓦埴類	軒丸瓦	
22	4	戒壇院	戒壇院所蔵瓦		瓦埴類	軒丸瓦	
22	5	43次	黒灰土	黒灰色土	瓦埴類	軒平瓦	
22	6	126次補足	褐色土	褐色土	瓦埴類	軒平瓦	
22	7	戒壇院	戒壇院所蔵瓦		瓦埴類	軒平瓦	
22	8	戒壇院	戒壇院本堂瓦		瓦埴類	軒平瓦	
22	9	戒壇院	戒壇院所蔵瓦		瓦埴類	スタンプ刻印瓦	
22	10	111次	S-433	SD3300	瓦埴類	紋様埴	
22	11	121次	S-20	SD3630	瓦埴類	紋様埴	
23	1	119次	S-876	SK3467	刻書須恵器	蓋	11・387
23	2	70次	床土	-	刻書土師器	壺	12
23	3	1次	-	-	墨書土師器	椀	1
23	4	39-3次	暗褐色土	暗褐色土	刻書白磁	碗	14
23	5	111次	S-165	-	刻書白磁	碗	5
23	6	45次	S-160	SD1230	墨書白磁	碗	2
23	7	45次	茶褐色土	茶褐色土	墨書青磁	碗	4
23	8	43次	茶灰土	茶褐色土	墨書青磁	碗	3
23	9	45次	茶褐色土	茶褐色土	刻書青磁	皿	13
23	10	119次	茶褐色土	茶褐色土	墨書青磁	皿	6
24	11	70次	攪乱土	-	墨書陶器	鍋	8
24	12	188次	Atr. 6区	-	墨書陶器	甗	9
24	13	130次	表土	-	墨書陶器	こね鉢	10
24	14	130次	S-1	SD3865	墨書陶器	乗燭	7・178
25	1	39-2次	西トレンチ側溝	-	土製品	土錘	
25	2	109次	暗褐色土	暗褐色土	土製品	土錘	9
25	3	130次	暗茶土下層	暗茶色土下層	土製品	土錘	13
25	4	39-3次	土坑27	SK994	土製品	土錘	7
25	5	39-2次	ピット	-	土製品	模造鏡	5
25	6	109次	暗褐色土	暗褐色土	土製品	人形	10
25	7	109次	暗褐色土	暗褐色土	土製品	人形	8
25	8	1次	-	-	土製品	動物形土製品	4
25	9	126次	旧表土	-	土製品	人形	12
25	10	1次	-	-	土製品	獸脚	3
25	11	1次	-	-	滑石製品	印章	2
25	12	126次	表土	-	青銅製品	懸仏	126-517
25	13	122次	床土	-	青銅製品	懸仏	122-7
25	14	111次	S-97	-	鋳造関連遺物	鋳型	11

IV 大野城跡の調査

IV 大野城跡の調査

1 大野城跡出土炭化物年代測定結果……………	37
(1) はじめに ……………	37
(2) 試料と方法 ……………	37
(3) 測定結果 ……………	37
(4) 所見 ……………	38
2 大野城跡第44次・47次調査出土炭化物の年代測定 ……	41
(1) はじめに ……………	41
(2) 猫坂礎石群地区 ……………	41
(3) 主城原礎石群地区 ……………	45
(4) まとめ ……………	50

1 大野城跡出土炭化物年代測定結果

(1) はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

(2) 試料と方法

試料No.	地点・層準等	種類	前処理	測定法
No.1	大野城跡44次, 猫坂地区B区14, 礎石建物盛土	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.2	大野城跡44次, 猫坂地区B区15, 礎石建物盛土	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.3	大野城跡44次, 猫坂地区B区16, 礎石建物盛土	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.4	大野城跡44次, 猫坂地区B区17, 礎石建物盛土	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.5	大野城跡47次, 主城原地区A区31, 礎石建物盛土, 8層	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.6	大野城跡47次, 主城原地区A区32, 礎石建物盛土	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.7	大野城跡47次, 主城原地区C-1区34, 礎石建物盛土, 最下層	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.8	大野城跡47次, 主城原地区B区36, 礎石建物盛土	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

(3) 測定結果

Tab. 7 に放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を示し, Fig.26に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

2) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から, 現在 (AD.1950年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は

5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。

3) 暦年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な¹⁴C測定値およびサンゴのU/Th (ウラン/トリウム) 年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線データはIntCal 04、較正プログラムはOxCal 3.1である。

暦年代 (較正年代) は、¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により 1σ (68.2%確率) と 2σ (95.4%確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。() 内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4) 所見

加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化材では 1745 ± 20 年BP (2σ の暦年代でAD.230 ~ 350, 370 ~ 380年)、No.2の炭化材では 1455 ± 20 年BP (AD.565 ~ 645年)、No.3の炭化材では 1465 ± 20 年BP (AD.565 ~ 645年)、No.4の炭化材では 1345 ± 20 年BP (AD.640 ~ 690, 750 ~ 760年)、No.5の炭化材では 1540 ± 20 年BP (AD.430 ~ 580年)、No.6の炭化材では 1345 ± 20 年BP (AD.645 ~ 690年)、No.7の炭化材では 1485 ± 20 年BP (AD.540 ~ 635年)、No.8の炭化材では 1505 ± 20 年BP (AD.535 ~ 615年)、No.9の木材では 1425 ± 20 年BP (AD.595 ~ 655年)、No.10の木材では 1425 ± 20 年BP (AD.595 ~ 655年)の年代値が得られた。

なお、樹木 (炭化材) による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分が利用されたり転用材が利用されていた場合は、遺構の年代よりも古い年代値となる。

【参考文献】

Bronk Ramsey C.1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program,Radiocarbon,37(2), pp.425-430.

Bronk Ramsey C.2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), pp.355-363.

Paula J Reimer et al., 2004 IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, pp.1029-1058.

中村俊夫 2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の¹⁴C年代』, pp.3-20.

Tab. 7 放射性炭素年代測定結果

試料No.	測定番号 PED-	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (較正年代)	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
1	14613	-28.56 \pm 0.13	1745 \pm 20	250AD(11.5%)265AD 275AD(56.7%)335AD	230AD(94.2%)350AD 370AD(1.2%)380AD
2	14614	-25.35 \pm 0.13	1455 \pm 20	595AD(68.2%)640AD	565AD(95.4%)645AD
3	14615	-26.10 \pm 0.14	1465 \pm 20	575AD(68.2%)625AD	565AD(95.4%)645AD
4	14616	-26.06 \pm 0.13	1345 \pm 20	650AD(68.2%)675AD	640AD(94.4%)690AD 750AD(1.0%)760AD
5	14617	-24.46 \pm 0.14	1540 \pm 20	440AD(36.1%)490AD 530AD(32.1%)570AD	430AD(95.4%)580AD
6	14618	-24.53 \pm 0.15	1345 \pm 20	650AD(68.2%)675AD	645AD(95.4%)690AD
7	14619	-24.81 \pm 0.16	1485 \pm 20	560AD(68.2%)605AD	540AD(95.4%)635AD
8	14620	-26.28 \pm 0.15	1505 \pm 20	545AD(68.2%)590AD	535AD(95.4%)615AD

IV 大野城跡の調査

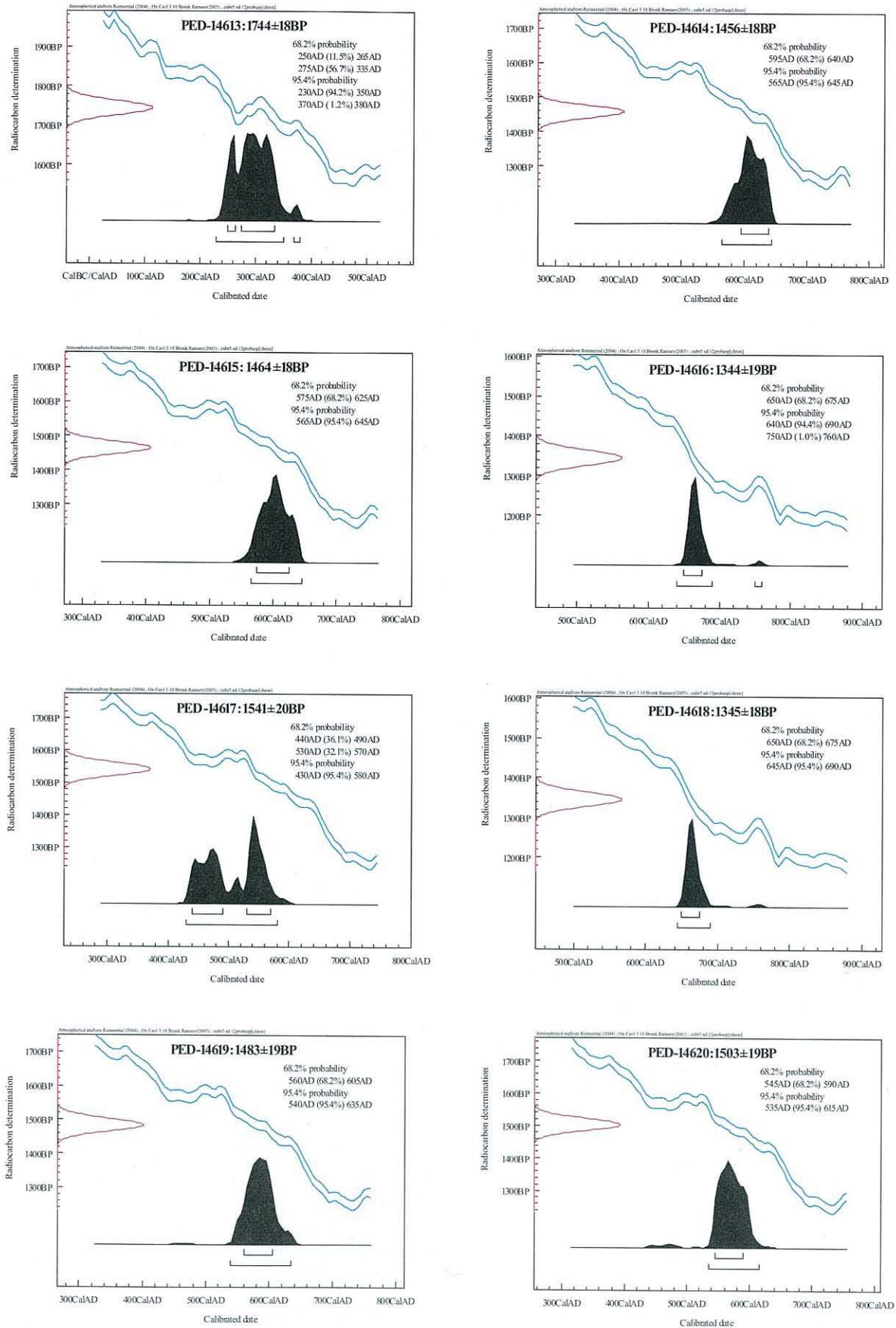


Fig.26 測定結果の較正曲線

2 大野城跡第44次・47次調査出土炭化物の年代測定

(1) はじめに

経 過 大野城市・太宰府市・糟屋郡宇美町の境界に位置する四王寺山には、白村江の戦いでの敗戦を受けて大宰府防衛のため天智天皇四年（665）に築かれたとされる朝鮮式山城「大野城跡」がある。

平成15年7月19日未明に福岡県を襲った豪雨により、四王寺山一帯では計400箇所近くにも上る山腹崩壊（土砂崩れ）などが発生し、大野城跡にも大きな被害をもたらした。福岡県教育委員会では、関連三市町の教育委員会と連携して、平成16年度から21年度までの6カ年で災害復旧事業を行った。災害復旧事業は、まず発掘調査により遺構の残存状況と構造を把握したのち、工事計画を立案して工事を行うという流れで行われ、発掘調査は福岡県教育委員会と太宰府市教育委員会の手により第38次から第50次までの計13次が行われた（調査成果は本報告（福岡県教委2010）を参照されたい）。

大野城跡の遺構に対する被災は主に礎石建物の乗る平坦面の下方法面や土墨法面の崩落であり、こうした被災箇所における発掘調査は崩落堆積土砂の除去と崩落部壁面の削り出しによる土層の観察を主とした。確認された土層の中にはしばしば炭化物が確認されたため、調査の際にこれらを採取することとした。採取した試料は福岡県教育委員会が担当した10次の調査で計43点上る。これを受けて九州歴史資料館では、平成21年度に(株)古環境研究所に委託して採取された炭化物に対するC14年代測定を行った。試料の点数が多いため、今回の分析においては礎石建物の乗る平坦面の造成の時期に焦点を絞り、平坦面を造成する際の盛土（詳しくは調査報告を参照）中から得られた炭化物を対象とした。具体的には、第44次調査（猫坂礎石群地区）B区（4点）、主城原礎石群地区A～C区（計4点）の計8点を対象とした。試料は微量のものが大半であるため、測定法はいずれもAMS法を用いた。(株)古環境研究所に委託した調査結果については本書37～40頁に掲載しているが、本節ではその調査結果を元に、調査担当者としての所見を以下に述べることにしたい。

(2) 猫坂礎石群地区

調査の概要 猫坂礎石群地区は、大野城跡の南部に位置する礎石建物群地区である。昭和51年に九州歴史資料館により発掘調査が行われており（大野城跡第10次調査、福岡県教委1977）、Y字状に伸びる尾根の頂～緩斜面部を削平・盛土して東西2つの平坦面を作り出し、東側の平坦面に礎石建物・掘立柱建物各1棟ずつ（SB0503・0504）、西側の平坦面に礎石建物3棟（SB0500～0502）の計5棟の建物を建てていたことが確認されている。建物は掘立柱建物が3×3間、礎石建物が3×4間で、柱間距離はほぼ2.1mで統一されていて規格性が高く、倉庫群であろうと考えられている（Fig.27）。

豪雨災害による被害は、西側平坦面の東側斜面で天端幅約25m、東側平坦面の西側法面で天端幅約6mの山腹崩壊であり、前者をA区、後者をB区として発掘調査を行った。この結果、B区では崩落面に人工的な盛土の痕跡は確認されず、丘陵の頂部を削平して平坦面を造成していることが確認されている。一方、A区では崩落面に人工的な盛土の痕跡を確認し、地山の削平と同時に、

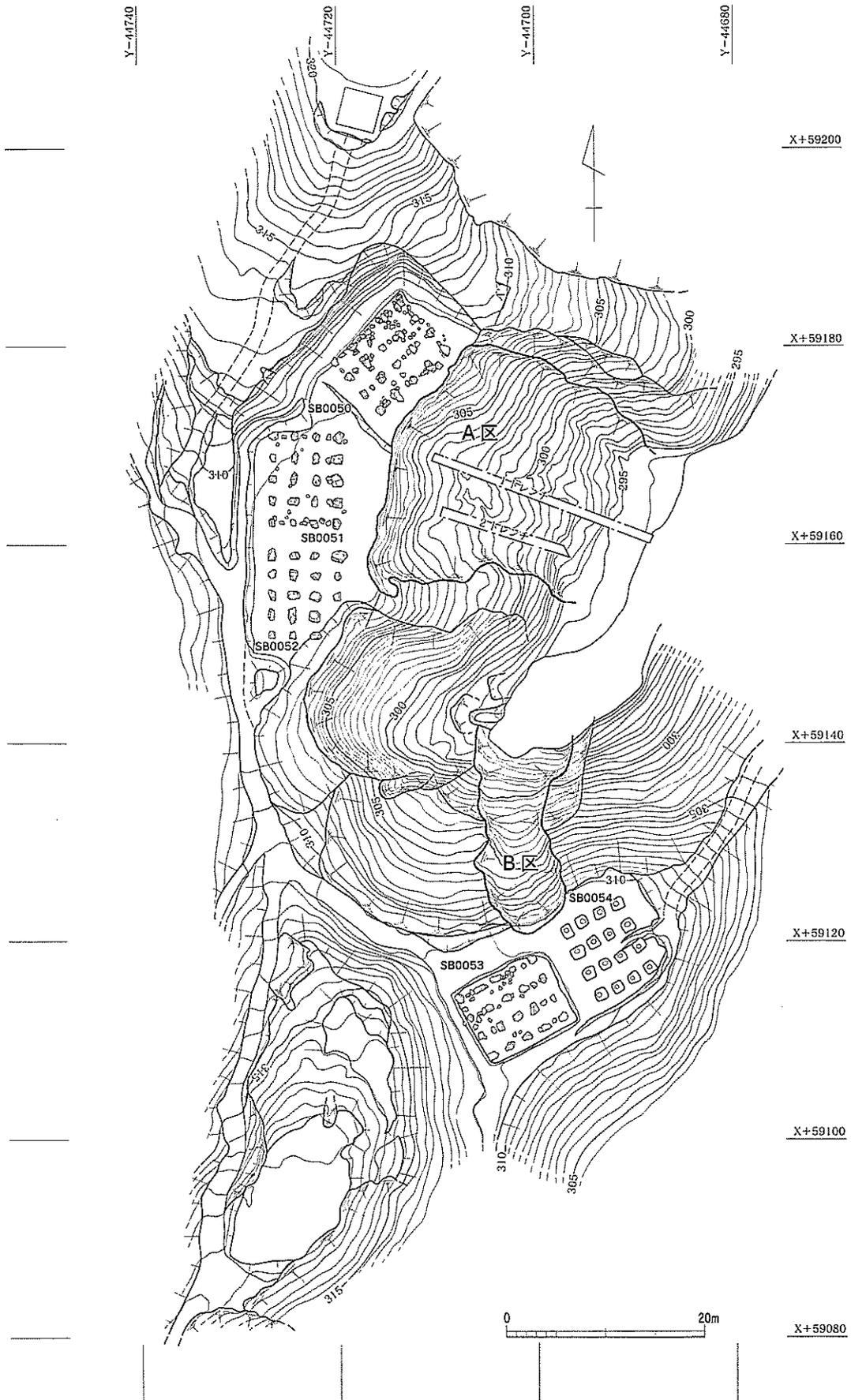


Fig.27 猫坂礎石群地区周辺地形図 (1/600)

削平により生じた土砂を斜面に流し込んで、より広い平坦面を造成したことが把握されている。

また、この人工的な盛土には3箇所の崩落・修築痕跡が確認されており、盛土完成後に数次にわたって崩落を受け、そのたびに修復しながら平坦面を維持していたことも確認できた (Fig.28)。これらの崩落・修築痕跡のうち、当初盛土 (第1次盛土, 26~30層) の次に行われたと考えられる二つの単位 (18~24層・11~15層) については、相互に切り合い関係がないため発掘調査により先後関係を決定することができなかつたため、報告時には便宜的に前者を第2次盛土、後者を第3次盛土として報告している。

試料の概要 本地区で採取した試料

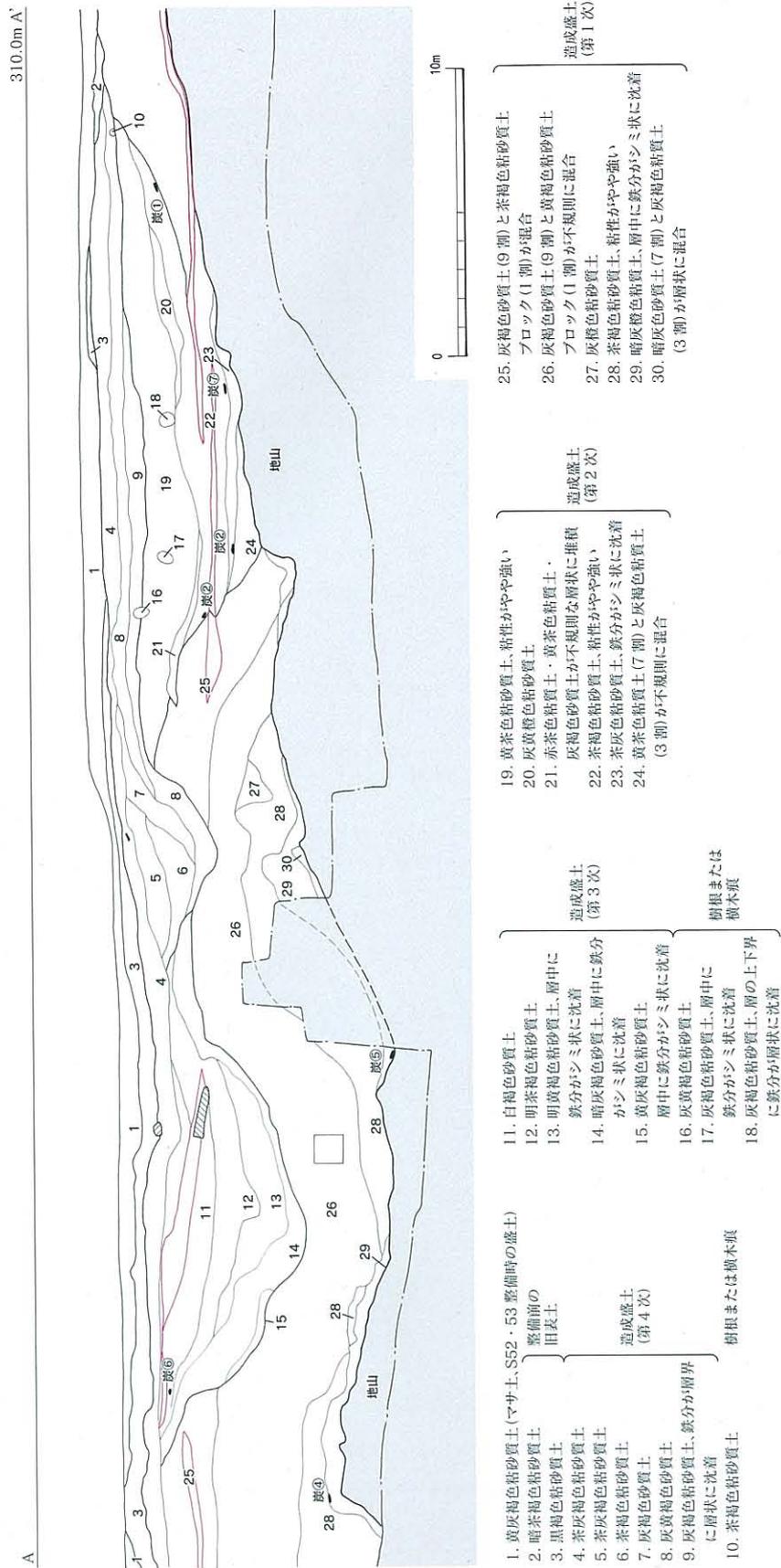


Fig.28 猫坂礎石群地区A区崩落部土層立面見通し図 (1/250)

は計7点である。このうち2点が第1次盛土の最下層中から、4点が第2次盛土中から、1点が第3次盛土中からの採取である。第4次盛土中からは、良好な状態で炭化物を採取することはできなかった。

第1次盛土の最下層中から出土した試料は、比較的形の大きな(2cm四方程度の)木材の炭化物と見られる。本地点に限らず、大野城跡の礎石建物群地区で認められる造成盛土は、大野城跡における版築土塁のように、盛土を堅固にするための工夫は認められず、上部から流し込んだような様相を示す。従って、盛土自体に平坦面を広げる役割を期待したというよりはむしろ、平坦面の造成時に、地山の削平により発生した大量の土砂を処理するという性格が強いように思われる。しかしながら、盛土の最下層に腐植土層が認められないことから、盛土を行う前に地山に堆積していた腐植土層を一度除去しているとみられ、盛土が地滑りを起こさないような工夫であるともみられる。炭化物は最下層の中に散らばって焼土とともにブロックを形成したような状況で出土していることから、おそらく最下層の盛土材料の中に焼土・炭化物ブロックの状態で含まれていた可能性が高い。従って、これらの炭化物は、平坦面を削り出す際に最も初期に地山が削られた際に、盛土材の中に含まれていたと考えられ、地山の削平に先立って草木の焼却を行った可能性があろう。このことから、これらの炭化物は当初盛土の造成直前に形成されており、盛土の施工時期を示す可能性が高いと考えられる。

一方、第2・3次盛土の中から採取された炭化物は小片であり、それぞれの盛土単位の内部に点在しているため、これらが層中に入り込んだ経緯は不明である。

年代測定の結果 分析対象とした試料は、第1次盛土中から採取された2点(試料番号1・2)と、第2次修築盛土中から採取された4点のうち1点(試料番号4)、第3次修築盛土中から採取された1点(試料番号3)の計4点である。それぞれの分析結果をTab. 8・Fig.29に示す。

分析の結果を見ると、第1次盛土から採取された試料1・2のうち、試料1は非常に古い年代を示している。試料のサイズから見るかぎり大きな木材の芯部の可能性は低く、試料の汚染が疑

Tab. 8 放射性炭素年代測定結果

試料No.	試料の詳細						測定番号 PED-	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代(校正年代)	
	遺跡名	調査 回数	地点名	調査区	試料 No.	備考				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
1	大野城跡	44次	猫坂礎石 群地区	B区	④	1次盛土	14613	-28.56 \pm 0.13	1745 \pm 20	250AD(11.5%)265AD 275AD(56.7%)335AD	230AD(94.2%)350AD 370AD(1.2%)380AD
2	大野城跡	44次	猫坂礎石 群地区	B区	⑤	1次盛土	14614	-25.35 \pm 0.13	1455 \pm 20	595AD(68.2%)640AD	565AD(95.4%)645AD
3	大野城跡	44次	猫坂礎石 群地区	B区	⑥	3次盛土	14615	-26.10 \pm 0.14	1465 \pm 20	575AD(68.2%)625AD	565AD(95.4%)645AD
4	大野城跡	44次	猫坂礎石 群地区	B区	⑦	2次盛土	14616	-26.06 \pm 0.13	1345 \pm 20	650AD(68.2%)675AD	640AD(94.4%)690AD 750AD(1.0%)760AD
5	大野城跡	47次	主城原礎 石群地区	A区	①	最下層	14617	-24.46 \pm 0.14	1540 \pm 20	440AD(36.1%)490AD 530AD(32.1%)570AD	430AD(95.4%)580AD
6	大野城跡	47次	主城原礎 石群地区	A区	②	柱穴	14618	-24.53 \pm 0.15	1345 \pm 20	650AD(68.2%)675AD	645AD(95.4%)690AD
7	大野城跡	47次	主城原礎 石群地区	C-1区	①	最下層	14619	-24.81 \pm 0.16	1485 \pm 20	560AD(68.2%)605AD	540AD(95.4%)635AD
8	大野城跡	47次	主城原礎 石群地区	B区	②	最下層	14620	-26.28 \pm 0.15	1505 \pm 20	545AD(68.2%)590AD	535AD(95.4%)615AD

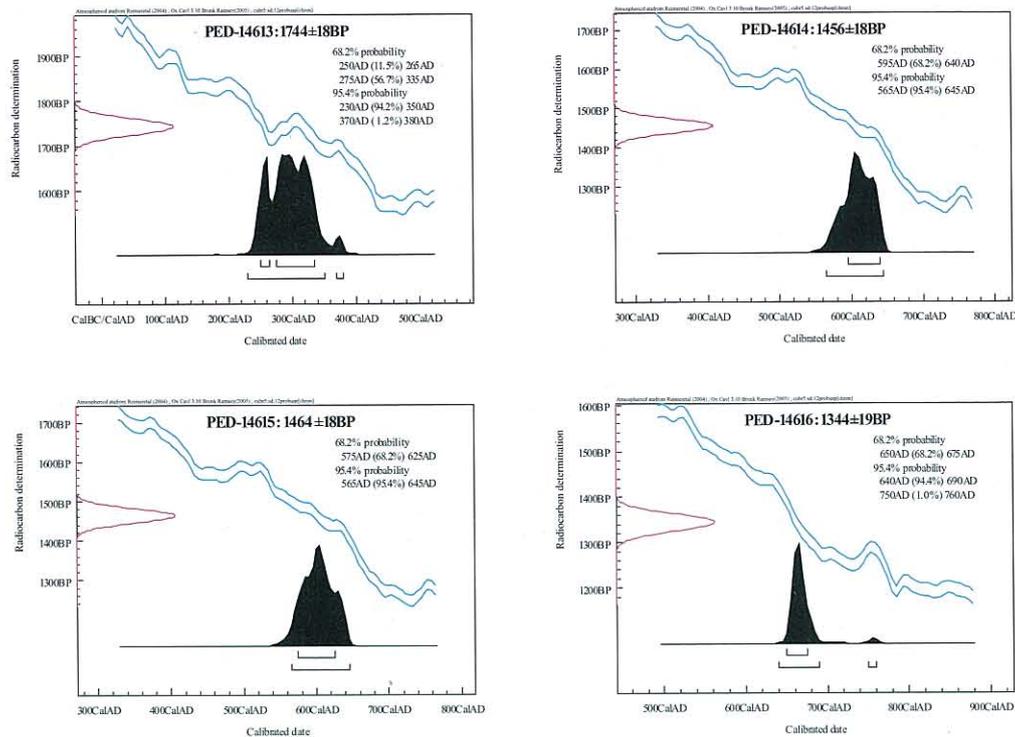


Fig.29 測定結果の較正曲線

われる。それ以外の試料2～4については、第1次盛土から採取された試料2がAD.595～640、第2次盛土から採取された試料4がAD.650～675、第3次盛土から採取された試料3がAD.575～625（いずれも1σ, 68.2%）の値を示しており、汚染を疑う必要はなかろう。

問題は、第1・3次盛土中から採取された試料2・3がいずれも史書に記録のある大野城跡の築城年代よりも数十年古く出ている点であるが、これは試料が木材の芯部に由来する可能性を考えたいところであるが、試料のサイズが小さく判断はできない。また、もしそうだとすれば当然試料4についても同様の可能性を考えておく必要があり、3者の年代をそのまま盛土施工の実年代と考えることはできない。ここでは、3つの試料それぞれが盛土施工の実年代よりも古く出ている可能性があることをふまえた上で、試料2・3の分析結果から第1次盛土と第3次盛土の施工年代は比較的近く、試料4の分析結果から第2次盛土の施工年代がやや新くなる可能性がある」と理解しておきたい。

(3) 主城原礎石群地区

調査の概要 主城原礎石群地区は、大野城跡の中央部を南北に伸びる尾根状丘陵の頂部に位置する礎石建物群地区である。他の礎石建物群地区が比較的まとまりのよい配置を持つのにに対し、本地区の礎石建物群は南北に伸びる尾根の各所に点在していくつかの小ブロックを構成するという特徴がある（これは、むしろ主城原礎石群地区では建物群を細分して把握していないという、調査側の事情も反映されている）。本報告では便宜的に、尾根の北側に点在する建物群を北部・中央部・南部の3群に細分しているが、豪雨災害による被災はこのうち中央部に集中している。

主城原礎石群地区中央部建物群は、尾根から西側に突き出す丘陵上に造成された広い平坦面を主体とし、その周囲に何棟かの建物群が点在する地区である（Fig.30）。主体となる平坦面につ



Fig.30 主城原礎石群地区周辺地形図 (1/800)

いては、昭和53年に九州歴史資料館により発掘調査が行われており（大野城跡第11・12次調査、福岡県教委1979）、8棟の建物群が切り合いながら3期にわたって立て直されている状況が知られている。大野城跡で見つかっている建物群の多くは3×4または5間の総柱建物で倉庫建物と考えられているが、本地点では3棟が3×7間以上の規模を持っており、倉庫建物以外の建物と考えられる。このうち1棟は総柱建物、2棟は側柱建物で、側柱建物は兵舎ではないとも推測されることから、本地区が大野城跡における中核的な地区であった可能性も指摘されている。

豪雨災害による被害は4箇所を数える。A区は主体となる広い造成平坦面から西に突き出た尾根支脈の西側斜面に生じた山腹崩壊であるが、この尾根支脈上には狭い平坦面が造成されており、3×5間の礎石建物1棟（SB0607）が建てられていた。被災した斜面の調査により人工的な盛土の存在が確認されており、尾根を削平して平坦面を造成する際に生じた土砂を斜面に流し込んで平坦面を広げていたとみられる（Fig.31）。崩落面にはSB0607の雨落ち溝にめぐらせた掘立柱穴とみられる柱穴状の遺構の断面が露出していた。

B区は主体となる広い造成平坦面の北西側法面に生じた山腹崩壊である。SB0604（3×7間の側柱建物）と、その建て替えとみられるSB0605（3×9間の側柱建物）に近い場所で起きており、崩落面からはやはり人工的な盛土の痕跡が確認されている（Fig.32）。盛土の高さは他地点と比較して低く、広範囲にわたって土砂を広げている可能性が考えられる。

C区とD区はともに主体となる広い造成面から南に100mほどいった箇所である。この箇所では、主城原礎石群地区の乗る細長い尾根の頂部を削平して平坦面を造成しており、3×3間以上

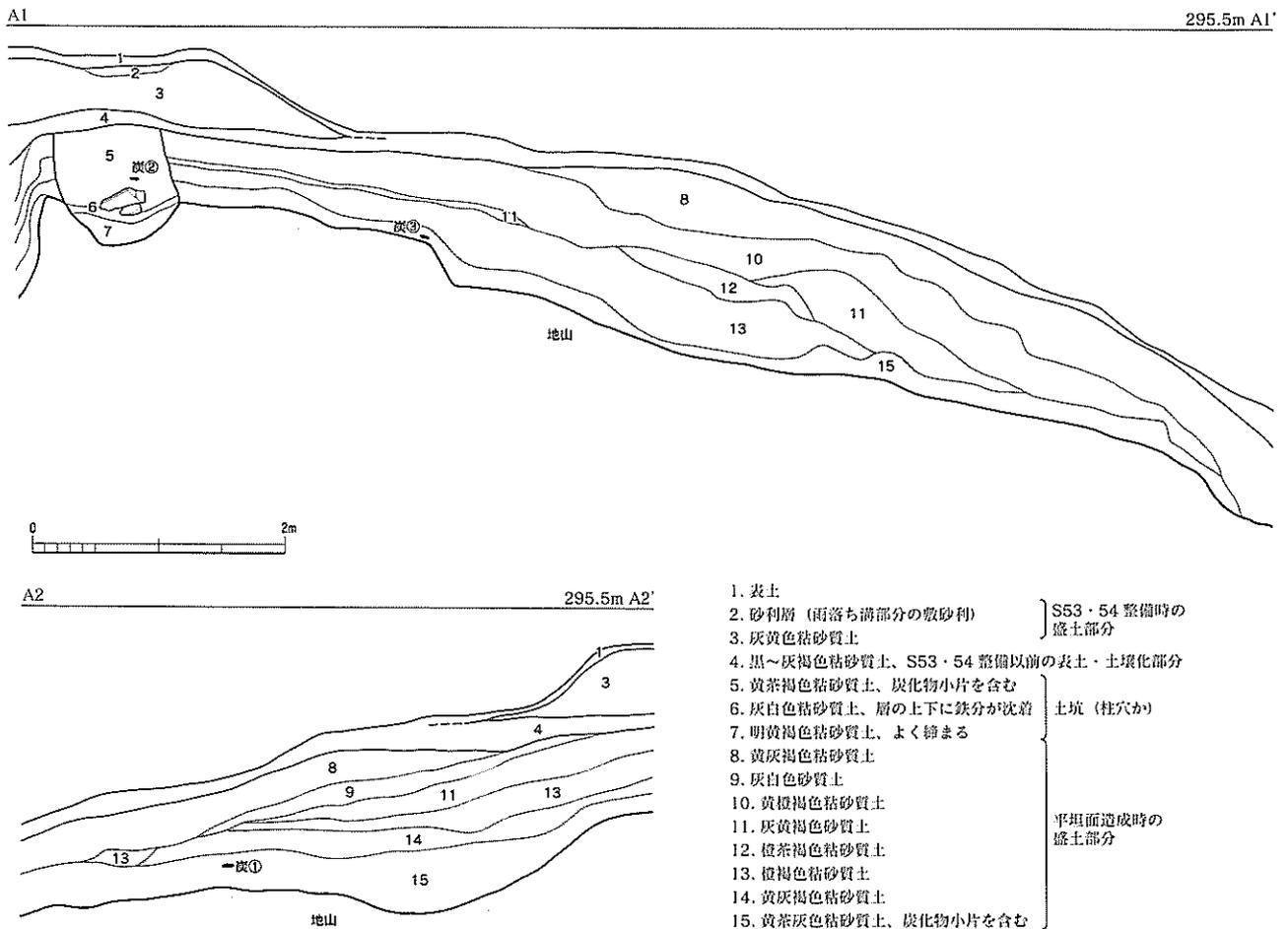


Fig.31 主城原礎石群地区A区崩落部土層立面見通し図 (1/60)

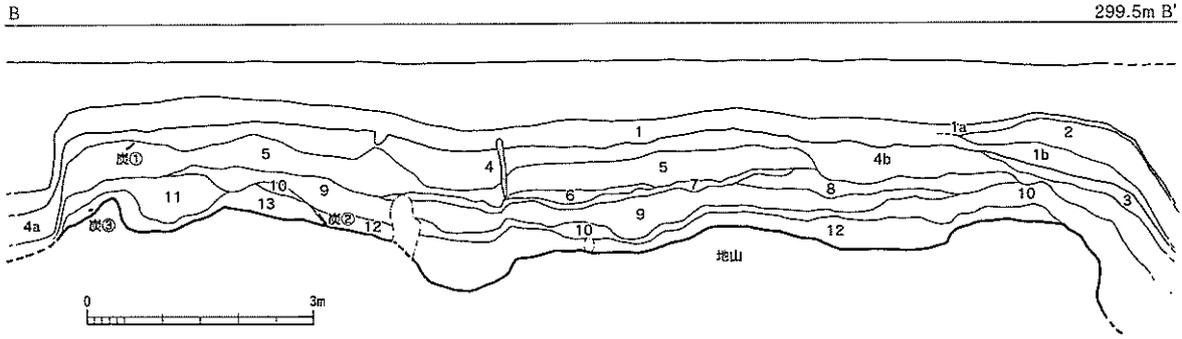
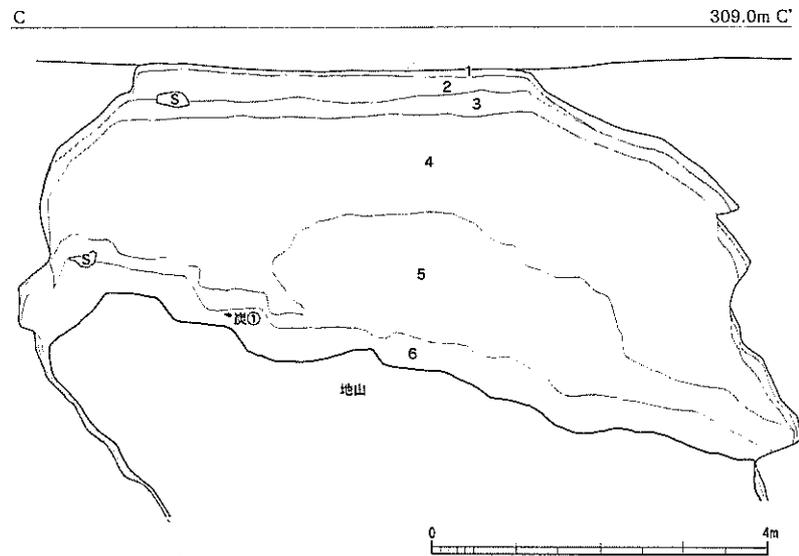


Fig.32 主城原礎石群地区B区崩落部土層立面見通し図 (1/90)

1. 表土・腐植土層
- 1a. S53・54 整備後の表土
- 1b. S53・54 整備前の旧表土
2. 黄褐色粘砂質土, S53・54 整備時の積土
3. 赤褐色粘質土
4. 黄褐色粘砂質土
- 4a. 黄色味が強く粘性やや高い
- 4b. 白色味が強く砂質分多い、粘性やや低い
5. 白黄色粘砂質土, 4層との間は漸移する部分がある
6. 赤褐色粘質土
7. 灰褐色粘砂質土, 一部にまだらに鉄分が沈着
8. 黄褐色粘砂質土
9. 白黄色粘砂質土に赤褐色粘質土の小ブロックをわずかに含む
10. 黄褐色粘砂質土
11. 白灰色粘砂質土, 内部に最大厚さ5~10cm程度のレンズ状の積土の単位が認められる箇所がある
12. 灰褐色粘砂質土に黄褐色粘砂質土が部分的に混じる
13. 褐灰色粘砂質土, 焼土・炭化物ブロックを含む



1. 表土・腐植土層
2. 橙褐色粘砂質土, S53・54 整備時の積土
3. 黒褐色粘砂質土, S53・54 整備前の旧表土・腐植土層
4. 黄白褐色粘砂質土, 上層は白色味、下層は黄色味が強く、漸移的に推移する
5. 黄褐色粘質土
6. 赤橙~橙灰褐色粘質土, 焼土・炭化物小片をブロック状に含む

Fig.33 主城原礎石群地区C区崩落部土層立面見通し図 (1/90)

の総柱礎石建物が確認されているが、災害ではこの建物の乗る平坦面の東西両側で山腹崩壊が発生しており、東側をC区、西側をD区とした。このうちC区崩落部から人工的な盛土の痕跡を確認している (Fig.33)。なお、D区の崩落面は地山が露出しており、人工的な盛土の痕跡は確認できていない。

試料の概要 本地区で採取した試料は計7点で、このうち3点がA区、3点がB区、1点がC区から採取されている。

A区から採取した試料は、2点が盛土最下層からの採取であり、1点は礎石建物SB0607の雨落ち溝に配された柱穴からの採取である。試料はいずれも小片であり、層中に単独で含まれていた。B区から採取した試料は、2点が盛土最下層とその直上層からの採取で、1点は盛土中位の層からの採取であり、最下層・その直上層から採取した試料は焼土・炭化物小片のブロック中からの採取である。試料はいずれも小片である。C区から採取した試料は盛土最下層中から採取したもので、試料は焼土・炭化物小片のブロック中からの採取である。

本地区で確認された3箇所の盛土は、いずれも猫坂礎石群地区B区における第1次盛土と同様

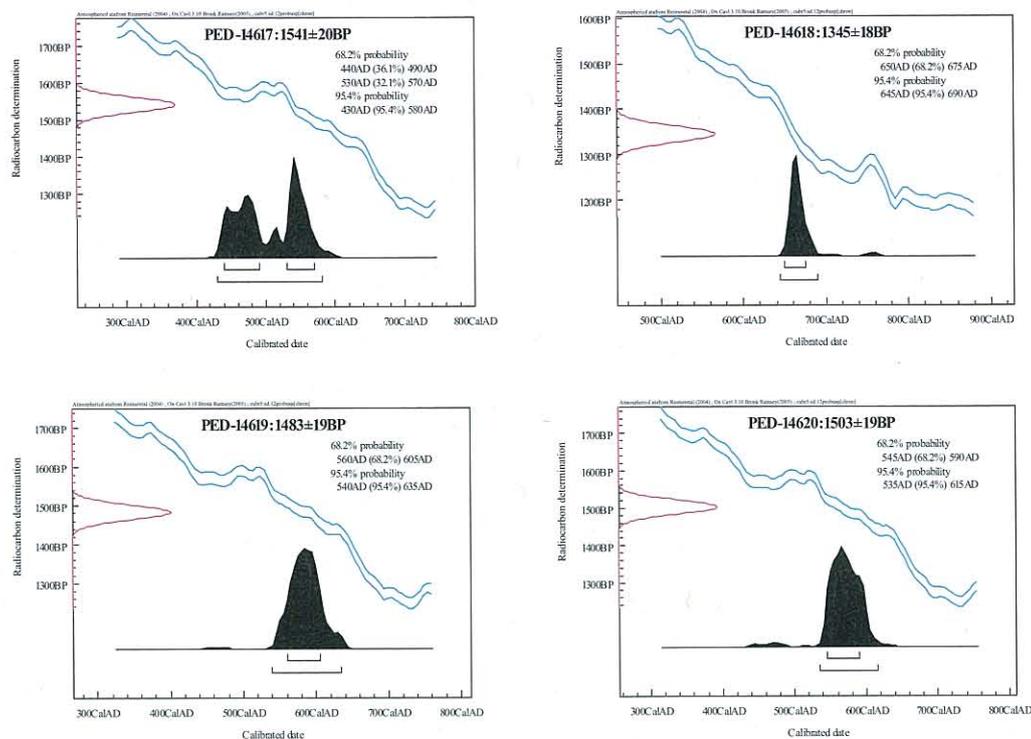


Fig.34 測定結果の較正曲線

の様相を示す。従って、前項で述べたように、最下層からブロック状で出土した炭化物については、盛土造成時の初期に層中に含まれるに至った可能性が高い。一方、最下層からの出土ではあるが小片で点在していたA区の盛土最下層から採取した試料については、その埋没過程が不明でありやや位置づけが難しい。また、A区の建物柱穴から出土した試料は、土層から判断すると柱の根固め土中から出土した可能性が高いが、平面的に調査できておらず柱痕も確認できていないため、柱の抜き跡に含まれる炭化物である可能性もあり、注意を要する。

年代測定の結果 分析対象とした試料は、A区は最下層から採取した1点（試料5）と柱穴から採取した1点（試料6）、B区は最下層直上層から採取した1点（試料8）、C区は最下層から採取した試料1点（試料7）である。それぞれの分析結果をTab. 8・Fig.34に示す。

分析の結果を見たい。A区から採取した試料のうち、最下層から小片で出土した試料5は2σで二つの山がみられるが、いずれも大野城跡の築城より100～200年ほど前の年代を示している。試料の汚染の可能性もあるが、むしろ本資料については盛土中に含まれるに至った経緯が不明瞭である点を重視したい。一方、柱穴から採取された試料6は1σでAD.645～690(95.4%)の値を示しており、大野城跡の築城時期に極めて近い。しかし、本資料についても上記の通りその埋没過程が不明瞭であり、評価は難しい。

B区から採取した試料8は、2σでAD.535～615(95.4%)、1σでAD.545～590(68.2%)の年代を示している。C区から採取した試料7は、2σでAD.540～635(95.4%)、1σでAD.560～605(68.2%)の年代を示している。いずれも大野城跡築城よりも100年前後前の値である。猫坂礎石群地区の試料3・4と同様の結果となっており、やはり木材の芯部である可能性も考えたいが、試料が小片でありなんともいえない。ここでは一応、各地区の最下層から出土した炭化物の年代がおおよそ近いところにあるということを指摘しておきたい。

(4) まとめ

分析を行った8点の試料のうち、試料1・5の2点は示された年代が大野城跡の築城よりも100年以上古い。試料1については出土状況が良好であり、汚染の可能性を考えたい。一方試料5については、もちろん汚染の可能性もあるが、試料が小片でかつ単独で出土しており、古い木片あるいは炭化物が何らかの経緯を経て盛土中に紛れ込んだ可能性も考えておきたい。

このほかの試料の示す年代について、仮に積極的に評価した場合を記しておきたい。

猫坂礎石群地区における試料2～4の3点については、2と3の年代がわずかに逆転しており、第1次盛土と第3次盛土にはほとんど時間差がなかった可能性を指摘できよう。また、3と4の年代差から、第2次盛土と第3次盛土の先後関係については本報告における想定とは逆の順序が支持される結果となっている。

主城原礎石群地区における試料6～8については、各試料がそれぞれ比較的近い年代を示しており、猫坂礎石群地区の盛土最下層から採取された試料2も比較的近い年代を示す。このことは、これらの平坦面の造成が比較的近い時期になされた可能性を示唆するものといえる。B区平坦面においては、これまでの九州歴史資料館の調査により、掘立柱建物から礎石建物へと移り変わりながら3期の建て替えがみられることが指摘されており、また掘立柱建物と礎石建物の位置関係や建物の規格性なども材料として、大野城跡における建物は一般的に掘立柱建物から礎石建物へと移行しており、掘立柱建物が古く礎石建物は新しいとみられてきた(横田1983)。しかし、主城原礎石群地区C区や猫坂礎石群地区A区はいずれも今までのところ礎石建物しか見つからないにもかかわらず、建物を建てるための平坦面の造成は主城原B区と同じような時期に行われたということになれば、掘立柱建物から礎石建物へという単純な移行の図式は再考の必要があることになる。

しかしながら、試料2・3・6～8の示す年代がいずれも大野城跡の築城よりも古いという点は、これらの結果を積極的に評価する場合に大きな問題点となろう。仮に木材の芯材に由来するため年代が古いという想定をした場合、これらの試料がいずれも同程度の樹齢の木の芯材に由来するという保証は全くない。数十年樹齢が異なるだけで掘立柱建物の建て替えサイクルを凌駕してしまい、盛土施工すなわち平坦面造成の同時性などを考える材料にはとてもではないがなり得ないことは明らかである。

従って、本稿の結論としては、少なくとも平坦面の造成が9世紀に下るようなことはない可能性が高いというにとどめるべきであろう。

今後、同様の分析がさらに進められ、大野城跡における礎石建物群(の乗る平坦面)の築造年代がより詳しく追求されていくことを望みたい。

【参考文献】

- 福岡県教育委員会1977『特別史跡大野城跡』II(八ツ波, 猫坂地区建物跡)
 福岡県教育委員会1979『特別史跡大野城跡』III(主城原地区建物跡)
 福岡県教育委員会2010『特別史跡大野城跡整備事業V-平成15年7月豪雨災害にかかる復旧事業の報告-I』
 横田義章1983「大野城の建物」九州歴史資料館編『九州歴史資料館開館十周年記念 大宰府古文化論叢』
 上巻 吉川弘文館

P L A T E S



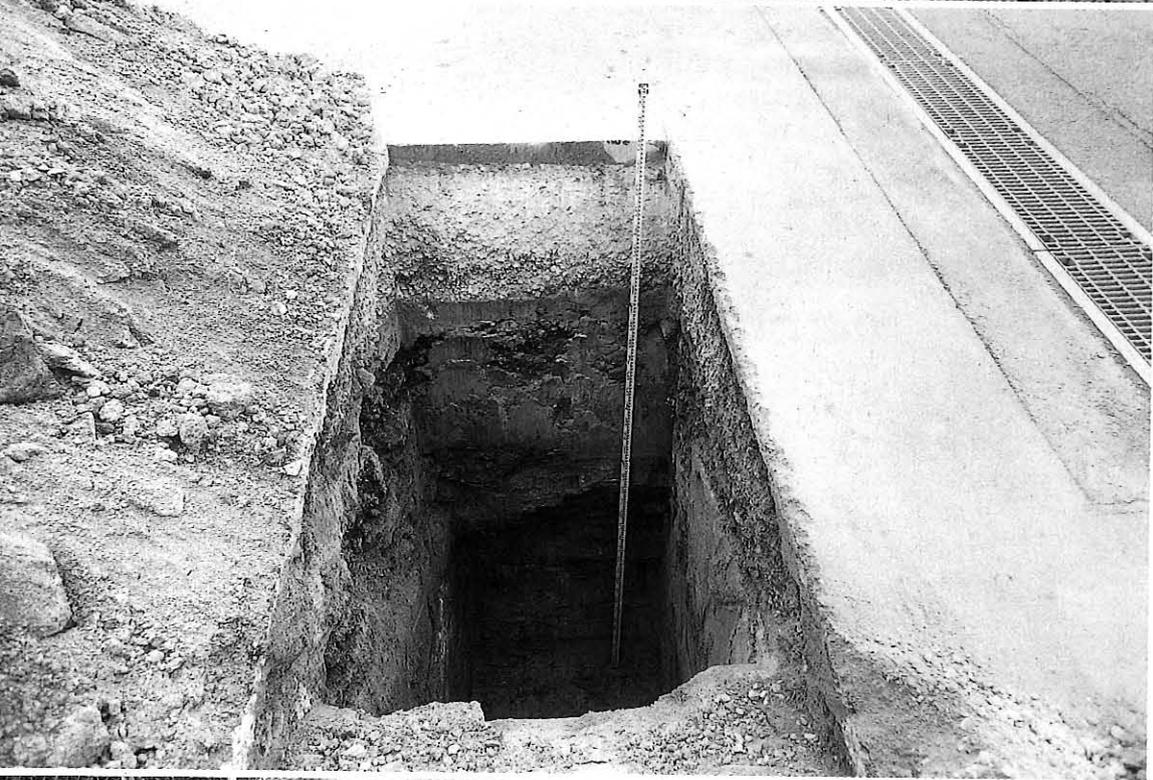
(1) Aトレンチ (北西から)



(2) Bトレンチ (南東から)



(1) Aトレンチ
(南から)



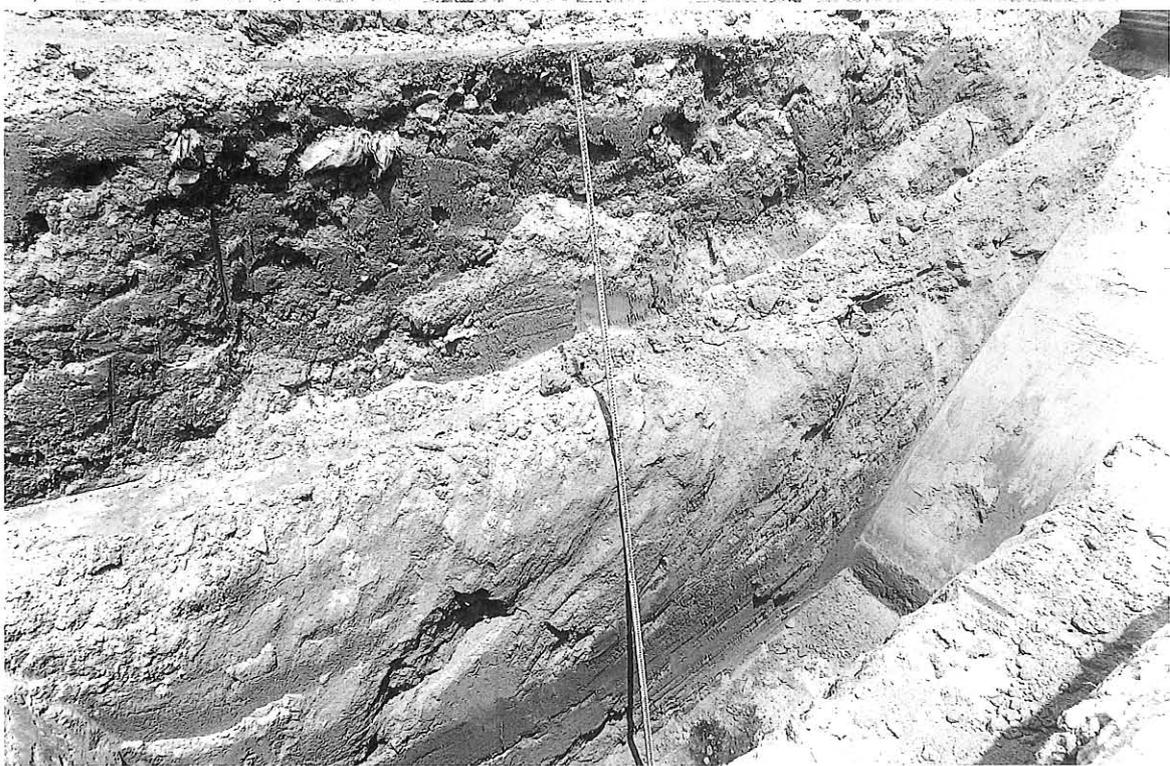
(2) Bトレンチ
(北から)



(3) Dトレンチ
(西から)



(1) Eトレンチ
(南から)



Eトレンチ土層
(南東から)



(3) Fトレンチ
(西から)



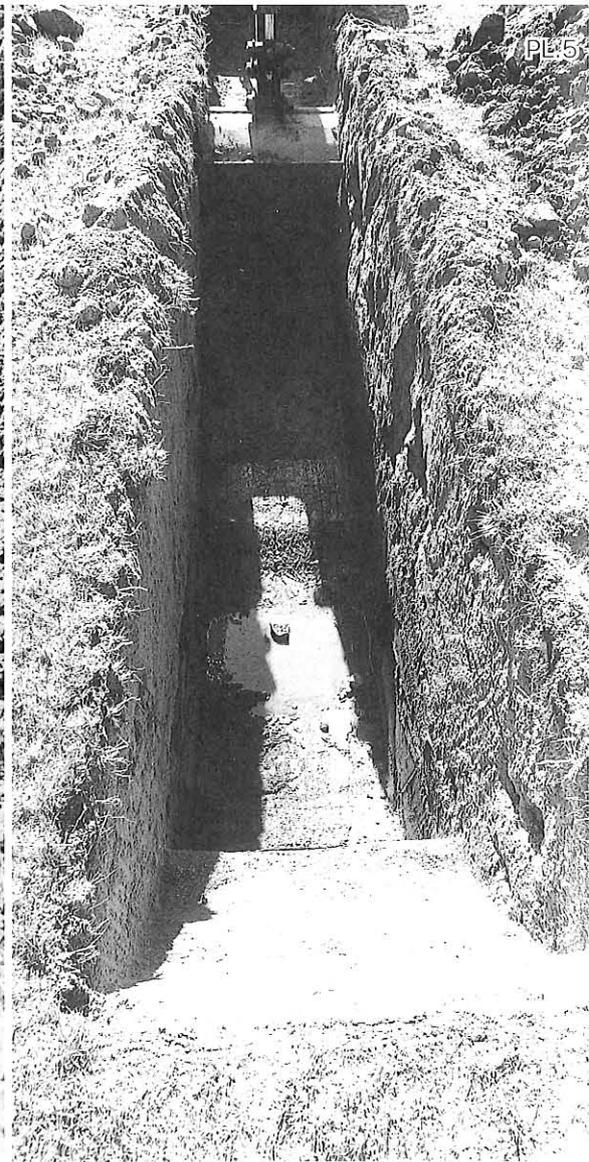
(1) Gトレンチ
(北から)



(2) Hトレンチ (北から)



(1) Aトレンチ (北から)



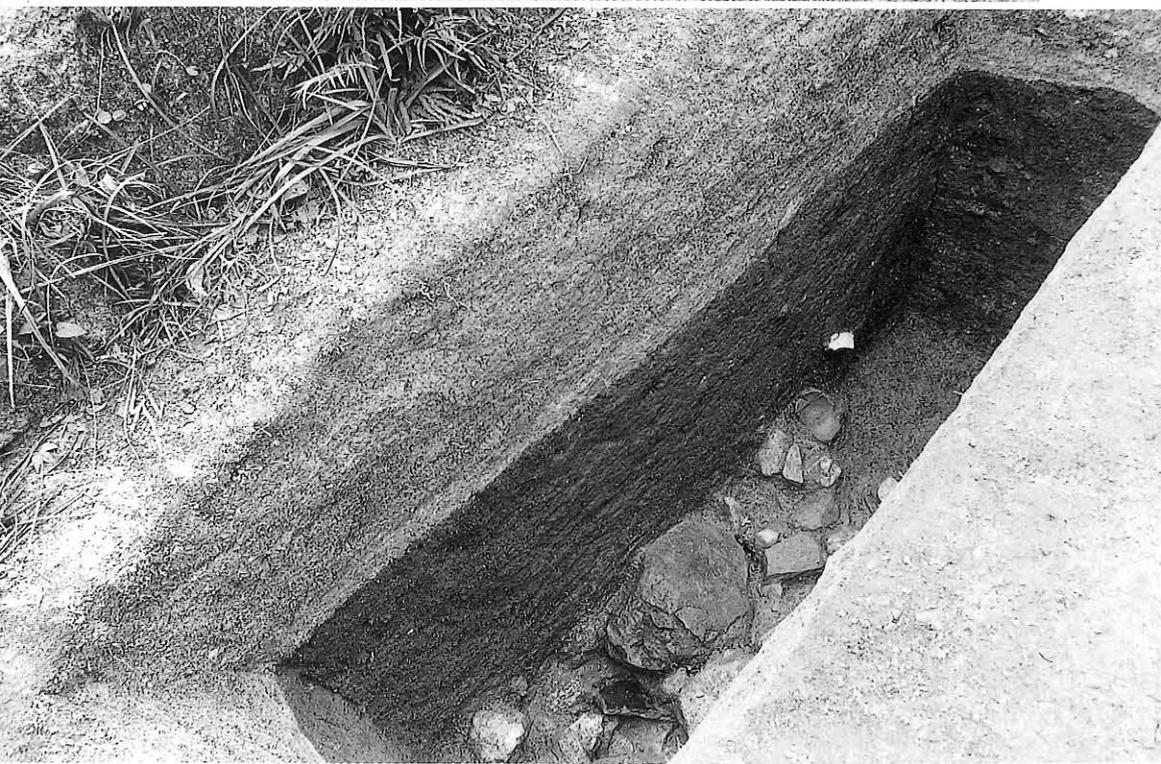
(2) Bトレンチ (北から)



(3) Bトレンチ土層 (北東から)



(1) 全景 (東から)



(2) 南壁土層
(北東から)



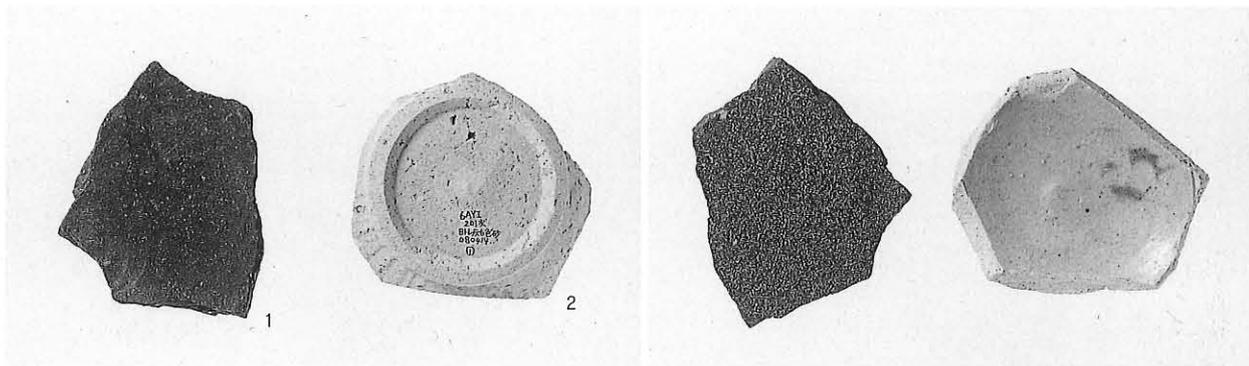
(3) 石敷遺構
S X4666 (北から)



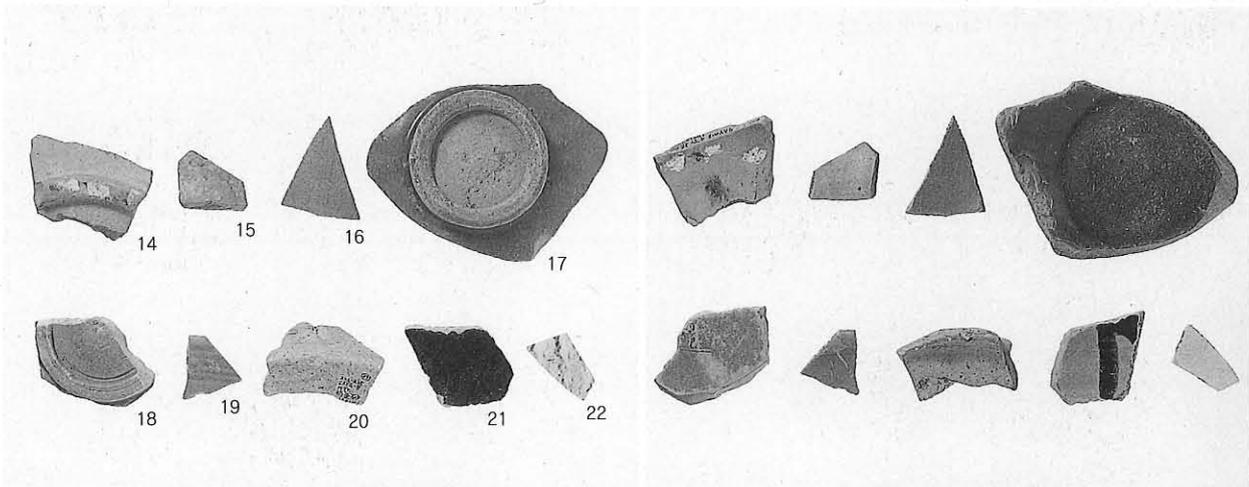
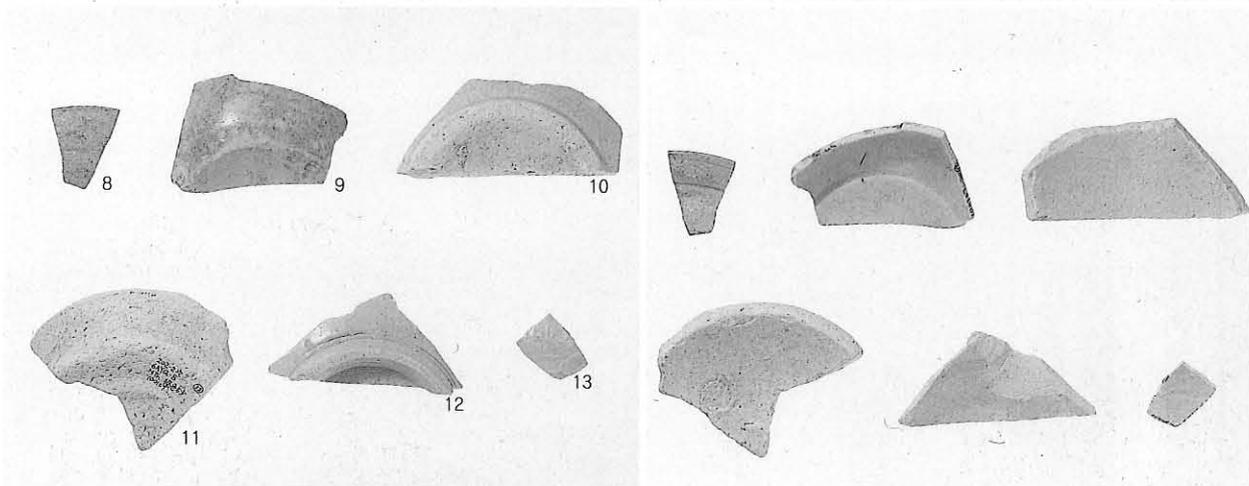
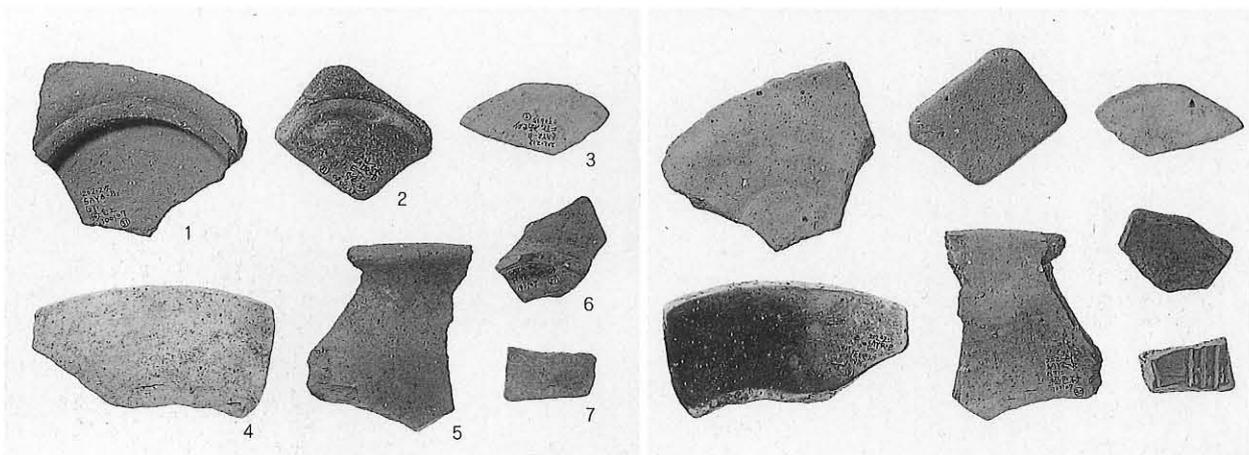
(1) 全景・東壁土層
(南西から)



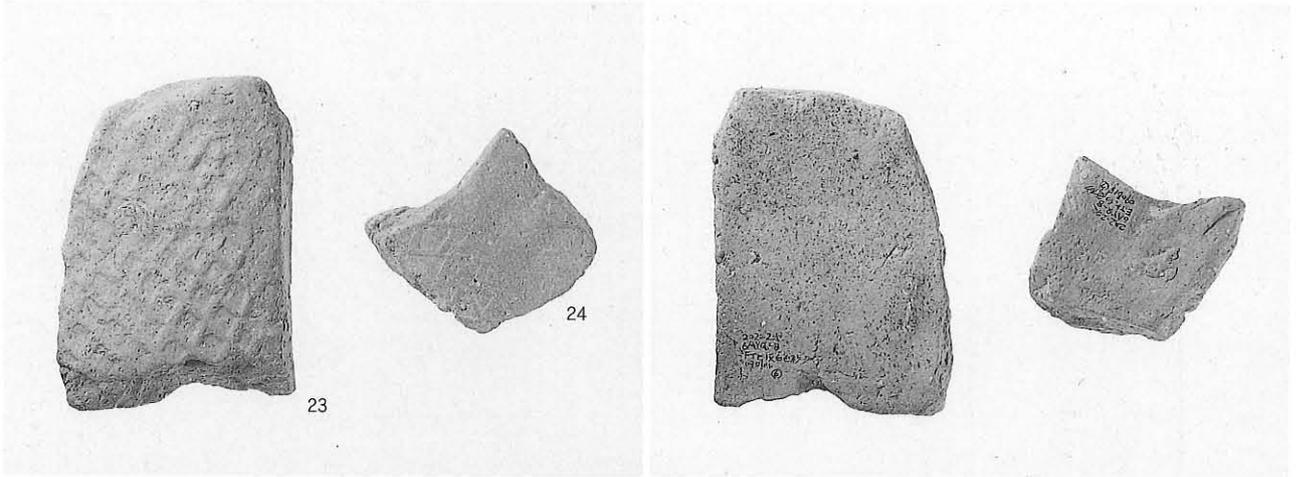
(2) 溝S D4665
(南から)



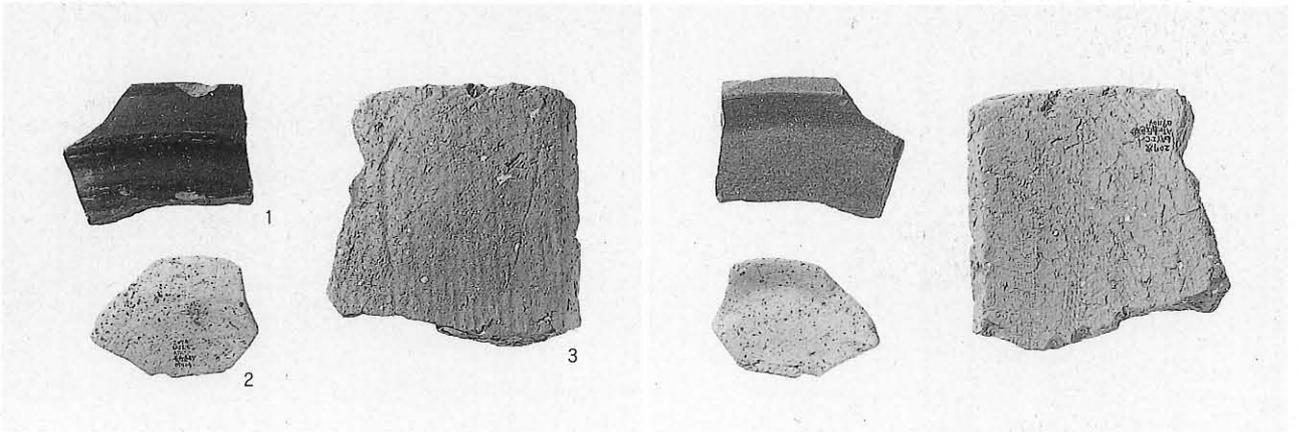
(1) 第201次調査出土遺物



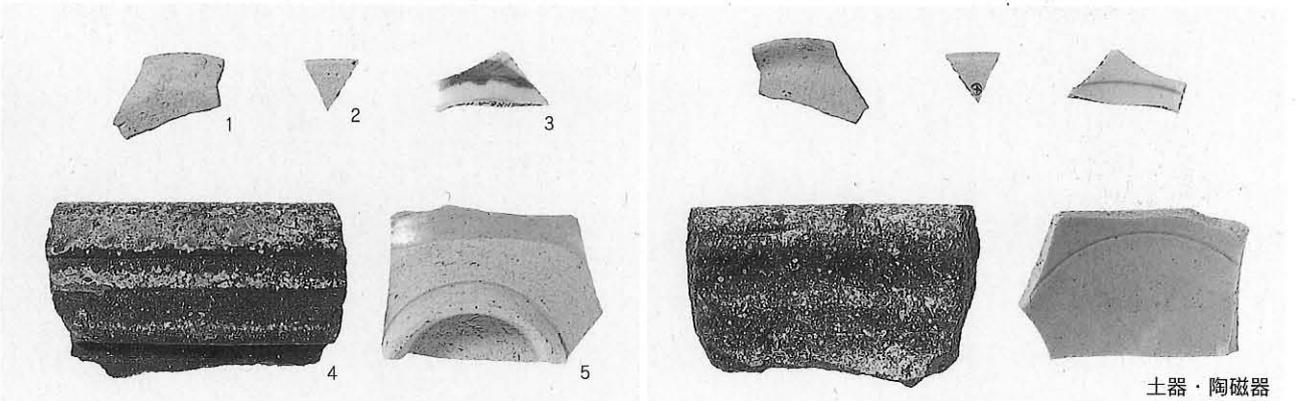
(2) 第202次調査出土土器・陶磁器



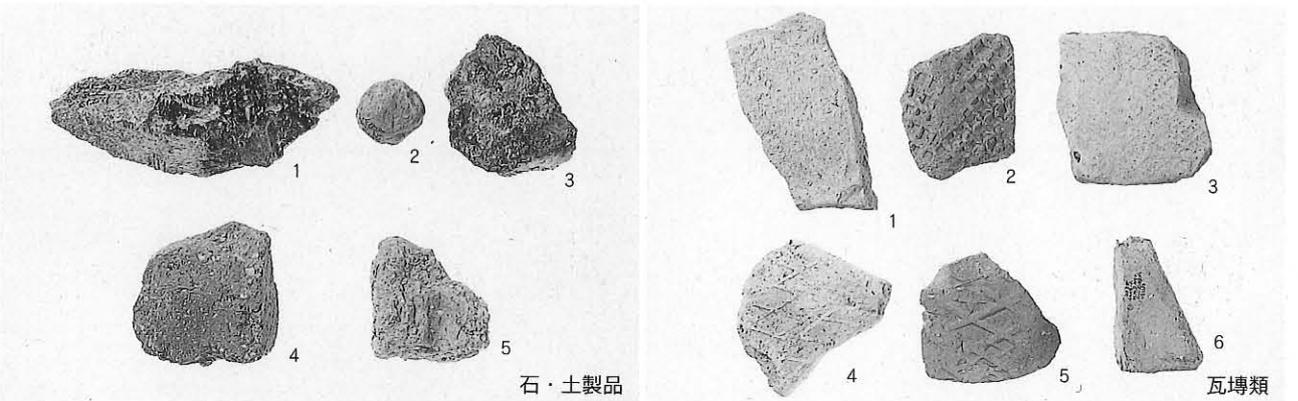
(1) 第202次調査出土瓦



(2) 第207次調査出土遺物



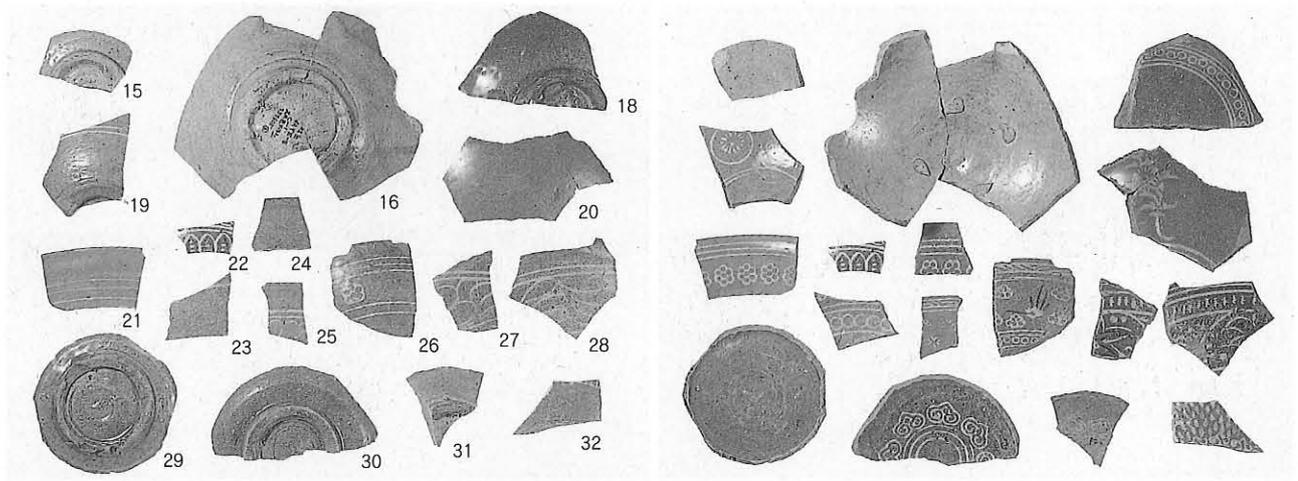
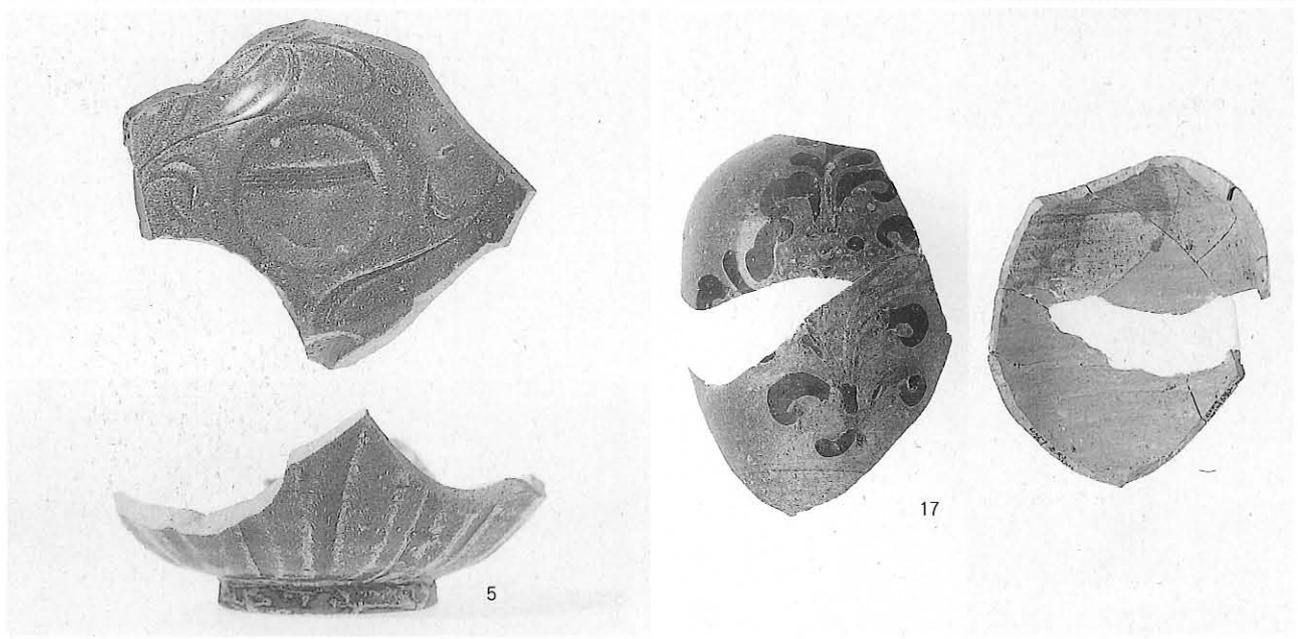
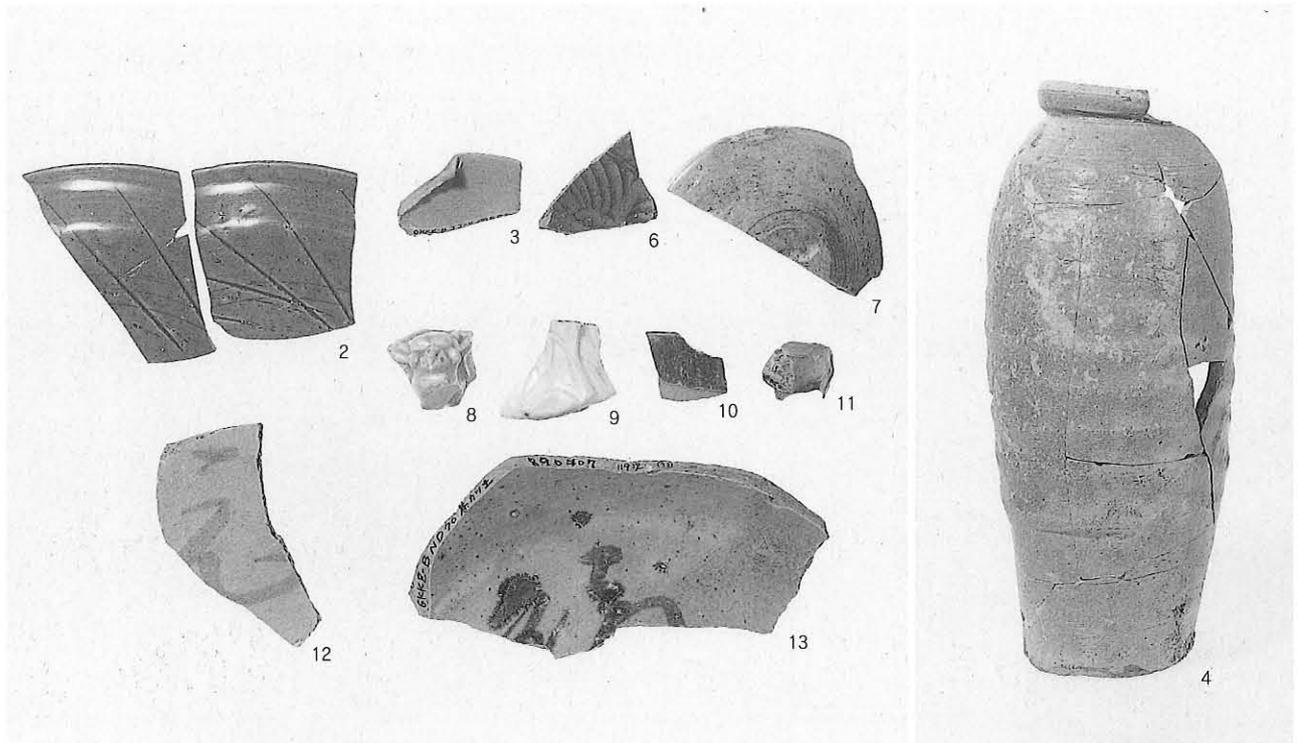
土器・陶磁器



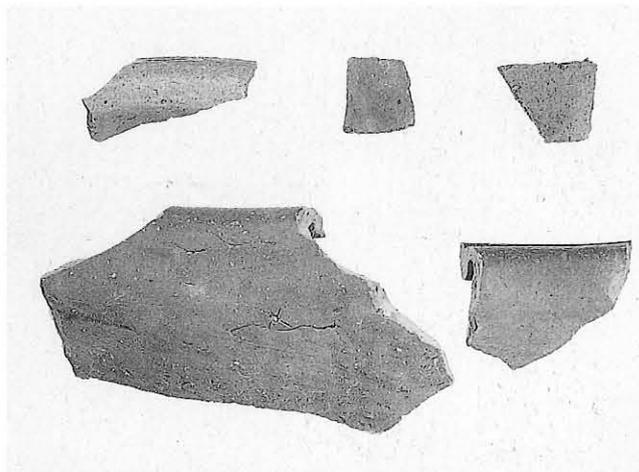
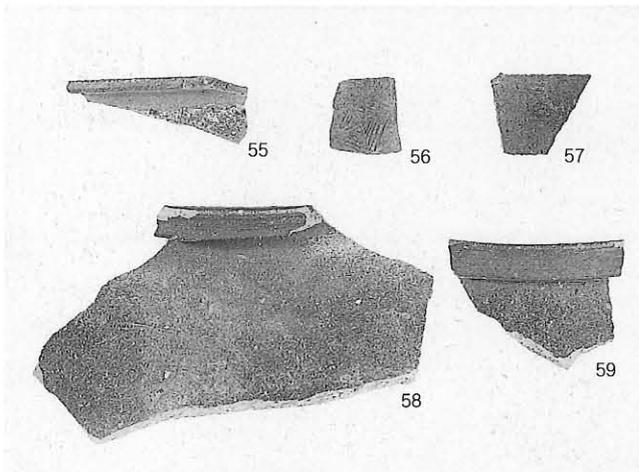
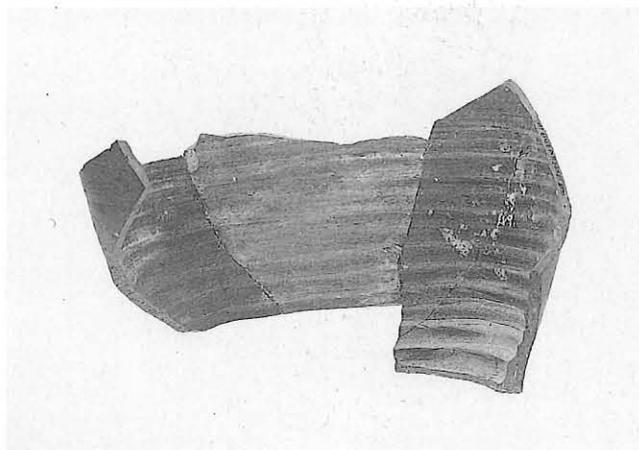
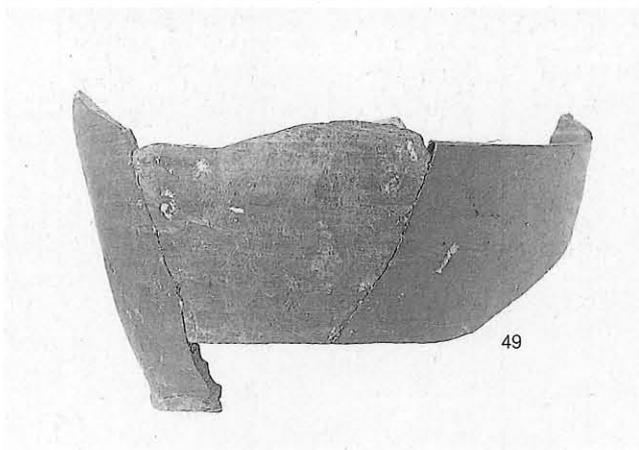
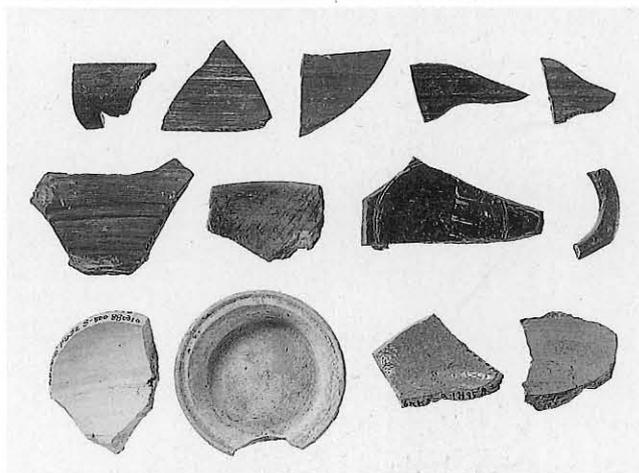
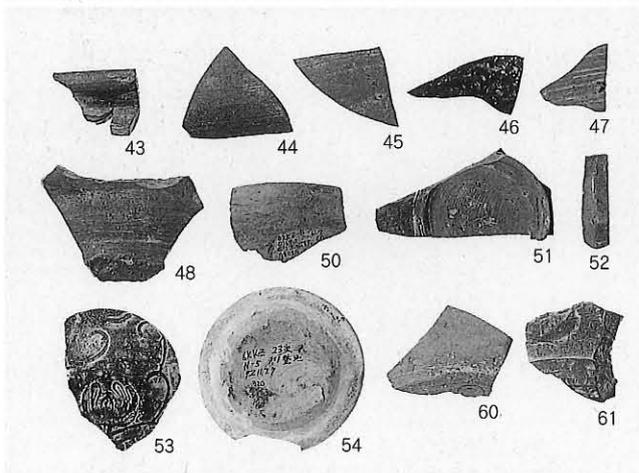
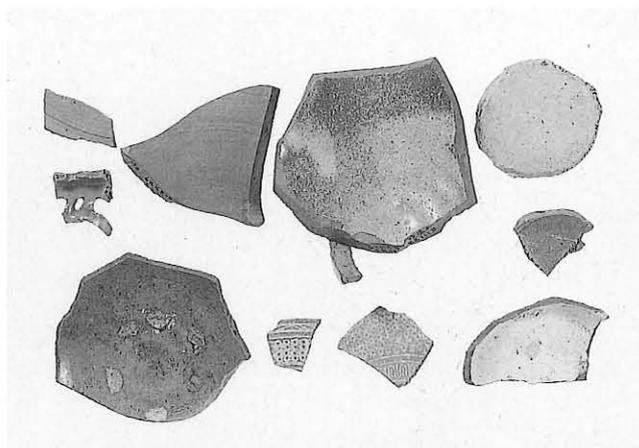
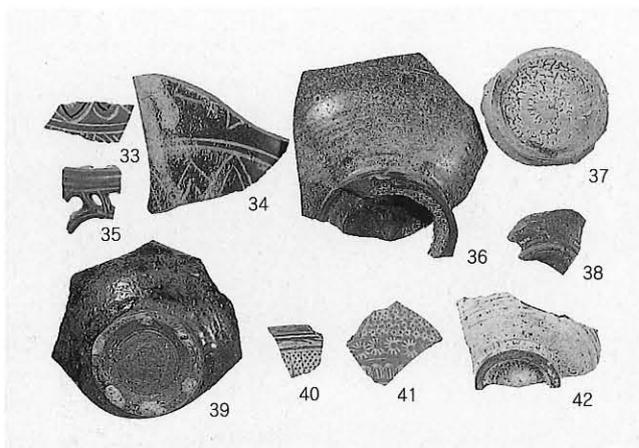
石・土製品

瓦磚類

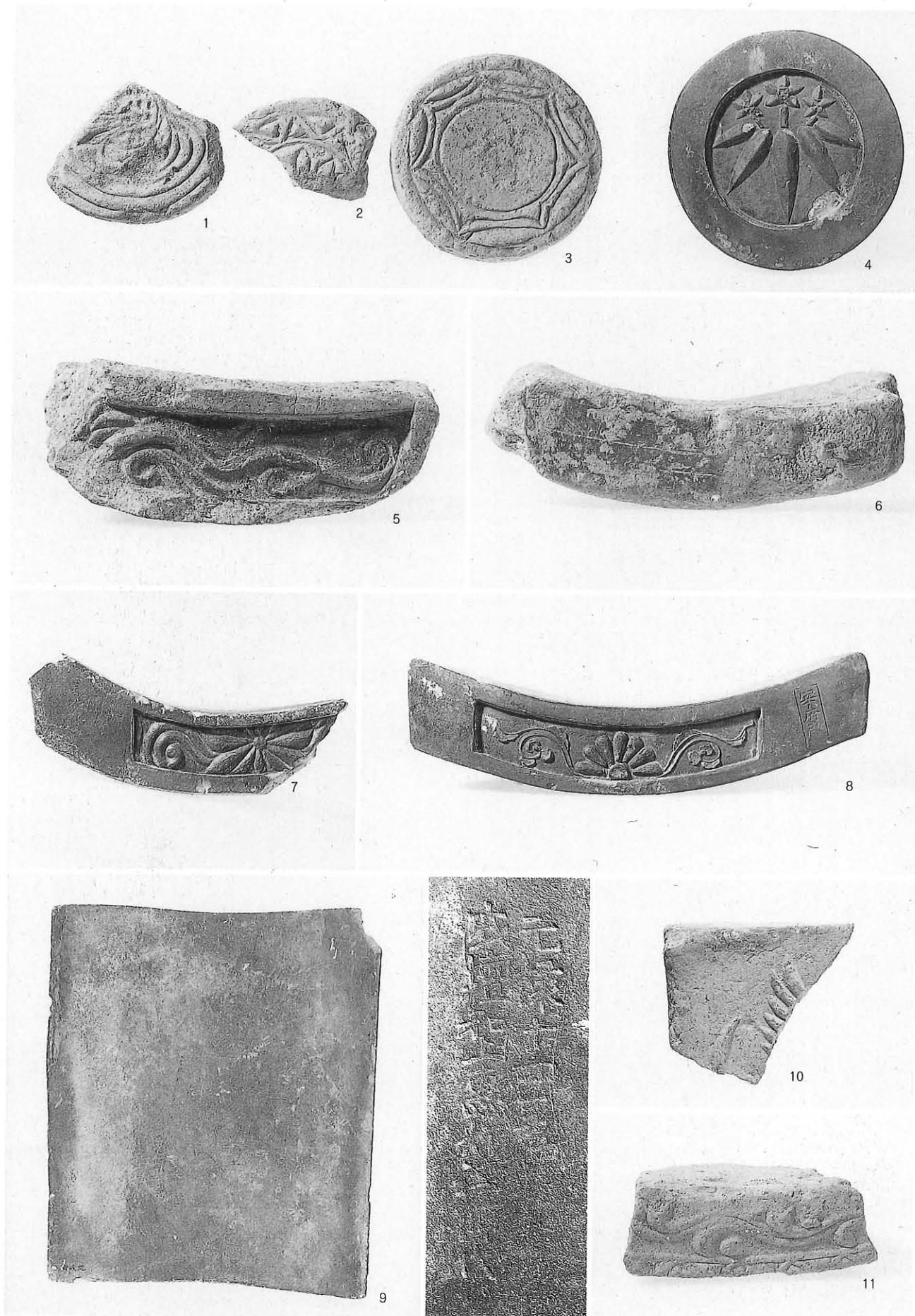
(3) 第203次調査出土遺物



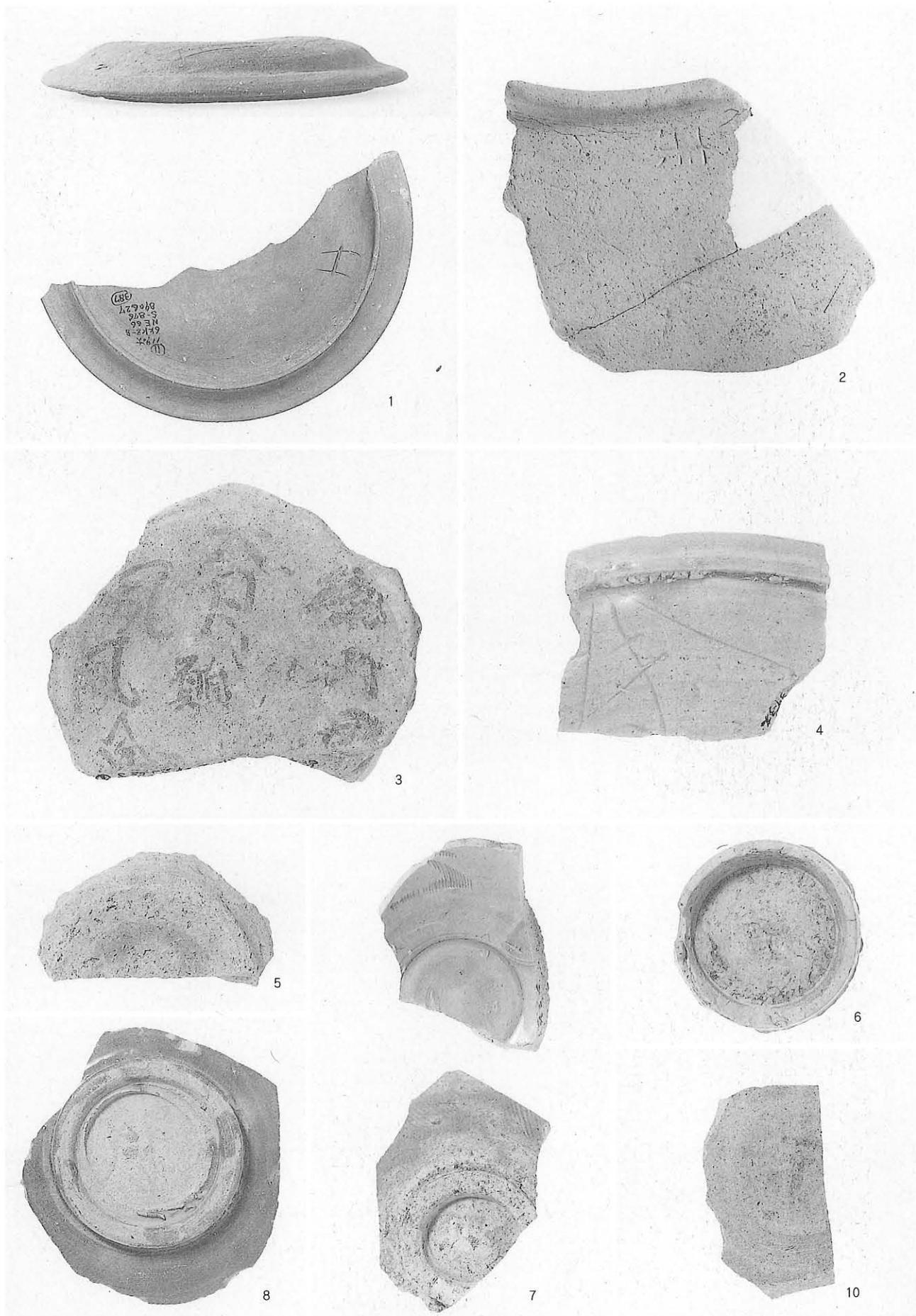
觀世音寺出土陶磁器 (1)



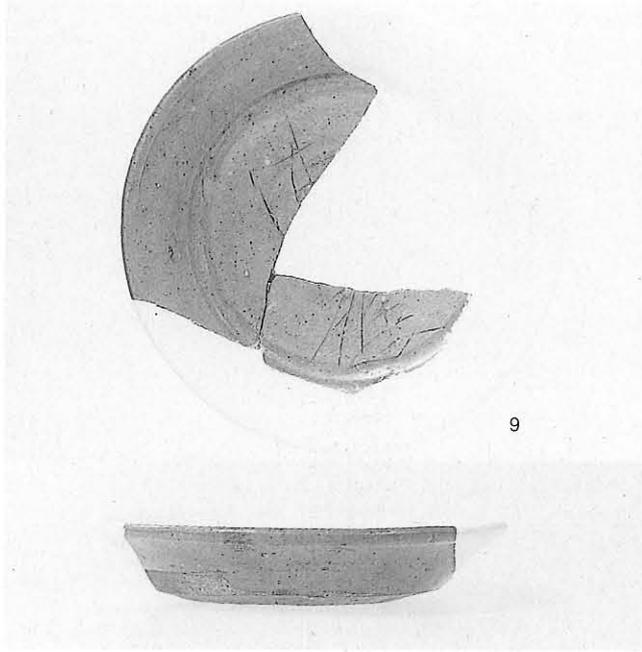
観世音寺出土陶磁器 (2)



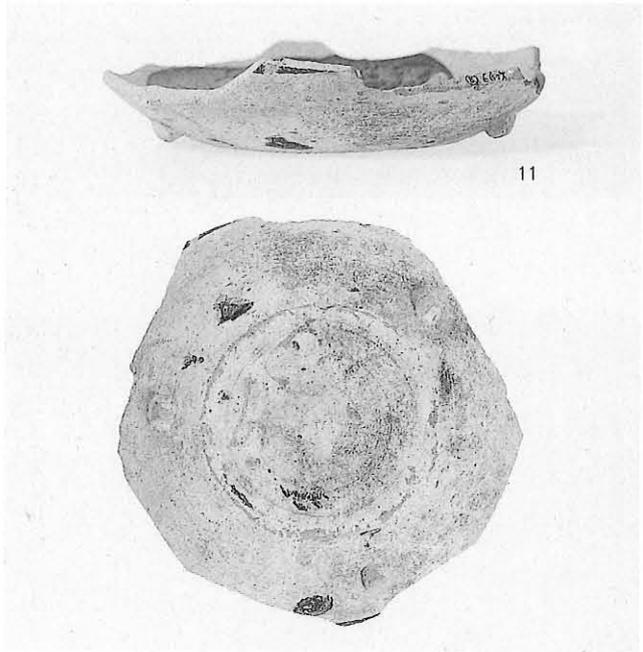
觀世音寺出土瓦磚類



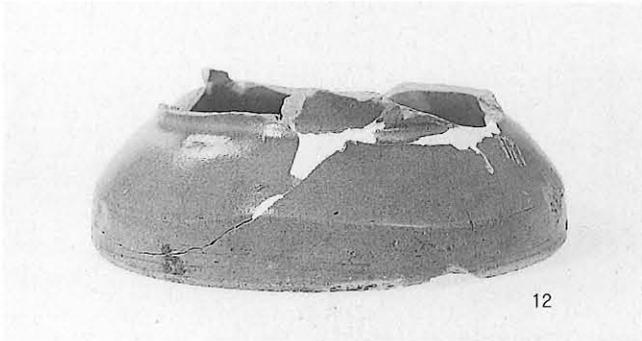
観世音寺出土墨書・刻書土器・陶磁器 (1)



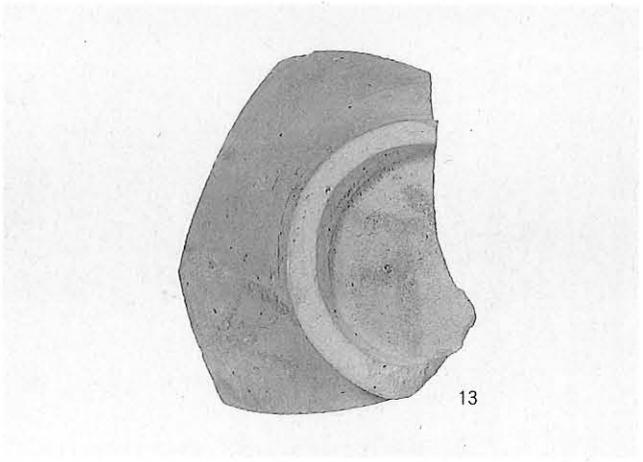
9



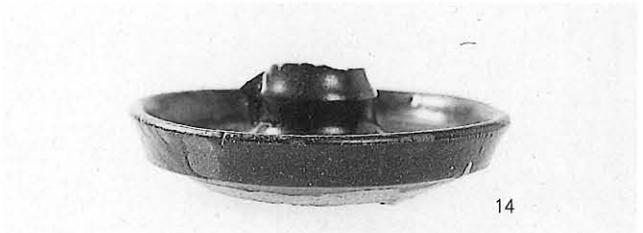
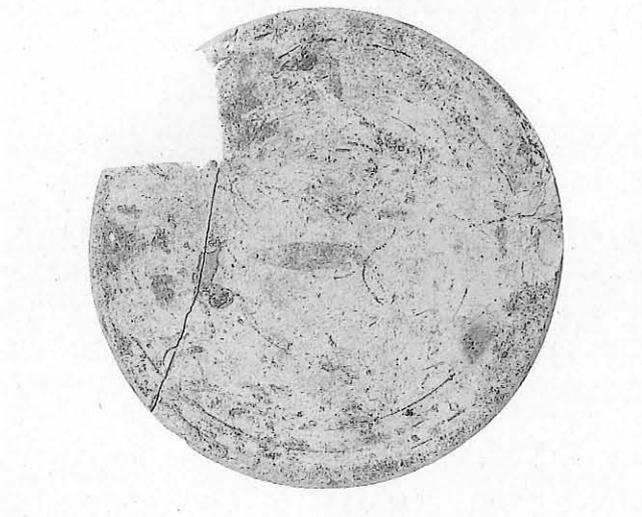
11



12



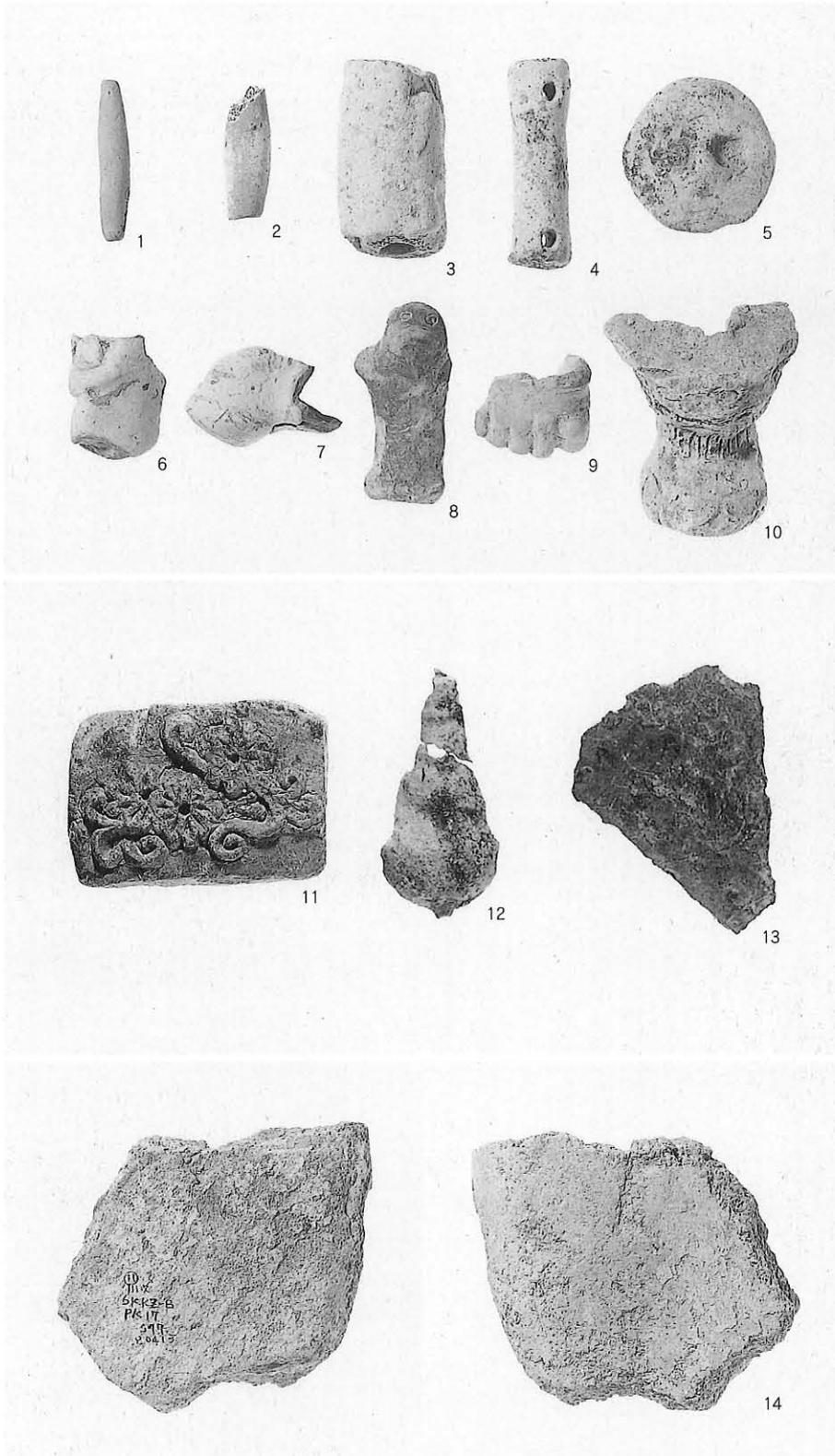
13



14



觀世音寺出土墨書・刻書陶磁器 (2)



観世音寺出土石製品・土製品

報告書抄録

ふりがな	だざいふしせきはつかつちょうさほうこくしょ							
書名	大宰府史跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次	VI 平成20・21年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小田和利・岡寺 良 (編集)・小嶋 篤・小澤佳憲・杉山真二							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒818-0118 福岡県太宰府市石坂4-7-1 TEL092-923-0404							
発行年月日	2010年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大宰府史跡 第201次調査	太宰府市観世音寺1丁目 310番	40221	210316-201	33 30 45	130 31 03	080414	8㎡	住宅建設
大宰府史跡 第202次調査	太宰府市観世音寺2丁目 303・304番	40221	210316-202	33 30 47	130 30 30	081127 090615 ～090616 100107	177㎡	消防署建設
大宰府史跡 第207次調査	太宰府市観世音寺1丁目 310番	40221	210316-207	33 30 45	130 30 59	091104	20㎡	住宅建設
大宰府史跡 第203次調査	太宰府市観世音寺5丁目 190番3号	40221	210075-203	33 30 53	130 31 12	081217 ～ 081219	3㎡	住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大宰府史跡 第201次調査	官衙	奈良・平安時代	なし		須恵器・陶磁器		洪水堆積	
大宰府史跡 第202次調査	官衙	奈良～室町時代	なし		須恵器・土師器・ 陶磁器・瓦		洪水堆積	
大宰府史跡 第207次調査	官衙	奈良・平安時代	なし		須恵器・土師器・瓦		洪水堆積	
大宰府史跡 第203次調査	寺院	平安・鎌倉・ 江戸時代	溝1条・石敷遺構		土師器・陶磁器・瓦		中世の溝 近世の石敷遺構	
要約	<p>本書は、平成20・21年度に九州歴史資料館が行った大宰府史跡の発掘調査の内、当面の間、総括的正式報告書を刊行することがない地区と、既に総括的正式報告書の刊行が終了している地区について、報告を行ったものである。</p> <p>政庁前面地区を扱った大宰府史跡第201・202・207次調査では、若干の遺物は確認されたものの、御笠川の洪水堆積層が見られるのみで、古代・中世の遺構は確認されなかった。</p> <p>観世音寺境内西辺域を対象とした第203次調査では、近世の石敷遺構と13世紀代頃に埋没したと考えられる溝1条を検出した。溝は観世音寺あるいは戒壇院に関連する区画溝の可能性も考えられる。</p> <p>また、このほかにも、平成18年度に刊行を終えた観世音寺境内出土遺物の補遺や、大野城跡の発掘調査に伴って出土した炭化材の年代測定結果および所見についても掲載している。</p>							

福岡県行政資料

分類番号 J H	所属コード 2117104
登録年度 21	登録番号 0004

大宰府史跡発掘調査報告書 VI
平成20・21年度

平成22年3月31日

発行 九州歴史資料館
福岡県太宰府市石坂4丁目7番1号

印刷 株式会社 三光
福岡市博多区山王1丁目14-4